近世イギリスのやぶ医者の社会史-一つのヨーロッパ流氓譚-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 株式会社象山社 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡崎, 康一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/17240

近世イギリスのやぶ医者の社会史

——一つのヨーロッパ流説譚——

岡崎康一

象山社

まえがき

この本は、イギリスの近世、すなわちテューダー朝からスチュアート朝（一四八五〜一七一四年）にかけての時代に生きていた、おかしくて、やがて哀しい生活者ともいうべきやぶ医者quackに関する小冊である。

やぶ医者というと、わが国でも、どこかうさん臭い、邪道の医者というイメージが思いうかぶだろう。しかし、本書であきらかになっていくように、近世のイギリス社会は、流動的で、統一性に欠けていて、そのなかで生活していたやぶ医者も、医術自体が体系化されて医学にまで成熟していなかった状況のなかで、ほとんど定義できない形の生活を送っていた。

第一、近世のイギリスにおいては、現代的な意味での判然とした職種はなかったのである。医者についても、医師という職業自体がはっきりと認められていたわけではなかった。正規の大学教育を受けて資格を取得した医師と、正規の教育を受けていない医術師とは区別されてはいたが、その区別も現代のように画然としたものではなかった。したがって、やぶ医者という名称は、ここでの仮の名称であって、民間医術師としてのその実態をあきらかにすることこそ、

本書の目的なのである。

イギリスの近世社会においても、病気はひとや階層や状況を選ばない。苦しみや痛みはいわば普遍的なものであった。その苦しみや痛みから解放されたいというひとびとの願望もまた普遍的なものであった。ひとびとは、苦しみや痛みから解放してくれるものなら、ある意味であらゆる手段にたよった。

苦しみや痛みがもたらす緊急の状況においては、ひとびとは正規の医師か、民間の医術師かといった選択をしている余裕はなかった。一般のひとびとは一刻も早く苦しみや痛みを和らげてくれる一服一錠の薬がほしかったのである。

選択肢を許さないそのような近世的状況は、じつは、正規の医術（医学ではない）よりも、非正統的な民間の医術を発展させることになったのである。それは、なによりも民間医術のほうがひとびとにとって、日常的に、また経済的に近づきやすく、そうした需要が民間医術師たちの医術的技術、医術的知識、医術的経験を豊富にしていったからである。

実際、近世においては、数字のうえでも、正規の医師よりも民間医術師のほうがはるかに多かった。しかも、統計的に圧倒的に多かった彼らquackについては、資料不足、定義の困難さといった理由から、これまでそれほど研究対象としてとりあげられることはなかった。この本は、一般にやぶ医者と蔑んで呼ばれていたそのような民間の医術師・治療師たちの生活誌にわずかな光をあてようと試みたものである。

やぶ医者と呼ばれていたひとびとは、ある日忽然と町はずれや村の広場に、どこからともなく姿を現し、そしてまた忽然とどこかへ姿を消すといった、普通のひとびととはまったく異なる生活者であった。それは、いずこからともなく現れ、またいずこともなく韜晦するいわば異人だったのである。

したがって、そうした定義のできない生活者をあつかった本書を分類することはきわめてむずかしいに違いない。表題は『近世イギリスのやぶ医者の社会史』としたものの、この本を書いているときのわたしの思惟は、民俗誌にも、歴史にも、社会史にもぴったり当てはまるものではなかった。たとえば、わたしはたしかにフランスのアナール派の人たちの影響を感じてはいるが、読後、読者がこの本をどのように分類するかさえわからない。一介の英文学者としては、本書で展開されるわたしの思惟のパラダイムは、社会人類学、あるいは歴史人類学に分類されるのではないかと思う。

現代は学際的な時代だとよくいわれる。しかし、その学際性は、奇を衒ったり、人を煙にまくようなものではなく、研究する本人の思惟の内的必然性から生じたものでなければならないはずである。本書も、現代詩を専門にする一人の英文学者の必然的な内発性の結果である。

一九九五年九月二十六日

著者識

凡例

一、この本の考察対象はイギリスの近世であるので、一般的な状況をさす場合をのぞいて、その実質的内容をかんがえ、「医学」という用語を避け、おもに「医術」と表現することにした。

二、この本の中心となる医者に関する表現（記）について。

ここで考察する「やぶ医者」、「ニセ医者」、「民間治療師」、あるいは「香具師」にあたる原語は、じつは考察を挫折させるほど多種多様である。もっとも一般的に使われたquackをはじめ、empiric, charlatan, mountebank, itinerant doctor, folk healer, irregular physician, fringe physician, unorthdox practiser, また、なかには近世の民間医療によくみられた検尿の習慣からpiss prophetといった表現まであって、近世の同時代人、現代の歴史学者、社会学者などによってじつにさまざまである（くわしくは本書第三章参照）。「やぶ医者」、「ニセ医者」という日本語は、例えばquackの訳語としては不十分であるばかりでなく、実態をまちがって誤解させる可能性もあって、じつは適切な表現ではないのだが、

「香具師」としてしまうと、別種の誤解をまねくおそれがでてくる。ほんとうは香具師的行商医とでもするのがふさわしいのだが、これではあまりにも説明的になってしまう。そこで、この本では、一般的論述の際は「医者」とし、その「医者」を、正規の教育を受けた「医師」と、民間治療師である「やぶ医者」とに二分（実際はできないのだが）し、混乱・混同をできるかぎり避けるよう配慮した。

三、やぶ医者、ニセ医者を生む母胎となったひとびとについても、主人なきひとびと masterless men, 放浪者 vagabonds, vagrants, rogues など、いくつかの表現があるが、近世という歴史的状況をかんがえ、この本では「漂泊民」とすることにした。

第一章　〈整合空間〉と〈異空間〉

やぶ医者の社会史を語るには、そのやぶ医者が生きていた社会について基本的な状況を語るのがまず常道だろう。したがって、この章で、わたしはわたしなりの仮設をたてたうえで、近世のイギリス社会を概観してみようとおもう。

スペイス・シャトルが飛行任務を終え、ふたたび地上に帰ってくる現代とちがって、人類の科学的知識は、近世の段階では、いまだ不十分なものであった。科学はまだ試行錯誤の途上にあって、さまざまの科学的概念も収斂しきれないでいた。したがって、医術も、医学といえるような体系的なものにはなっていなかった。

わたしがこの本でとりあげようとしているのもそうしたイギリスの近世の社会における未熟な医術である。イギリスの近世といってもやや漠然としているので、考察の対象となる時代をはっきりさせておこう。それはテューダー朝（一四八五―一六〇三年）から、スチュアート朝（一六〇三―一七一四年）にかけての時期である。

とはいっても、歴史はいわば生きものであるから、わたしの論述はこの時期をやや越える部分もでてくるだろう。したがって、テューダー朝からスチュアート朝という時期も、この本の粗笨な枠組みとしてかんがえていただきたい。

近世のイギリス社会は、社会的階層という点からいえば、上は至上権をもつ国王、貴族から、下は極貧民あるいは棄民といっていいひとびとにいたるピラミッド型の社会であったが、こうした階層構造は決して固定的ではなく、流動的なものであった。例えば、ヨーマンといわれるひとびとのことをかんがえてみるがいい。ヨーマンとは、ふつう、自作農民、小地主、郷士などと邦訳され、国会議員を選挙する権利をもつ年収四〇シリングの自由所有権保有者 freeholder をさしている。要するに、社会的ハシゴを上昇してきた中規模の農民の総称とかんがえられている。

しかし、ヨーマンたちは、その社会的ハシゴの上昇の加減によって、ジェントリ階層と、小規模農民あるいは賃金労働者へと分化した。すなわち、この社会的ハシゴをうまく上昇できた者はジェントルマンになることができたが、その反面、このハシゴをのぼりきれなかった者は賃金労働者になるしかなかった。したがって、ヨーマンという階層にしても固定的なものでは決してなかった。

近世のイギリス社会には、社会的地位の上昇下降といういわば垂直の流動と、人口の移住(動)にみられるいわば水平の流動とがみられた。例えば、「土地の囲い込み」といった他律的原因で本貫を放逐され、漂泊民にならざるをえなかったひとびとの移動距離に関する最近の研究(注1)によると、その最長距離は二〇〇マイル以上にまでおよんでいる。一五一六年から一五六六年にかけて、ロンドンで逮捕された漂泊民に関していえば、五〇マイルまでの移動距離がもっ

とも多いのは当然だとしても、二〇〇マイル以上離れたところからロンドンにきた者が一七・一パーセントもいる。また、一六二一年から一六三八年にかけてウィルトシャの治安官のもとで尋問された漂泊民のうち二〇〇マイル以上移動してきた者は全体の一四・一パーセントもいる。

いう必要もないかもしれないが、当時の移動は、むろん、徒歩である。また、イギリスが日本などより気候的に寒冷である点もかんがえると、二〇〇マイルの徒歩移動がいかに労苦の多いものであったか、ある程度は想像できるであろう。なぜ、彼らは、それほど遠いロンドンをめざしたのであろうか。それは、当時からロンドンがメガロポリスで、たとえ日雇いであれ、臨時雇いであれ、職につく可能性がほかの都市より大きかったからである。

わたしがこの本であつかうやぶ医者も、こうした漂泊民のなかから生まれてくることが多かったわけだから、つぎに近世イギリスにおける漂泊民の発生の原因をかんがえてみたい。

イギリス近世社会の最大の証人であるトマス・モア（一四七八―一五三五年）は『ユートウピア』（一五一六年）のなかでつぎのように述べている。

ですから飽くことを知らない貪欲、祖国をむしばむ恐ろしい疫病でもあるような貪欲というあのひとりの男が、畑を合併して何千エーカーもある土地を一つの垣で囲い込めるために、小作人は追い立てられるのです。彼らのなかには、財産を詐欺的手段でまきあげられたり暴

力的抑圧で没収されたり、うんざりする不当ないやがらせで売却を余儀なくされる人もいます。それゆえ、離村の状況はさまざまであっても、とにかく離村せねばならないのがこの惨めなひとびとです。男と女と夫と妻が、孤児と寡婦が、幼児を連れた親たちが、――農業には多くの人手が必要ですから――どちらかといえば貧しいけれど頭数だけは多い家族を連れて出て行きます。

よく見てください。彼らは、自分たちのなつかしい、住みなれた家から出て行きますが、身を宿すところを見つけることはできません。家財道具は、買い手がでてくるのを待つ余裕があったとしてもどうせ高くは売れないものだが、今はとにかくかたづけることが先決なので彼らはそのいっさいをほとんどただ同然で売り払ってしまいます。その金を放浪中、僅かのあいだに使い果たしてしまうと、あとは盗みをやって、そのあげく――正当にも――絞首刑に処せられるか、それとも放浪しながら物乞いするか、この両者以外にはどういう道が彼らに残されているでしょうか。しかし物乞いに出かけても、彼らは結局浮浪人として牢獄にぶちこまれます（注2）。

ここには炯眼のトマス・モアならではの観察がある。貪欲なひとりの男によって広大な土地が囲い込まれ、それによって農民たちがなつかしい生まれ故郷からの放逐を余儀なくされる、他律的離郷現象がなまなましく指摘されている。また、その他律的離郷の末路には、盗みや物

乞いしか待っていなかったのである。

近世のイギリス社会は、このように社会階層の上下動ばかりでなく、こうした他律的離郷によって定住的生活から追放された漂泊民にみられるような人口の水平運動も多くみられた。そして、国内を水平に移動せざるをえなかった人口の末端に、二〇〇マイル以上も歩いて移動したひとびとがいたのである。

したがって、近世のイギリス社会には、上下動だけでなく、水平性をもつ流動があったといっていいだろう。こうした複雑で、多層的な流動性をもつ近世のイギリス社会を考察してゆくために、わたしは〈整合空間〉と〈異空間〉という仮説的道標をこれから使っていこうとおもう。こうした仮説的道標でもないかぎり、近世イギリスの社会の全体像をみることはできないとかんがえるからである。

そこで、仮説であるがゆえに、その〈整合空間〉と〈異空間〉についてここで説明しておかなければならない。

まず、〈整合空間〉だが、わたしにこの仮説を思いつかせたのは、テューダー朝からスチュアート朝の時期にかけてだされた二十本あまりもの貧民救済法（以後、救貧法とする）である。一五三一年から一六九七年までのあいだにだされたその二十本あまりの議会制定法の全文を掲げる紙幅はないので、つぎにそれらの議会制定法のタイトルと要旨だけを紹介しておこう。

○一五三一年、「乞食ならびに漂泊者の処罰」

1　（以前のようなさらし台にかけるかわりに）漂泊者を鞭打ちの刑に処し、三年間、出生地もしくは居住地に送還する。
2　判事、市長、執行吏等による乞食行為認可を取得できない虚弱者を対象にする。

○一五三六年、「健常漂泊者ならびに乞食の処罰」
1　送還された漂泊者は就労し、児童は奉公にだす。
2　すべての教区において、虚弱者のための自発的寄付を、毎週、教区委員ならびにほかの二名が徴収し、その処置の明細を報告する。
3　臨時の寄付は禁止するが、多くの条件は認める。

○一五四七年、「漂泊者の処罰と貧困者ならびに虚弱者の救済」
1　漂泊者は、二年間、奴隷にしてもよい。
2　児童は奉公にだし、老齢貧困者には仕事をあたえ、乞食のできない虚弱者のための寄付金を毎週集金する。

○一五五〇年、「漂泊者ならびにその他の不労者の処罰」
1　漂泊者に関しては一五四七年の法を廃棄し、一五三一年の法を復活する。
2　貧困児童は奉公にだす。
3　虚弱者は救済し、許可ある場合をのぞいて、乞食行為は認めない。

○一五五二年、「貧困者についての支給と救済」

1　一五三一年と一五五〇年の法を確認する。
2　すべての教区において寄付の徴収者を選出し、処置の明細を報告する。
3　虚弱貧困者に対する救済について（教区）簿冊に記録し、なんびとの乞食も許可しない。

○一五五五年、「貧困者の救済」
一五五二年と同様、鑑札を着用しなければならない許可乞食には規定を設ける。

○一五六三年、「貧困者の救済」
一五五五年の法に追加。主教による勧告後も貧困者への寄付を拒絶する者は、醵出金を課すことのできる治安判事のもとに出頭しなければならない。貧困者のための寄付金徴収者になることを拒否する者への罰金。

○一五七二年、「漂泊者の処罰と、貧困者ならびに虚弱者の救済」
1　この年以前の諸法を廃棄すること。
2　漂泊者は鞭打ちの刑に処し、徒弟になる場合をのぞいて、裁判所定期会議の命により、耳を焼きおとす。
3　治安判事は老齢の、衰弱した虚弱貧困者の氏名を記録し、救貧額を決定し、すべての教区居住者に、醵出しなければ投獄するとして、毎週の貧困者救済金を課す。
4　醵出金の徴収者と民生委員を任命し、貧困者に関する概要と調査を毎月作成する。
5　送還された漂泊者は就労させ、児童は奉公にだす。

6　ほかの手段では救済しきれないほど数が多い場合、治安判事は乞食に許可をあたえてもよい。

○一五七六年、「貧困者の救済と不労者の防止」

すべての町に貧困者が就労するための在庫原料を確保し、就労を拒否する者のためにすべての州に矯正院を設置する。

○一五九八年、「貧困者の救済」

1　すべての教区委員と四名の民生委員は、児童と貧困者を就労させ、虚弱者を救済し、貧困児童を徒弟として奉公にだし、これらの目的のために、すべての住民と教区居住者に課税する。

2　二名の治安判事は民生委員を指名し、その明細を記録する。

3　治安判事はほかの教区を援助するためにいくつかの教区に課税してもよい。また、（裁判所定期会議において）地方税に対する懇請を聴取しなければならない。

4　所属教区で食料の乞食を認められた者以外、乞食行為を禁止する。

○同年、「無宿者、漂泊者ならびに健常乞食の処罰」

1　以前の対漂泊民法（Vagrancy Acts）を廃棄する。

2　治安判事あるいは教区執行吏の命により漂泊者を鞭打ち刑に処し、一年間、通行手形を携帯させ、出生地あるいは最後の居住地に送還する。

3　危険かつ矯正しがたい無宿者は投獄し、裁判所定期会議によって追放することができる。

○一六〇一年、「貧困者の救済」

実質的には一五九八年のRelief Actと同様。ただし、食料の乞食に関する言及を削除し、小さな教区では二名の民生委員で十分とする。

○一六〇四年、「疫病感染者に関する慈善救済と指令」

感染者のための地方税と、感染家屋を放棄した者に課す罰金。

○一六一〇年、「無宿者ならびにその他の邪悪な不労者に対する法のしかるべき執行」

無宿者、私生児出産者、その他の怠惰で風紀を紊乱する者に対して、すべての州に矯正院を設置する。

○一六四七年、一六四九年、「ロンドン市における貧困者の救済と雇用、ならびに漂泊者その他風紀を紊乱する者の処罰に関する議会法令」

ロンドン市長を長とし、地域によっては区によって選出された補佐役を置くロンドン貧困者市制地区のこと。救貧院と矯正院を設置し、漂泊者に対する法を強制し、貧困者を就労させること。これらの目的のために地方税を市議会に要求することができる。

○一六六二年、「本王国の貧困者救済の改善（定住化法）」

1　教区への新移住者が、四十日以内に苦情の対象になったり、家賃十ポンド以上の家を賃貸した場合、その新移住者は二名の治安判事により退去を命じられる。居住教区の証明

書がある場合は、状況によっては居住を認められる。

2　ロンドンの貧困者市制地区、ならびに周辺諸州におけるほかの市制地区の継続を維持する。

3　北部の大教区ならびに町区にそれぞれ民生委員を置く。

○一六九二年、「貧困者の定住化に関する先行法の欠陥補正」

1　地方税納税、徒弟ならびに一年間の年季奉公をもって定住民とする。

2　教区民代表者会は、毎年、年金受給者表を承認し、治安判事の権限による場合をのぞいて、名前の追加は認めない。

○一六九六年から一七一二年にかけての制定法。

救貧院を設立する権限、ならびに教区に対するさまざまな権限をもつ貧困者市制地区を十四の町に設置すること。

○一六九七年、「貧困者救済法における欠陥の補正」

1　証明書携帯の新移住者は、負担になる場合のみ退去させることができる。

2　救貧金を受給している者は鑑札を着用すること。

3　貧困者の徒弟の受け入れを拒否する者に対する罰金。

これらの法律はれっきとした救貧法である。しかし、そこに使われている「処罰」、「さらし台」、「鞭打ちの刑」、「送還」、「奴隷」、「鑑札」、「耳を焼きおとす」、「矯正院」、「投獄」、「追

放」、「退去」といった用語は、はたして、救済を定義するものであろうか。これらの法律は、救済をうたう表層とはうらはらに、実際は懲罰性の濃厚な法律ではなかっただろうか。

とくに、耳を焼きおとしたり、鑑札の着用を求める姿勢は、貧民、漂泊民、乞食に対する賤別 stigmatization 以外のなにものでもないだろう。しかも、その貧民や漂泊民や乞食は、トマス・モアも指摘しているように、他律的離郷によってやむをえずそうなったひとびとだったのである。暴力的に本貫から追放された農民たちを待っていたのは、捕縛、投獄、鞭打ち、あるいは耳の焼きおとしといった実刑だった。そして、こうした懲罰性の強い法律を案出したひとびとが参画していたのが〈整合空間〉だったのである。

近世のイギリス社会には、司法制度がなかったわけではなく、こうした臨発的な救貧法のほかにも、だいたいつぎのような司法制度があった。

王座裁判所	the court of King's (or Queen's) Bench
大法官裁判所	the court of chancery
市長裁判所	the mayor's court
領主裁判所	the manorial court
バラ裁判所	the borough court
教会裁判所	the church court
民訴裁判所	the court of common pleas

巡回裁判所	the assize（一五九〇年以降は重罪を担当。一九七一年以降は the crown court がこれにかわった）
四季裁判所	the quarter session
小治安裁判所	the petty session
聖職の特典	the benefit of clergy
受胎審査陪審	the jury of matrons
宗教裁判所	the ecclesiastical court
ロンドン監督法院	the London consistory court
アーチ裁判所	the court of arches
少額債券裁判所	the court of requests
星室裁判所	the Star Chamber
財務裁判所	the court of Exchequer
高等宗教官裁判所	the court of High Commission
王室増加収入裁判所	the court of Augmentations
王領地総調査裁判所	the court of general surveyors
後見裁判所	the court of wards and liveries
大学裁判所	the University court

しかし、これらの司法制度も、現代的な意味で確立していたとはとうていいえなかった。これらの制度のうち、一般民衆に深いかかわりがあったのは、民訴裁判、巡回裁判、四季裁判、小治安裁判、聖職の特典、受胎審査陪審などである。そして、これらの制度も、巡回裁判、四季裁判などが象徴的にしめしているとおり、常設的な制度ではなかった。このなかでも、聖職の特典と受胎審査陪審はあまりなじみがないかもしれないので、ここで簡単に説明しておこう。聖職の特典というのは、裁判が長期化したり、結審に近づいた場合など、きびしい裁定を避けるために、裁判の場を教会内に移して裁判をおこなうことであり、また、受胎審査陪審というのは、容疑者や被告の女性が懐妊の事実を告げ、情状酌量を訴えた場合、その事実の真偽を認定する科学的知識のなかった近世の司法官が、既婚の経産婦の援助をえて、懐妊の事実の真偽を判定する制度のことである。司法制度に常設性がまだなかった点、そして科学的判定法のなかった点はまことに近世的である。

こうした未熟な司法制度のなかでだされた救貧法の案出者でもあった〈整合空間〉の発想もまた未熟だったといわざるをえない。これら二十本あまりの救貧法にしても、抜本的解決策を模索するというより、社会のあちこちにみられた破綻、亀裂を法の名のもとに泥縄式に糊塗しようとするものであった。糊塗するということは、矛盾あるいは破綻している要因を、表層的に一つの社会のなかに整合しようとすることであろう。わたしが〈整合空間〉とよぶ所以である。

つぎに〈異空間〉であるが、〈異空間〉の住人にはまずおおむね二種類あったとおもわれる。すなわち、存在的に〈整合空間〉になじまないひとびと（G・ジンメルにならって〈異人〉といってもよかろう）と、他律的な原因で〈整合空間〉から疎外され、〈異空間〉への参加を余儀なくされたひとびとである。この二種類の人間は、むろん、鳥瞰図的な分類であるといわなければならない。というのは、存在的に〈整合空間〉になじまないひとびとと、他律的に〈異空間〉の住人になったひとびととを画然と二分することはできないからである。

いずれにしても、〈異空間〉とわたしがいう場合、それはなんらかの理由で反〈整合空間〉的にならざるをえなかったひとびとの生活圏だといってよかろう。〈異空間〉の代表的生活者である漂泊民のなかには、文字どおり〈異空間〉のなかで生まれ、生涯〈異空間〉のなかで暮らした者もいれば、トマス・モアが指摘しているように、他律的にというより、ほとんど暴力的に〈異空間〉のなかにほうりだされたひとびともいた。前者は、存在的に〈整合空間〉になじまないひとびとであったろうし、後者は〈異空間〉のいわば後天的住人だといえよう。ともあれ、救貧法との関連でいえば、これらの法律がもっていた懲罰性の対象になったのが〈異空間〉であり、〈異空間〉の住人だったのである。わたしのこの仮説が不備であることは承知しているつもりだが、テューダー朝からスチュアート朝にかけての時代のイギリス社会の多層的流動性をもった実像は、そうしたリトマス試験紙でも使わないかぎりみえてこないのである。

近世のイギリス社会の基本的状況を把握する一つの手段として救貧法をかんがえてみたが、

救貧法の懲罰性と漂泊民との関係について、さらに指摘しなければならないことがある。近世のイギリスにおいては、原因がなんであれ、漂泊生活自体が捕縛の対象になっていた点である。いってしまえば、漂泊民は、その身分自体が犯罪だったのである。すなわち、漂泊民は、漂泊しているという理由だけで逮捕された。しかも、逮捕の結果、漂泊民（乞食もふくめて）は、前述の救貧法の要旨からもわかるとおり、一、鞭打ち、二、さらし台、三、強制労働、四、烙印、五、監禁（投獄）、という五つの実刑を受けることになった。

他律的離郷には、さらに根深い原因があったことを指摘しなければならない。漂泊民はみずから望んで漂泊したり、乞食生活をしていたわけではない。その赤貧の生活もみずから選んだものではなかった。そうした漂泊民たちのやむをえない極貧状態に対して、なぜ〈整合空間〉は懲罰的な姿勢をとったのであろうか。つぎにこの点についてかんがえてみたい。

この問題は、近世イギリスの〈整合空間〉に君臨していた宗教に一つの大きな原因があった。キリスト教思想史のなかにアッシージのフランチェスコ（一一八一［二］―一二二六年）がいたことは周知のとおりである。このフランチェスコがヨーロッパ・キリスト教思想史のなかで屹立しているのは、彼が体現したその顕著な「無所有」の思想のためである。ものの所有を否定した彼は倦むことなく托鉢、すなわちこつじきをおこなった。それは、彼が、乞食は聖なるものであり、また聖なる者は乞食のように生きなければならないという思想に最終的に逢着したからであった。このフランチェスコのなかにあっては、乞食あるいは貧困は積極的な意味を

もっていた。

フランチェスコは、むろん、十三世紀に生きたイタリア人であったが、フランチェスコによって具現されたこの思想は、時間をへて、国もイギリスになるとどのように変化しただろうか。イギリス近世人の具体的な発言、あるいは発想をまず三つほどみてみよう。一五三八年に『治安判事読本』を上梓したサー・アントニ・フィッツハーバート（一四七〇ー一五三八年）は彼自身治安判事であったが、つぎのように述べている。「グラマー・スクールでわたしは一つの韻文を学んだ。それは、早起きは人間の肉体を健全にし、魂をさらに健全にし、財をより豊かにする、というものである」。つぎにメアリ女王を賞賛してやまなかった著述家のヒュー・ロウズ（一五五〇―一五五五年ごろ活躍）は一五四五年ごろにつぎのように述べている。「朝は早起きにかぎる。早起きには三つの財産がある、それは、父がわたしに教えてくれたところによると、徳、健康、そしてしあわせな財である」。また、一方、イギリスの近世人の意識をわたしたちに伝える当時の諺にはつぎのようなものがある。「乞食、財を生まず」（一五九八年ごろ）、「貧乏だった人ほど財の真価がわかる」（一六三九年ごろ）。

こうした見解や諺にみられるイギリス近世人たちの「財」に対する態度とアッシージのフランチェスコの思想とのあいだにきわめて大きな径庭があることはだれの目にも分明であろう。キリスト教思想は、十三世紀のイタリアから近世のイギリスへと、ほとんど根底的な変化をとげて伝播している。十三世紀においても、教会法によっては、意図的な無為徒食の人間を罰す

るものもあったが、それはキリスト教でいう怠惰の罪に該当したからである。しかし、その怠惰の罪が、十五世紀になるとキリスト教的概念をこえた見方でとらえられるようになる。乞食は、もはや聖なるものではなく、社会的秩序を紊乱するもので、抑圧の対象としてかんがえるべきだという見方である。

こうした状況の変化の背景には、貧困者、乞食の側の質の変化もあったであろうし、宗教的思惟の変化もあったはずである。また、ルネサンス時代の地上的活動に対する礼賛も、ヨーロッパ人の意識に変化をもたらしたにちがいない。フランチェスコのこのような托鉢的な生き方は、ルネサンス時代には、歓迎されるどころか、むしろ嘲笑されるようになる。すなわち、よきキリスト者たるもの、他人に依存することなく生きるべきだというかんがえ方に変化していったのである。

イギリスでは、トマス・ホブズが一六五一年にでた『リヴァイアサン』のなかで、法を遵守しない漂泊民が社会を崩壊してしまうのではないかという危惧を述べている。貧困に対する姿勢のこうした変化は、危険を承知のうえでつぎのように要約することができるのではないだろうか。フランチェスコにあって聖なるものであった貧困は、つぎに怠惰の罪としてみられるようになり、そのキリスト教的怠惰の罪はつぎに社会的犯罪としてみられるようになった、と。これは、変化というより、むしろ逆転といったほうがいいであろう。

マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で分析しようと

したのも、ヨーロッパ人の意識のそうした大きな変化のプロセスだったにちがいない。地上的な財と、本来結びつくはずのないキリスト教思想が、「天職」の美名のもとに融合してしまうプロセスをヴェーバーは考察したかったのであろう。こうした変化をへたヨーロッパ人の意識のなかには、フランチェスコ・ダッシージの思惟の痕跡さえみられない。この変化は、いったい、なにを意味しているだろうか。近世イギリス人の意識に表層的に君臨していたプロテスタンティズムは、貧困というものから聖性を奪ったといってよかろう。それは、要するに、貧困の脱聖化（注3）にほかならない。

テューダー朝からスチュアート朝にかけて議会を通過した二十本あまりの救貧法をささえる精神的姿勢があったとすれば、それは、貧困、貧民、乞食から聖性を奪取するばかりか、それを処罰の対象にした〈整合空間〉のメンタリティにほかならない。ヨーロッパ・キリスト教思想史のこの変化と、その変化するキリスト教思想を支柱とする〈整合空間〉の行政方法との相互作用は、近世イギリス社会の全体像をつかむうえでも、決して看過できない重要な要因である。もしフランチェスコ・ダッシージが近世のイギリス社会に生きていたらどうなったであろうか。

さて、この章は、近世のイギリス社会についての基本的鳥瞰図をつくることであるので、つぎに近世の人口構成についてかんがえてみよう。近世のイギリスには、議員で、紋章院の公職にもついていたグレゴリ・キング（一六四八―一七一二年）という人がいて、そのキングの著

作に『イングランドの国家と状況に関する自然的政治的観察ならびに結論』（一六九六年）がある。この著作にでている当時の人口構成はつぎの頁のとおりである。

グレゴリ・キングのこの表が、近世の人口に関する現代の統計学的研究（注4）からみると正確さに欠ける点があることはいなめないが、この表は、そうした点を勘案しつつ、一つの歴史的文献として現代においても意義をもっていることは事実である。

このキングの表からは近世イギリス社会についてのじつにさまざまな側面がみえてくる。このなかで、当時の社会の中軸的存在だったのはナイト爵、郷士、ジェントルマンをふくむいわゆるジェントリ階層であった。この表をみると、そのジェントリ階層の家庭数は、一五、六〇〇、人数は一、三三八、〇〇〇人となり、人数だけみても、それは総人口五五〇万余の二・四パーセントにしかすぎない。さらに、近世イギリスの社会の下層で生活していた上層自作農民、下層自作農民、借地農民、国内商人、職人、一般船員、労働者・通い召使、小屋住み農民・貧民、兵卒、漂泊者の人数の合計は四、九七五、〇〇〇人となり、総人口の九〇パーセント以上になることがわかる。

〈整合空間〉を構成していたとおもわれる世俗議員、聖職議員、高級官吏をこのジェントリ階層の二・四パーセントに加えても三・二パーセントほどである。しかも、近世イギリスでは、この五五〇万余の総人口の半数が沼沢地や未墾の荒れ地や森林（田園）地帯で生活していた。そして、農業従事者だけに限定すると、三〇三万人ほどがそうした地帯で生活していた。さら

身分・地位・資格	家庭数	一家族の員数	総人数	家庭の年収
世俗議員	160	40	6,400	2,800
聖職者議員	26	20	520	1,300
准男爵	800	16	12,800	880
ナイト爵	600	13	7,800	650
郷士	3,000	10	30,000	450
ジェントルマン	12,000	8	96,000	280
高級官吏	5,000	8	40,000	240
下級官吏	5,000	6	30,000	120
貿易商人	2,000	8	16,000	400
中・下層商人	8,000	6	48,000	200
法律家	10,000	7	70,000	140
中級聖職者	2,000	6	12,000	60
下層聖職者	8,000	5	40,000	45
上層自作農民	40,000	7	280,000	84
下層自作農民	140,000	5	700,000	50
借地農民	150,000	5	750,000	44
学生・学者など	16,000	5	80,000	60
国内商人	40,000	4.5	180,000	45
職人	60,000	4	240,000	40
海軍将校	5,000	4	20,000	80
陸軍将校	4,000	4	160,000	60
小計	511,586	5.25	2,675,520	67
一般船員	50,000	3	150,000	20
労働者・通い召使など	364,000	3.5	1,275,000	15
小屋住み農民・貧民	400,000	3.25	1,300,000	6.5
兵卒	35,000	2	70,000	14
小計	849,000	3.25	2,795,000	10.5
漂泊者			30,000	
小計	849,000	3.25	2,825,000	10.5
総計	1,360,586		2,825,000	

に、都市部と地方部における人口分布をみると、キングの表現を援用すれば、八〇パーセントのひとびとが地方の(rural)ひとびと、つまり田舎で生活していたのである。イギリスは、テューダー朝の一五三八年から、教区で結婚、誕生、死亡の記録をとりはじめるので、グレゴリ・キングのこの表や発言の信憑性も決して低いものではない。

では、こうしたデータや数値はなにをわたしたちに教えているか。〈整合空間〉と〈異空間〉というわたしの仮説的ターミノロジィに関していえば、近世を法的、行政的に規制していた〈整合空間〉の人口構成比率は全体の数パーセントにしかすぎなかったということである。識字率という要素もあって、そのたった数パーセントの人間が、近世のイギリス社会を操縦していたのである。わたしは、いま、イギリスではなく、イギリス社会と書いた。というのは、近世のヨーロッパのほぼ全体についていえることだが、イギリスも一つの国といえるところまでは成熟していなかったからである。近世のイギリス社会は、国ではなく、それぞれのshireがそれぞれのパトスをもったいわばshire-stateであった。

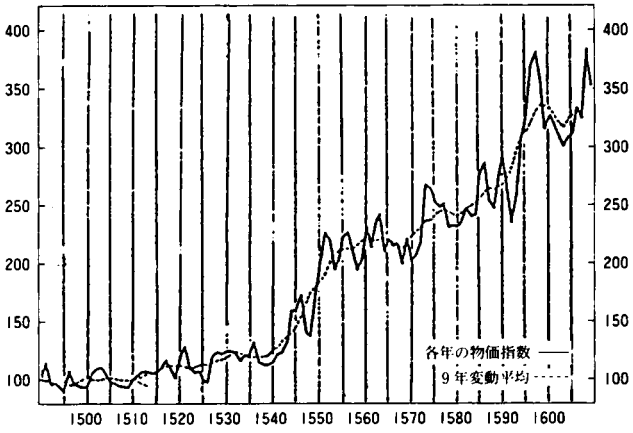
総人口の数パーセントのひとびとは、〈整合空間〉を場として、イギリスという「国」を統括していると認識していたかもしれないが、その認識自体が一つの虚構だったのである。〈整合空間〉の住人たちは、その虚構性に気づかずに、行政的掣肘にばかりむなしい配慮をしていた。イギリスの近世には〈整合空間〉だけが存在していたわけでも、数パーセントの人間たちのみが生活していたわけでもない。わたしがこの本を書こうとおもったのも、声をもたない大多数

のひとびとの生活の一部でもあきらかにし、近世のイギリス社会の実像をできるかぎり正確に把握したいとおもったからである。数パーセントの人間の営為、数パーセントの人間に関する資（史）料、数パーセントの人間にのみかかわる文化事象、数パーセントの人間にのみ関係する歴史から、近世のイギリス社会の全体像を語ることは歪曲の謗りをまぬかれないだろう。識字率が低く、発言の機会もほとんどなく、したがって歴史的記録がたとえ微量であろうと、実際に生きていた九〇パーセント以上のひとびとの生活誌をつづることが、近世の真のイギリス社会を把握するアプローチではないだろうか。数パーセントの〈整合空間〉の圏内の生活誌（史）を解明することがこれまでのモダニズムの研究の方法だとすれば、九〇パーセント以上のひとびとが生きていた社会、歴史を考察範囲にとり込むパラダイムを内的必然としてもっているのがポストモダニズムであろう。

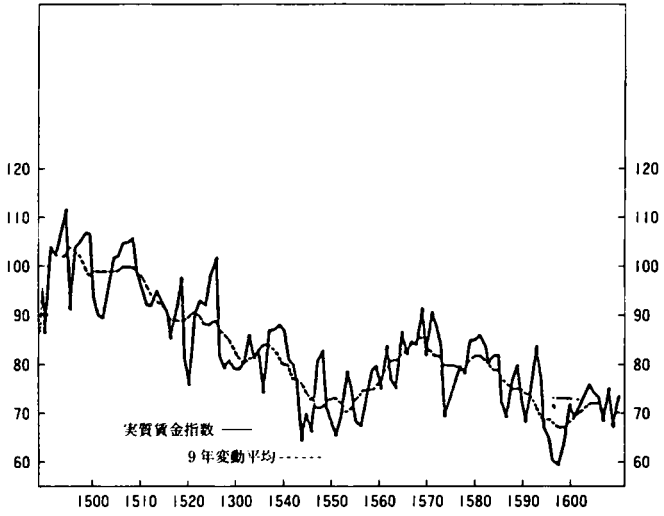
さて、つぎに近世のイギリスにおける物価、そして賃金についてかんがえてみたい。つぎの二つの表（注5）は近世ロンドンにおける総合物価指数と実質賃金指数をしめすものである。

この二つの表に二つの限定がある点にまず注目しなければならないだろう。一つは、調査の地域がロンドンに限定されている点であり、もう一つは、実質賃金といっても、熟練職人と半熟練職人に限定されている点である。しかし、この二つの表は、近世イギリスにおける収支状況に関してきわめて重要な情報をわたしたちに提供している。まず、総合物価指数に関する表だが、ほぼ一五〇〇年から一六〇〇年にかけての一世紀のあいだ、九年変動平均の点線がしめ

1490〜1609年のロンドンの熟練職人・半熟練職人の実質賃金指数の加重平均



1940〜1609年のロンドンにおける総合物価指数



しているように、ほとんど上昇曲線をえがいていることがわかる。つぎに実質賃金指数に関する表をみると、おなじく九年変動平均の点線は、多少の上下動はあるにしても、おおむね下降曲線をえがいている。

この二つの曲線の意味を解釈することはさほどむずかしいことではなかろう。他律的に離郷し、まず徒弟になるためにメガロポリスであるロンドンをめざし、平均七年間の徒弟修業期間を無事終了した者は、半熟練職人という身分から出発して、やがて熟練職人に成長してゆく。徒弟になるために主として徒歩でロンドンをめざすその初期段階から労苦は大きかったとおもわれるが、いざめざすロンドンに到着しても、待っている徒弟修業期間も半熟練職人時代も熟練職人時代も、この二つの表から推測すると、彼らの生活はきわめてきびしかったことがわかる。物価が上昇するなかで、実質賃金が決してそれに見合うように上昇していないことはこの表がみごとに語っている。

本貫を追放された農民が貧民、乞食あるいは漂泊民になったのはなにも地方部ばかりではなかった。というより、地方部にこそ生活テリトリのあった農民たちは、生活手段を奪われた地方を捨て、就職口（収入の道）をみつける可能性の高い都市をめざざるをえなかった。しかし、都市部に移住してきても生活が一変するわけもなかった。こうした漂泊民は識字率も低かったので、みずからの生活行動の軌跡を残しているわけではない。こうした漂泊民は近世イギリスの歴史のなかにどのような形の記録を残しているだろう。あるいは、近世のイギリスのど

のような歴史的記録のなかに彼らの軌跡をみいだすことができるだろうか。

まえにも述べたとおり、漂泊民はその身分が犯罪であった。つまり、治安官に捕縛され、治安判事に尋問されるというプロセスをふんでいくことになる。このプロセス、つまりその尋問内容、自供内容のなかに彼らはかすかな痕跡を残しているのである。これらの尋問や自供は、小治安裁判所、巡回裁判所、四季裁判所などの法廷の書記が逮捕された漂泊民から事情を聞き書きしたものである。漂泊民たちは、歴史のなかにみずから痕跡を刻んだのではなく、聞き書きという不完全な形の聴取内容のなかにその痕跡を、他人の介在をへて残しているのである。

そこで、つぎに漂泊民たちのその自供内容を具体的にみてみたい(注6)。近世の漂泊民が漂泊していた理由は大別してつぎの七種類あった。それは、一、親戚・個人的、二、特定の目的地、三、求職、四、所用、五、雑用、六、犯罪、七、雑、の七つである。このうち、一、二、三、四、五、七はさして説明する必要もなかろう。問題は六の犯罪で、このなかには乞食行為、漂泊、窃盗などがふくまれている。トマス・モアが述べているとおりである。しかも、その犯罪が、一五七三―一六〇〇年のあいだのチェシャでは全体の二十三パーセントになり、一五七三―一六二〇年のあいだのエシクスでは五十五・九パーセントにもなっている。エシクスがほかの地域よりこの犯罪のパーセントがとびぬけて高いのは、むろん、ロンドンがあったからである。暴力的な土地の囲い込みによる定住的農民の漂泊民化の結果はこの五十五・九パーセントという数字にもあらわれている。

要するに、近世のイギリス社会には、地方部、都市部をとわず、漂泊民、貧民が遍在していた。わたしは都市部のこうした漂泊民、乞食、貧民をふくめて都市細民とよぶことにしている。そこで、近世イギリス社会の多層的流動性の実態にせまるためにつぎに近世のロンドンにおける男性の一般的履歴を、徒弟の成長過程を例にとってかんがえてみよう。身分を徒弟、地域をロンドン、性別を男性に限定してみても、その履歴はきわめて複雑な流動性をしめすことがわかる。まず、徒弟はその出自（家庭背景、出身地、父親の社会的地位、その父親の生死）の点で第一の分岐点にであう。つまり、出身地があまりにも遠隔であれば、徒歩によってロンドンに上京することはできないであろうし、父親の社会的地位に傷でもあれば、いい親方に弟子入りすることはできないであろう。

近世においては、だいたい十二歳から徒弟になり、平均七年間徒弟の修業をつむのが一般的ではあったが、このプロセスも一様ではなかった。一四九〇年代から一五九九年の期間のロンドンの十五の同業組合における徒弟の年季修了率に関する最近の調査（注7）によると、このほぼ一世紀のあいだの四四、一六九名の徒弟の年季修了率の平均は四十二パーセントであることがわかる。これは、すなわち、徒弟になっても、その半数以上が修業満期を待たずして脱落していったということである。徒弟年齢も十二歳が最低の修業開始年齢ではあったものの、例えばロンドンの場合、その開始年齢はまちまちで、十七歳がもっとも多かった。そして、そのロンドンについては、ロンドン生まれのロンドンっ子と、移住者によってもその開始年齢には相

違があって、移住者の場合は二十歳で徒弟になる者の数がもっとも多く、なかには三十歳で徒弟になっている例もある。

では、徒弟修業なかばにして脱落していった者たちはどうしたのであろうか。その末路は近世の漂泊民たちの仕事と身分についての調査から逆照射してみる以外に方法はなかろう。一五二〇年代から一六四〇年代にかけて、どのような漂泊民が社会のなかを泳いでいたのであろうか。漂泊民の仕事と身分は、じつに多様で、農業、徒弟・召使、建設業、織物製造と販売、配達、娯楽、ジェントルマン、非熟練職人、熟練労働者、皮革、金属、炭坑、製造、小売り、事務、小行商、専門職、船員・兵士、鋳かけ屋、運送、飲食店などがあり、このなかで徒弟・召使が全体の六十一・四パーセントを占めていて断然多い(注8)。半数以上の徒弟脱落者と、この六十一・四パーセントという数値はみごとに符合して、近世のイギリス社会における徒弟事情をわたしたちに語っている。

都市細民がつぎにむかえる分岐点は、徒弟開始の年齢と修業期間の長さという点である。三十歳という徒弟開始年齢は極端だとしても、あまりにも遅い徒弟年季の開始は技術の習得率などの点で問題があったであろうし、修業期間が短すぎれば、その徒弟はいわゆる半端職人のまま、親方になる道を断たれたであろう。また、徒弟が都市細民の域をでても、ロンドンに定住できるようになるのか、また、同業組合員になれるかどうかというつぎの分岐点にぶつかることになる。さらに、加入した同業組合あるいは徒弟としてついた親方が社会のなかでどのよう

な地位にあるかによって、同業組合員の履歴のなりゆきが大きく左右されることになる。さらに、ロンドン市民になれたとしても、親方になれるか、また自由所有権保有者になれるかという時点で、近世イギリス社会の成人男性は最終的な分岐点に遭遇することになる。

このように離郷を余儀なくされても、なお真摯に徒弟になろうとする者の履歴という局面にさえ、近世イギリス社会の複雑で、多層的な流動性はみられた。わたしが〈整合空間〉と〈異空間〉という仮説的道標を設定したくなった所以である。以上みてきたように、〈整合空間〉は、貧困から聖性をうばいとってしまった宗教を精神的支柱として、農民を農地から追いだし、赤貧状態に疎外した。この疎外は、二十本あまりの救貧法の要旨からもあきらかなように、その後の救済措置をかんがえるどころか、疎外された貧民に対する懲罰的措置となってあらわれる結果となった。近世イギリスの社会に君臨していた宗教は、人口の末端にまで浸透しないまま、本来的にその教義のなかに〈整合空間〉と〈異空間〉をつくりだす性質をもっていたといわなければならない。そして、このような宗教に教導された〈整合空間〉の行政力は、社会に破綻を発生させるだけで、shire-state を統一することはできなかった。わたしが、近世イギリス人の「国」に対する認識を一つの虚構だったという所以である。

注

1　cf. A. L. Beier, *Masterless Men* (Methuen, 1985), p. 219.

2 澤田昭夫訳、中公文庫、七十五―六頁。
3 cf. A. L. Beier, op. cit., pp. 4-7.
4 例えば、B. R. Mitchell, *British Historical Statistics* (Cambridge UP, 1988).
5 Steve Rappaport, *Worlds within Worlds* (Cambridge UP, 1989), pp. 131 & 149.
6 cf. A. L. Beier, op. cit., p. 220.
7 Steve Rappaport, op. cit., p. 312.
8 A. L. Beier, op. cit., p. 224.

第二章　隠語の世界

十六世紀と十七世紀において、イギリスの近世の流動的社会は相当数の漂泊民を生みだしたが、この漂泊民の発生には、国民全体の疲弊をもたらしたバラ戦争（一四五五―八五年）という遠因もあった。しかし、そのほか二つの大きな原因があった。一つは、第一章でもふれたほとんど暴力的といっていい土地の囲い込みであり、もう一つは、たびかさなる疫病（腺ペスト）の跋扈にもかかわらず着実に増加していった人口である。人口の急激な増大は、定住的社会からあぶれた漂泊民の数も増加させることになった。

漂泊民はもはやアウトロー（法益被剝奪者）ではなく、おどろくべき数の者が存在していた――一五六九年には主として北部に一三、〇〇〇人いたと政府の調査は算出したし、一六〇二年にはさらに大幅にロンドンだけで三〇、〇〇〇人いるとかんがえられた（注1）。

グレゴリ・キングの三〇、〇〇〇という人数も、こうした別種の数字との照合のうえでかんがえるべきだろう。

増加した漂泊民たちがたどった方向は、地域のうえでも、選んだなりわいによっても多岐に

わたっていた。この本の中心課題であるやぶ医者稼業もそのなかに入っていたわけだが、単なる漂泊民では生きていけず、やむなく窮余の策として裏社会での生活をしいられたひとびとのことをかんがえてみたい。というのは、社会の〈異空間〉に生きたこうしたひとびととやぶ医者と呼ばれていたひとびととを峻別することはむずかしいし、こうしたひとびとについて語ることがやぶ医者考察のいわば序説になるとおもわれるからである。

……イングランド地方部の安定した表層下では、目につく広大なおだやかな田園が、森林地帯の不法居住者、行商商人、建設業労働者、求職中の男女、地方まわりの役者、ぺてん師、行商人、やぶ医者、ジプシー、漂泊者、渡り職人などが、たえず流動する場になっていた。彼らはとくにロンドンや大都市に蝟集したが、教区組織とは無関係のあらたな不法居住地域や、労働の需要がある古い不法居住地域にも足場をもっていた（注2）。

静かな田園や農家の納屋などを仮の宿にして流動していた漂泊民たちがめざしたのが大都市、とくにロンドンであった。「近年の歴史研究は（中略）漂泊民の人口のなかに犯罪者という下層階層が存在していたことを確認している」（注3）が、大都市に蝟集したのもこうした下層階層のひとびとであった。

近世ロンドンのそうしたひとびとがよく集まった地域としては、ブリッジ・ウォード・ウィ

ズアウトとアルセイシアがあったが、とくに有名であったアルセイシアをここではかんがえてみよう。最近の社会学の研究はつぎのように述べている。

十分に確立していた第二の犯罪テリトリは、ロンドン・シティのホワイトフライアズの聖職者の古い聖域の南東端にあった。かつてはひとびとの往来もにぎやかだったその一帯は、エリザベス朝後半に安アパートのスラム街に姿を変え、ますますふくれあがる臨時労働者、負債者や犯罪者たちを隠匿していた。アルセイシアの名で知られていたその一帯は、フリート・ストリートから、ウォータ・レインの両側とザ・テンプルにまたがるテムズ河のところまで広がっていた。特権的自由を残していたその一帯が強制的に廃絶させられたのはやっと一六九六年になってからであった。そこには、負債者、どろぼう、詐欺師、賭博師のみならず、詩人、役者、ダンス教師、刀使い、本売り、ぺてん師などが住んでいた（注4）。

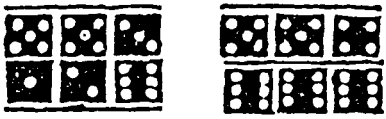
この地域にあった修道院がヘンリ八世によって解散させられたのち、建物と土地は王室医師ウィリアム・ビュートに譲与されたが、荒廃するままに放置されているうちに、建物も土地もあやしげな建設業者たちに略奪されてしまう。特権的自由が生じるのは、ここの住民たちがロンドン市の法律からの免除を申し立て、エリザベス女王がその申し立てを認可した一五八〇年からである。一六〇八年にはさらに住民たちの特権はジェイムズ一世により確認され、この一

帯の無法性はいっそう確立する。アルセイシアの名は、長いあいだ領有権をあらそっていたフランスとドイツのあいだのアルザス・ロレーヌ地方にちなんだものである。

この一帯の住民の徒党性はきわめて堅牢で、犯人の引き渡しを要求しようとすると、剣や棍棒をもった用心棒や、ほうきの柄をもった荒々しい女性たちがすぐにとびだしてきて、係官を追いかえすほどだった。では、ここの住民たちになぜこのような堅い徒党性があったのだろうか。それは、アルセイシアの住民たちは、その住民たち特有の掟、宣誓、慣習、支援と相互認識のいわば記号（隠語など）を発達させていたばかりでなく、隠れ家と保護手段を提供し、法を無効化し、犯罪ブローカーを育成したりもしていたからである。〈整合空間〉の人間の言葉がふつうのものだとすれば、こうした徒党性、あるいは犯罪ネットワークとも呼べそうな組織性をもった空間住人の隠語（注5）は〈異空間〉の言語だといえよう。

近世といってもとくにテューダー朝における隠語に関しては、一五五二年にでたギルバート・ウォーカー（生年没年不詳）の『サイコロ賭博の明確な見破り方』①、ジョン・オードレイ（一五五九年――一五七七年活躍。ただし、没年を一五七五年とする説もある）が一五六一年にだした『流民仲間』②、トマス・ハーマン（一五六六年ごろ活躍）が一五六六年にだした『俗に流民と呼ばれるごろつきに対する警告』③、ロバート・グリーン（一五五八―九二年）が一五九一年にだした『かたりの上手な発見』④、おなじグリーンが一五九二年にだした『要注意人物に関する予告』、トマス・デカー（一五七二?――一六三二年）が一六〇八年にだした『手

¶ A manifest de-
tection of the moste vyle and detestable
vse of Diceplay, and other practises lyke
the same, a Mirrour very necessary for
all yonge Gentilmen & others sodenly enabled by worldly abūdace,
to loke in. Newly set forth
for their behouse.



¶ Democritus.

Si le ris vous estes plus fol/ que ne ries
de me veoir rire
De vous et de vos actes sont plus que mon
rire plut dire
Tant il y a a vous redire et aulx plus sages
de vous tous.
Qui est pleine fol qui ne rit de vous.

¶ Fortune vient a point.

① ギルバート・ウォーカー、「サイコロ賭博の明確な見破り方」の表紙

THE

Fraternity of Vagabonds.

As well of ruffling vagabonds as of beggarly, of women as of men, of girls as of boys,

with

their proper names and qualities.

With a description of the crafty company of

Cozeners and Shifters.

[Whereunto also is adjoined

the Twenty-five Orders of Knaves,

otherwise called

a Quartern of Knaves.

Confirmed for ever by Cock Lorel.]

[by John Awdeley]

[1561]

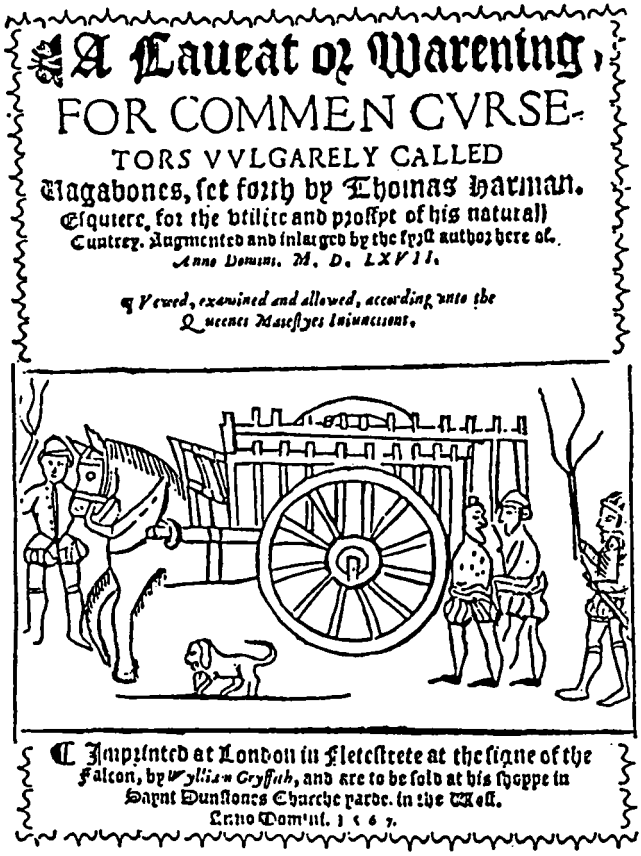
The Upright-man speaketh:

Our brotherhood of vagabonds,
  If you would know where dwell.
In Gravesend barge which seldom stands,
  The talk will show right well.

Cock Lorel answereth:

Some orders of my knaves also
  In that barge shall ye find:
For nowhere shall ye walk, I trow,
  But ye shall see their kind.

② ジョン・オードレイ、「流氓仲間」の表紙



A Caueat or Warening,
FOR COMMEN CVRSE-
TORS VVLGARELY CALLED
Vagabones, set forth by Thomas Harman.
Esquiere, for the vtilite and profyt of his natural
Cuntrey. Augmented and inlarged by the first author here of.
Anno Domini. M. D. LXVII.

¶ Vewed, examined and allowed, according unto the
Queenes Maiestyes Iniunccions.

¶ Imprinted at London in Fletestrete at the signe of the
Falcon, by William Griffith, and are to be sold at his shoppe in
Saynt Dunstones Chareche parde. in the West.
Anno Domini. 1567.

③　トマス・ハーマン、『俗に流浪と呼ばれるごろつきに対する警告』の表紙

A

Notable Discouery of Coosenage.

Now daily practised by sundry lewd persons, called Connie-catchers, and Crosse-byters.

Plainely laying open those pernitious sleights that hath brought many ignorant men to consusion.

Written for the generall benefit of all Gentlemen, Citizens, Aprentises, Country Farmers and yeomen, that may hap to fall into the company of such coosening companions.

With a delightfull discourse of the coosenage of Cutters.

Nascimur pro patria. By R. Greene, Maister of Arts.

LONDON

Printed by Thomas Scarlet for Thomas Nelson.

1592.

④ ロバート・グリーン、「かたりの上手な発見」の表紙

LANTHORNE
and Candle-light.

Or

The Bell-mans ſecond Nights walke.

In which

Hee brings to light, a Broode of more ſtrange Villanies, then euer were till this yeare diſcouered.

—Decet nouiſſe malum; feciſſe, nefandum.

LONDON
Printed for *Iohn Busbie*, and are to be ſold at his ſhop in Fleet-ſtreet, in Saint Dunſtans Church-yard.
1608.

⑤ トマス・デカー、「手さげランプとろうそくのあかり」の表紙

さげランプとろうそくのあかり』⑤、サミュエル・リド（生年没年不詳）が一六一二年にだした『ぺてんのわざ』などがあるが、ここではジョン・オードレイ『流浪仲間』をとりあげ、隠語の細部をみてみよう。

ジョン・オードレイをとりあげるのは、のちのハーマン、グリーン、デカーらの著作に深甚なる影響をあたえているからだが、オードレイが『流浪仲間』を書いた真の意図はいぜんとして謎のままである。彼がイギリスでもっとも初期の記録の印刷者だったことも、ジョン・サンプスンとサンプスン・オードレイという別名をもっていたことも、サー・ジョン・フィッツハーバート（生年没年不詳）の『農事読本』を印刷したことも、またカトリシズムに対する牢固たる反対者であることもわかっているが、『流浪仲間』を印刷した目的はいぜんはっきりしない。しかし、典拠という意味ではこの著作をかんがえるのが、近世の〈異空間〉の深層にせまるもっともいい方法だとおもわれるので、彼の隠語の説明を聞くことにしよう。ただし、つぎにでてくる隠語群は、『オクスフォード英語辞典』*The Oxford English Dictionary*（以下、OEDと省略）でもだいたい歴史的用例としてあげているものが多く、その意味で、和訳することはほとんど不可能に近いことを断っておきたい。なお、オードレイの以下の説明は、のちに引用する現代の社会学者が作成したグロサリと比較されたい。

○ベツヘレム精神病院患者 Abraham man。エイブラハム・マンとは、手足をむきだしにして

歩き、気がふれたふりをし、一包みのウール、または豚肉をまきつけた棒あるいはそれに類したおもちゃをもち、プア・トムと名のる者。

○漂泊もん ruffler。漂泊もんとは、戦争で従者をやっていたことを理由に、武器をもって仕事を求めて歩き、施しを懇願する者。しかし、そのおもななりわいは貧しい徒歩の男や市場の女からくすねることである。

○コソドロ prigman。コソドロとは、なまけ者のように手に棒をもって、うろつく者。その特性は、生け垣ごしに衣服を盗み、それを「ゴロツキのたくわえ」と呼んだり、または家禽をかっぱらい、「のみ屋」と呼ぶエイルハウスにもちこみ、かっぱらったものがなくなるまで、そこに腰をおろし、カードやサイコロで遊ぶこともある。

○ゴロツキ whipjack。彼らが「ジャイブ」と呼ぶ贋造認可証や、「ジャークス」と呼ぶ印章などを隠れ蓑に、水夫よろしく乞食をする者。しかし、そのおもななりわいは、市の屋台から盗んだり、露店からものをくすねることで、そのことを彼らは「屋台店をたぐりこむ」と呼んでいる。

○ほかい frater。ほかいは、類似品の乞食認可証をもって避病院や病院に物乞いにゆく。彼らのカモになるのは、だいたい市場に出入りする貧しい女性たちである。

○値んないどり queerbird(注6)。値んないどりとは出獄したてで、仕事をさがしている者。値んないどりは、一般に馬どろぼうで、これを彼らは「馬盗人」prigger of palfrey と呼ぶ。

○頭領 upright man。頭領とは、仲間が「盗人」と呼ぶ、棍棒のような棒をもち歩く者。頭領には非常に権威があるので、同業の者に会うと、釈明を求め、彼らのすべてから一ヶ月分の実入りのうちの頭領の分け前、あるいは「戦果」を要求する。また、たとえ頭領がまちがった場合でも、同業の者には頭領を阻止する方法はない。頭領がよくやっているように、たとえ彼らを殴ったとしても、阻止する方法はない。頭領は、また同業の者たちが「おんな」と呼んでいる彼らの女性たちのある者を自分のために用だてることを要求することもある。彼は、すべての市場のシマや、ほかの寄りあいにおいて首領の地位をもっており、決して指図を受けない。

○短いマント curtal。短いマントは頭領に似ているが、その権威は頭領ほど大きくはなく、彼は、ふだん、フランシスコ会修道士よろしく短いマントを着て歩き、連れの女性は、妻であれば「オールサム」と呼ばれ、従僕のようで、遊女であれば、「おんな」と呼ばれる。

○非人 palliard。非人はボロボロの外套を着て歩き、連れの女性は服もどきのものを着ている。

○アイルランドの職人 Irish tool(注7)。アイルランドの職人とは、ずだ袋にレイス、ピン、針といったようなものを入れてもち運ぶ者。施しものをもらうまで、品物はみせない。そして、家の主人主婦が近くにいない場合は、子供たちや召使たちから、一ペニーで買える自分の品物のかわりに、一頭一刈分の羊毛や、一シリングの値打ちのあるほかのものをせしめる。

○物知り乞食 jarkman。物知り乞食とは、ラテン語を読み、書き、場合によってはしゃべるこ

ともできる者。彼は彼らが「ジャイブズ」と呼ぶ贋造認可証をつくり、それに彼らの仲間うちの言葉で「ジャークス」と呼ばれている印章をつける。

○のんべぇ swigman。のんべぇとは、行商人のかつぎ荷とともに歩く者。

○洗い屋 washman。洗い屋は非人 palliard とも呼ばれるが、ほんとうの素質をもっているわけではなく、本物の非人たちは洗い屋たちから略奪することが多いが、洗い屋たちは不平をいうことはない。ときには猫いらずでいためつけられて、火ぶくれができるからである。

○放浪どろぼう tinkard。放浪どろぼうとは、彼らのいう「のみ屋」bousing inn、つまりエイルハウスに、汗水たらして袋をあずけ、その間あちこちを乞食をして歩く者。

○野宿もん wild rogue。野宿もんとは、住処をもたず、あちこち乞食をすると見せかけて、一般に同類の者、またまともに野宿もんと呼べる仲間をもった者たちをさがし求める者。

○がき kintchin co。がきとは、なにもしていない、青年反逆者と呼ばれている者。

○浮浪おんな kintchin morts。浮浪おんなとは、成年になると、ならすために頭領のもとへ連れてこられ、オールサムの信義をうるまではただの「おんな」と呼ばれる女性。

○おんな doxies。とくにレイス編みをしたり、シャツの紐の仕事をしながらあちこち徘徊するすべての者に要注意。彼女らが「おんな」と呼ばれている者である。

○かしら patriarch co。かしらは、死が結婚した者をわかつまでという形で、結婚を成立させる者。また、死んだ馬や家畜の死骸にであうと、別れに手をふって、それからそれぞれ別の

方向へと歩きさる者。

ピーター・バークは、社会史の研究者たちが言語についてこれから追求すべき四つの点を指摘している（注8）。

一、異なった社会集団が言語の異種を用いている点。

二、同一のひとびとでも異なった状況では言語の異種を使用する点。

三、言語はそれが話される社会（あるいは文化）を反映する。

四、言語はそれが話される社会を形成する。

この指摘にしたがえば、ジョン・オードレイが記録した隠語群はさしずめその一に該当することになろう。しかし、隠語の実用例がオードレイのものでつきているわけでないことはいうまでもない。隠語が形成する〈異空間〉の実態をさらにつぶさにみるために、現代の社会学者が作成した一つのグロサリ（語彙集）をとりあげたい（注9）。このグロサリがすぐれているのは、そこには名詞ばかりでなく、語句や動詞、形容詞などもふくまれていることである。

Abram or Abraham man・ロンドンのベツレヘム精神病院のほんとうの、あるいはにせの収容者。

Alsatia・ロンドンの犯罪的コミューン地帯。

Angler・窓からものを盗む際、かぎ状のものを使う者。
Ape-gentlewomen・パートタイムの売春婦。
Apple-squire・売春宿のポン引き、使用人。
Aunt and niece・組になっている売春婦。
Barnard・ゲイムがすでにはじまっているときに、偶然を装って入ってくるいかさま師。
Bawds・ふつうの売春婦。
Beau・売春婦の常客。
Bell-brow・エイルハウス。
Bellman・夜回り。
Bene faker of gibes・熟練した免許贋造者など。
Bing the bill・カモを脅かす。
Bing the cull on the poll・不意の邪魔者を攻撃する。
Black art・錠前をこじ開けること。
Blind・はっきりしない、遠い。
Bob・(盗品の) 故買屋。
Bousing ken・エイルハウス。
Bowman・空き巣が盗んだ品物をその家の外に渡すときの合い言葉。

Boxman・サイコロの置き方をとりしきる者。
Bristle dice・片側に短い荒毛（あるいはとげ）のついたサイコロ。
Broker (or brogger)・中間介在人、盗品の故買屋。
Brush upon the sneak・すばやく動けという警告。
Brush your grig・ここを逃げ出し、街頭へいく。
Budge・コソドロ、あるいは強盗。
Bulk and file・スリのチーム。
Bulk the cull・スリのカモの気をそらす指図。
Bullies・売春婦に掟を強要する暗黒街の仲間。やくざのようなもの。
Bung・財布、ポケット。
Cant・犯罪の世界の言葉。
Cap・十八世紀中ごろのbarnard。
Cheating nunnery・被害者を近所の人や警察にばらすという脅し。
Cloy・盗む。
Cloyers of snaps・保護作戦を指揮し、密告する裏切りスリ。
Cog・サイコロやカードのイカサマ。
Cole・見込みのある客と親しくなるイカサマ・ギャンブラーのグループの頭領。

Common queens・ふつうの売春婦。
Confidence cheat・秘密を打ち明け、カモから金や品物をだましとる者。
Contraries・使っているサイコロと反対の目をだす癖のあるイカサマ・サイコロ。
Cony・カモ、だまされやすい人（文字どおりいえば、うさぎ）。
Cony-catching・とくにカードのイカサマ。
Counterfeit-crank・癲癇のふりをする者。
Courtesy-man・如才ない、狡猾なスリ。
Cousin・だまされやすい人。
Crossbiting・売春に関連するたかり、恐喝。
Cully・犯罪の犠牲者。
Curb・開いた窓からものを盗むために使うかぎ状の棒。
Curber・そのかぎ状の棒を使う者。
Cursitor・無宿者。
Cutters・殺し屋、あるいは雇われた殺人者。
Cuttle-bung・スリのナイフ。
Decoying・うその言い訳で誘惑すること。
Dick・売春婦の顧客。

Diver・小さな隙間から部屋に忍び込むために男の子を使って盗む者。
Draw・スる。
Drop・十八世紀中ごろのcony-catching。
Dub a gigger・錠前を開ける。
Dubbers・窃盗チームのために錠前をこじ開ける仕事をする者。
Dubs・見習い中の若い錠前破り。
Faggot and storm・暴力的強盗。
Fakers of loges・にせの通行手形の制作者。
Figging boys・子供のどろぼう。
File・スリ。
File the cly of the tatler・ポケットのなかの時計を盗む。
Flash cases・ヴィクトリア朝のエイルハウス。
Fob・財布、あるいはポケット。
Foin・スリ。
Foist・スリ、スる行為。
Forking・かぎ状のものでスリをおこなう原始的テクニーク。
Foyl'd cloys・スってしまったポケット。

Fullams・錘の反対側の面をだすよう細工された錘入りサイコロ。
Garbage・盗品。
Gentlemen foins・一流のスリ。
Gilks・合い鍵。
Ginnys and filchs・窓やドアを開けるために作られた犯罪道具。
Giving gammon・スリが近づきやすいようにカモを肩で押すこと。
Glims・空き巣のための暗いちょうちん。
Gourd・もくろんだとおりの結果をだすように一面の近くをくりぬいたサイコロ。
Gull gropers・ギャンブラーたちに前貸しをする銀行員。
Gullying cullies of their nab・スること。
Gybe・にせのライセンス、贋造書類。
Gybed jarkeds・封印のある通行手形。
Kintchin mort・漂泊する女。
Knap of the case・イカサマ・サイコロ賭博師のチームの頭領。
Knapping・手の早業を必要とするイカサマ・サイコロ賭博のテクニーク。
Knight of the post・人の体面を証明するために雇われた証言者、プロの偽証者。
Knuckles・若いスリ。

Langrets・一つの重心の軸が長くしてあるイカサマ・サイコロ。
Lift・盗む。
Lifter・店や家から盗む窃盗。
Lifting law・店から盗むわざ。
Lena・売春宿の女性経営者。
Looking the glaze・盗みに入る家屋を偵察すること。
Madams・売春婦の管理者。
Marker・店から盗む者の共犯者。
Milling the gig (or milling the ken)・窓をこわし、盗めるものを盗むこと。
Mobb・売春婦の家族、仲間。
Mort・女。
Night walkers・街娼。
Nip・スリ。
Nip a bung・スる。
Pad strumpets・信用詐欺をおこなう売春婦。
Palming・手の早業を必要とするイカサマ・サイコロ賭博のテクニーク。
Palming a purse・切り裂いて、財布をつかみとり、盗むテクニーク。

Punk・売春婦に対する一般的な呼び名。
Queens・売春婦の仲間として働く女性たち。
Rakehell・やくざ。
Rampsman・売春婦のヒモ。
Roaring boys and girls・非行少年少女。いつも口の悪い者。
Rookeries・ヴィクトリア朝時代の犯罪地帯。
Ruffler・除隊兵のふりをする健常漂泊者。
Rumper・売春婦の顧客。
Running bawds・移動性のある漂泊売春婦。
Rutter・信用詐欺の用心棒。
Santar・店に盗みに入る者の屋外の仲間。
Setter (or taker-up)・見込みのある客と親しくなる詐欺師のグループの一員。
Sharper・カードのイカサマ。
Shave・外套、剣、そのほか同じような品物を盗むこと。
Shifter・カモに手ほどきしてカードやサイコロ・ゲイムに誘いこむイカサマ・ギャンブラーのチームの一員。
Simpler・売春に関連するたかり、恐喝の被害者。

Slurring・手の早業を必要とするサイコロ賭博のテクニーク。
Smoke・疑いをかけて、告発する。
Snappings・盗みで獲得したもの。
Sots and sparks・売春婦の常客、また売春婦の喧伝者。
Stall・おとり。
Stalling ken・盗品を受けとり、売却する場所。
Stabbing・手の早業を必要とするイカサマ・サイコロ賭博のテクニーク。
Stand・コソドロの見張り。
Stew・売春宿。もとはバンクサイドの売春宿。
Striked・鞭で打ちのめされた。
Strumpet and brat・売春に関する恐喝。
Swell mobsmen・ヴィクトリア朝のスリ。
Taker or taker-up・見込みのあるカモに接近する詐欺師グループの一員。
Tipping bungs・財布を切りとること。
'Tis all bob・盗みの邪魔者はいない。
Tomme・静かに伏せろというどろぼうへの合図。
Tongue pad whores・商売上のセックスと信用詐欺を使い分ける売春婦。

Touting the case・盗みに入る家屋の所在をたしかめ、しるしをつけ、調べること。
Traffic・淫婦。
Trapaners・顧客を、盗みが働けるような状態に誘いこむ売春婦。
Trapping・手の早業を必要とするイカサマ・サイコロ賭博のテクニーク。
Trugging-house・売春宿。
Trull・売春婦。
Verser・ゲイムを開始するイカサマ賭博師。
Vincent・ボウリング・アリでのイカサマの被害者。
Warp・前出のcurberの見張り。
Wheedling・たかること。

ジョン・オードレイの記録したものとこのグロサリとのあいだには、意味のうえで多少のずれはあるにしても、両者は、近世イギリス社会のなかの「異なった社会集団」つまり〈異空間〉の住人たちが、そのなかで生きていた英語という「言語の異種」の一部である。なかでも、このグロサリのなかのbing the bill（カモを脅す）、bing the cull on the poll（不意の邪魔者を攻撃する）、blind（はっきりしない）、bowman（空き巣の合い言葉）、brush upon the sneak（すばやく動く）、brush your grig（ここを逃げだし、街頭へいけ）、bulk the cull（スリの合

⑥　16、17世紀のカードとサイコロの箱

図)、cloy(盗む)、diver(男の子を使った窃盗)、draw(スる)、foist(スる)、glims(空き巣のための暗いちょうちん)、gully cullies of their nab(スる)、looking the glaze(盗みの下見をする)、nip a bung(スる)、shave(外套などを盗む)、smoke(嫌疑をかけて告発する)、tip bungs(財布を切りとる)、'tis all bob(盗みの邪魔者はいない)、tomme(静かに伏せろ)といった語群は、〈異空間〉の住人たちの現実の動きをじつにヴィヴィッドにわたしたちに伝えてくれる。

隠語、あるいは異種言語という意味では、近世の徒歩旅行者、除隊兵、船員、水夫たちのあいだにも存在したが、オードレイのものやこのグロサリからは、残念ながら、犯罪者の種類ははっきりとはみえてこない。そこで、犯罪者の種類をかんがえるには、犯罪者を生みだした都市細民をかんがえる必要があるとおもわれるので、つぎに都市細民の実態をみてみよう。

流動的な近世社会においては、医業さえ一つの確立された職業とはみなされていなかったので、都市細民にいたっては種別そのものが不鮮明であり、例えば熟練職人と非熟練職人の区別もあやふやであった。そのような状況をふまえてあえてロンドンの都市細民を大別すると、だいたいつぎの五種類に分類できるだろう(注10)。

一、職人の親方、熟練職人(工)、小商店店主、市場に屋台をもつ小売り商店店主など。

二、熟練労働者ならびに徒弟。ただし、熟練労働者といっても、その多くの者の生活は赤貧状態。

三、半熟練ならびに非熟練の労働者。そのなかには、日雇い労働者、料理師、パン焼き職人、皮なめし屋、食料品供給者、召使、時計屋、港湾労働者、鋳物屋、煉瓦職人、御者、煙突掃除屋、荷馬車屋などもふくまれていた。

四、移動労働者。そのなかには、荷馬車郵便配達人、荷馬車による運送屋、輸送関係者、家畜商人、荷馬車の御者、小商人、船員・船頭・はしけの船頭(Water poet のジョン・テイラー[一五八〇―一六五三年]はウィンザーからグレイヴズエンドにかけて少なくとも四〇、〇〇〇人の船員・船頭たちがいたと述べている)などがおり、この移動労働者の人口は当時のロンドンの人口の八パーセントにもなっていた。

五、潜在的漂泊人口。乞食、赤貧の失業者、就業不能者、高齢の臨時雇の召使、犯罪的無宿者などがここにふくまれ、一六〇二年の時点で三〇、〇〇〇人いたとおもわれる都市細民の十三パーセントを占めていた。

では、こうした都市細民はどこを生活のよりどころとして生きていたのだろうか。おおむね定住性の低いひとびとには潜在的漂泊性があったので、定住的市民とはとうてい呼べない。このような都市細民が好んで出入りしていたのがインである。テューダー朝後期からスチュアート朝にかけて、いわゆるインは、ホテル、卸売り、銀行、競売所、両替所、代書屋(金貸し)の事務所、さまざまの馬車の停留所、情報補給所のほか、売春斡旋や盗品故買や賭博などの場にもなっていて、多頭の妖怪のような一つの社会的制度となっていた。そして、都市細民たち

はこうした融通無碍のインとその周辺を生活テリトリとして徘徊していた。

インとその周辺に生きていた都市細民たちは恒常的赤貧状態のなかにいたわけで、この赤貧状態から犯罪へはほんの一歩の距離しかなかった。その意味で、都市細民には潜在的虞犯性もあったわけで、ここで隠語群からはっきりみえない犯罪者の種類に話を移そう。犯罪者の種類といっても峻別は、むろん、むずかしい。しかし、だいたいつぎのように大別できるのではないだろうか。

一、スリ nips and foins

二、どろぼう、コソドロ lifters, curbers, dubbers, anglers, burglars

三、万引き lifts, markers, santars

四、盗品故買人 bobs, fences

五、イカサマ師 cony-catchers

六、書類（通行手形など）の贋造者 bene fakers of gibes

これらの犯罪者の種別はまことに困難である。例えば、スリにしても、foin と nip をくらべると前者のほうがランクが上で、またスリには女性の仲間でもあった queens がだいたい同行していたし、どろぼうといっても、curber や angler が昼間に仕事をしたのに対し、burglar は夜盗であった。そして、夜盗もまたチームをつくって仕事をしていた。また、万引きにも共犯者がおり、santar は店の外で盗品を待っている仲間の一員であった。イカサマ師も同じで、ま

ず、サイコロかbowlingかカードか信用詐欺かによって分かれたが、チームで仕事をする点ではスリやどろぼうたちと同様であった。このように犯罪者という基本的なレヴェルでは、それなりの徒党性、組織性をもっていたが、細かい種別となると、区分ははなはだむずかしかった。

イカサマ賭博はサイコロを使ってもカードを使っても、やり口は同様なので、その典型的な手口をつぎにみてみよう。この組織的犯行は、きっかけをつくる人間たち、つまりtakerとverserの登場からはじまる。教養あるジェントルマン風の服装をしたtakerは、巧みな会話でカモcousin, cony, cullyを、あらかじめ予定しておいた場所（たいていはインかtavern）へ誘いこむ。takerとカモがそこでビールを飲みながら話をしているところへ、偶然を装ってverserが加わる。そこにはやはり偶然を装ってさらに第三者barnardが加わる。barnardも話巧みに酒をおごったりして、カモをすっかり信用させる。やがて、サイコロかカードがもちだされ、みんなでプレイしようということになり、takerとverserは打ち合わせどおり、カモに、barnardはなにも知らないから金をまきあげようともちかける。賭け金がだんだん高くなるなかで、カモは勝たせてもらい、takerとverserをすっかり信用してしまう。しかし、この虚偽の勝利に酔っているうちに、taker, verser、それにカモの三人は、結局は勝負に負けてしまい、とくにカモはあり金をすべてとられてしまう。カモがイカサマに気づき、文句をいうと、そこに第四の仲間の用心棒rutterが登場し、カモを威嚇しているすきに、taker, verser, barnardたちを戸外に逃がす。そのあと、taker, verser, barnard、それにrutterの四者はせしめた金を

山分けにするのである。

また、サイコロ賭博のイカサマにも実に細かい細工が利用されていた。例えば、サイコロの一つの軸に、より大きな錘をつけたり、三と四の目をほとんどださないように工夫したり、錘の反対側の目をだすように工夫したり、予定の目をだすように一面の近くを空洞にしたり、一面にとげをつけたり、ゲイムに使用中のサイコロと反対の目をだすように工夫したりしていた。また、サイコロの場合、palming, trapping, slurring, knapping, stabbing といった手や指の早業を使うこともあった。

つぎに、書類の贋造者であるが、近世においては移動の際には通行手形 passport が必要であったので、徘徊性の強い行動をしていた犯罪者や漂泊民のあいだでは、贋造通行手形の需要があった。近世においては、町から町へ、あるいは村から村へ移動（住）する場合にも通行手形が必要であったので、生活の苦しい漂泊民や下層民は日銭をかせいだり、収入をふやすために、法の抜け穴をねらって生活の場を変えなければならなかった。

しかし、正規の通行手形を取得するにはいくつかの障害があった。漂泊民や犯罪者たちはおおむね読み書き能力が低かったし、世間的信頼度にも欠け、また仕える主人（マスター）をもたない、つまり masterless である者が多かった。ところが、正規の通行手形を取得するには、識字率、社会的信用、主人に所属していることなどが必須の条件であった。通行手形取得の条件を充足させるこうした資格の欠けた漂泊民や犯罪者にとって、通行手形の贋造者はきわめて

重要な存在であった。

では、贋造者は具体的にどのようなことをしていたのであろうか。贋造の第一段階は文字の作り変えであった。つまり、この第一段階においても、読み書き能力が必要であった(ジョン・オードレイの物知り乞食jarkman、グロサリのbene faker of gibes, faker ofloges など参照)。また、通行手形には封印が付されているので、つぎの段階はにせの封印をつけることであった(グロサリのgybe, gybedjarkeds など参照)。そして、その封印は、ワックスと鉛で仕上げられていたので、プロの贋造者は、ワックスと鉛をまず分離し、それをふたたび通行手形などの書類につける技術をもっていなければならなかった。

読み書き能力があり、しかも化学と冶金についての基本的知識をもっていた贋造者として、贋造通行手形の需要者たちに目をつけられたのは、学校の先生であった。そうした知識をもちあわせていた先生のなかには、貨幣にまで手をのばし、貨幣を削って新しい貨幣を偽造する者までいた。

現在、大英博物館に所蔵されている一五九六年の贋造通行手形も、カンヴァランドに住んでいたラフ・バウアという名前の学校の先生がつくったものである。どんなことが書かれていたのかをみるために、その贋造通行手形の一部を邦訳してみよう。

すべての治安判事殿、市長ならびに町長殿、代官ならびに治安官殿。その他女王(著者注。

一五九六年はエリザベス一世の治世）のすべての臣下ならびに行政官殿。

わたし（トマス・スクループ）はナイト伯であり、ボウルトン（著者注。イングランド北西部の都市）のスクループ卿でありますが、関係各位に申し上げます。本状の携帯者ジョン・マナリングは最近スコットランドに到着し、スコットランド特別五港（著者注。ヘイスティングズ、ロムニー、ハイズ、ドウヴァ、サンドウィッチ）総督によるご指導により、当地に到着した原因に関する真正なる証文をあたえられ、それを携え、わたしのまえにあらわれた者でございます。したがいまして、下記の者たちは、このジョンならびにほかの同行者が暴風雨の悪天候のため、スコットランド北部の陸にうちあげられ、そこでスコティッシュ・アイリッシュなる北方民族により、バーク型帆船ならびにその積み荷を掠奪されたことが真実であることをここに証明いたします。トマス・スクループ

そして、この下にもっともらしく数名の署名があるのである。

この贋造通行手形の通行理由は、悪天候による船の難破、つまり海難事故となっているが、これは決してめずらしいものではなく、漂泊民、乞食、犯罪者などのあいだでは、むしろ一般的とさえいえる虚偽の通行理由であった。漂泊民や乞食や犯罪者たちはさまざまな理由で徘徊をしいられていて、そうした切実な要求が巧妙な贋造通行手形を生んだのである。

こうした要求のでてくる生活の切実度をものがたる一つの歴史的事象がある。それはロバー

ト・クロウリ（一五一八？―一五八八年）が一五四九年に世にだした「抑圧者に対する貧困庶民の告発と請願」という訴状である。ロバート・クロウリは一人の聖職者として、当時の民衆の窮状がみるにしのびなかったにちがいない。事実、この一五四九年にはイギリスは穀物の凶作にみまわれているし、対外国戦争としては対仏戦争をおこなっており、国内では三回の戦いに揺れうごいていた。

前章で述べたように、当時のイギリスはまだ一つの国家になりきれず、shire-state の状態にとどまっていた。その shire-state が、凶作、対外国戦争、国内紛争を経験した年であるから、貧困庶民の赤貧ぶりは想像を絶するものだっただろう。十六世紀中葉から後半にかけて総合物価指数が上昇するのに対し、実質賃金が下降線をたどっていたことも前章でしめしたとおりだが、当時のイギリスにおいては、経済成長率が労働供給率より低かったわけで、そうした経済状態も犯罪人口の増加に拍車をかけることになった。

さて、スリ、どろぼう、コソドロ、万引き、盗品故買人、イカサマ師、通行手形などの書類の贋造者などの犯罪者は、最後の書類の贋造者をのぞいて、かなり高度の組織性をもっていたことがわかっている。犯罪者たちの異文化のなかには、その異文化なりの言語（隠語）のほか、はやり歌、儀式、信仰もあった。そして、この異文化のなかには、軍隊に似た組織性、ネットワークがあり、犯罪者仲間を法から守っていた。

イングランドならびに西ヨーロッパの都市細民は、最低生活水準以下の生活をしいられてい

た都市住民の四分の一から半分を占めていた。こうした多くの都市細民がロンドンに出現した原因のなかでもとくに大きかったのは、十六世紀後半から十七世紀前半にかけてのロンドンの人口の増加であった。人口の増加はロンドンだけにみられた特殊現象ではなく、当時のイギリス全体にわたってみられた一般的現象ではあったものの、移動労働者、季節労働者の流入人口がもっとも多かったのは、都市のなかではやはりロンドンであった。

例えば、シェフィールドやノリッジには現在も残っている当時の人口調査があり、それによると町の人口の約三分の一が乞食をしなければならない赤貧民だったことがわかるが、ロンドンは、都市細民の数という意味では、シェフィールドやノリッジを凌駕していた。移動労働者や季節労働者をふくむロンドンの都市細民は、ロンドンの全人口のほぼ九〇パーセントにも達していた。当時のロンドン市民の七人に一人は失業状態にあったという数字もある。

この九〇パーセントの都市細民の十三パーセントは家庭のお手伝いをしていた若い青年男女であったことがわかっているが、これは、とくに当時の同業組合が女性を排除していたため女性が永続的な職業につけなかったからである。さらに、ロンドンの流入人口のなかには学生、除隊兵、船員などもふくまれていたので、若年層という特徴以外、当時のロンドンの都市細民と流入人口の明確な種別をしめすことはできない状態であった。例えば、船員についていえば、ロンドンにはテムズ河があったため、その数は四万人いたともいわれている。

こうした都市細民のすべてが犯罪者であったわけではないし、移動労働者などの流入人口の

すべてが犯罪性をおびていたわけでもなかったが、総合物価指数が上昇し、実質賃金があがらない状態のなかで、また人口が増加する一方の事情のなかで、これらの人口に虞犯的傾向がみられるようになったのは事実であった。実際、ロンドンでは、ホテル、配膳、運送運輸などで働く賃金労働者のなかに、犯罪者や娼婦と共謀する者もあらわれるようになった。そして、ロンドン全体の人口の増加につれて、そうした虞犯性をおびた人口もしだいに増加していった。

犯罪者たちにはさきに述べたように、軍隊に似たネットワークがあったが、ロンドンの〈異空間〉の場合、その組織は非常に細分化していて、それぞれの集団がそれぞれの隠語 argot、一連の慣行、分業体制、テリトリをもっていた。例えば、犯罪者の一歩手前にいた乞食の場合、地方部には乞食仲間のようなものが存在したが、ロンドンの犯罪社会はあまりにも複雑化していて、乞食には集団性はあまりみられなかった。ロンドンのこの複雑な犯罪ネットワークは、犯罪者仲間の身柄を保護するばかりでなく、犯罪の技術、わざの習得ならびに伝達の役目をはたす学校のような存在でもあった。

人口の増加という根本的原因はべつにして、ほかに、いったい、なにが当時のロンドンを犯罪のメガロポリスにしたのであろうか。原因は大小さまざまあったが、まず犯罪と法の関係をかんがえるべきだろう。近世における旅の主要手段は徒歩と馬であったが、この移動手段の最大の難点は移動者自体がたいへん疲労することであった。したがって、前章でふれた近世の裁判制度のなかでも、とくに下層民に関係の深かった巡回裁判、四季裁判、小治安裁判などは移

動性があってはじめて成立したものであったので、職務の遂行は決して容易ではなく、民兵などと同様、犯罪を潜在的に助長するマイナスの面もあった。

また、犯罪をロンドンだけに限定しても、つぎのような原因があった。まず、近世のロンドンでは戸締まりのよくない屋台や店が多くあったために、窃盗のチャンスが豊富にあったことである。また、ロンドンのどろぼうや万引きは、作戦がじつに巧妙で、秘密性が高かった点も指摘しなければならない。つぎに、アルセイシアをはじめとして、サザク、フリート・ストリート、セント・ポールズ、チャーチヤード、イースト・チープ、ロンドン・ブリッジなど、犯罪者の居住地がロンドンには確立していたことである。また、ロンドンの犯罪者の場合、どろぼうや万引きだけでなく、犯罪者仲間の協力体勢（ネットワーク）が確立していた点も原因の一つであろう。つぎに、ロンドンにおいては、盗品処理のための手のこんだブラック・マーケットがあった点も指摘しなければならない。

そして、近世のロンドンにおける犯罪者居住地域と盗品故買人たちの居住地域の建築構造上の特殊性も忘れてはならない。アルセイシアの伏魔殿的構造はむろんのこと、犯罪者や盗品故買人たちの住居には、官憲の補方の闖入を防ぐさまざまの工夫がほどこされていた。例えば、入り口のドアを一種の二重構造にすることをはじめ、行動を隠すためのにせの玄関、身を隠すための小部屋、移動式の羽目板、落とし戸、それに複雑にいりくんだ廊下などがそれである。この複雑にいりくんだ廊下などは、かりに補方が闖入しても、犯罪者の実際の捕縛を少しでも

遅らせ、そのあいだに犯罪者や犯罪者仲間を逃亡させるための工夫であった。居住地域のこうした建築構造上の工夫は、ロンドンの犯罪者たちの徒党性、組織性を確立するためのもので、このような形で確保される組織性もロンドンを犯罪のメガロポリスにする大きな要因であった。

近世のロンドンを大きな犯罪都市にした原因として最後にかんがえられるのは、脆弱な警察力であろう。第一、近世イギリスにおいては、現代的な意味での警察はなかったといってよかろう。近世の「イングランドは、常備軍も、国内警察もなかった」(注11)のである。ロンドンにも治安官や夜回りはたしかにいたが、夜回りなどは気のすすまないヴォランティアであったので、とても警察力とは呼べない存在であった。近世のロンドンには、治安官、夜回りのような警備員、顧問団、司法秘書官、軍隊、そして民兵といったひとびとはたしかに存在していたが、これらのひとびとの常駐性はとぼしく、その統一性もおぼつかないものであった。

さて、近世のロンドンを一種の迷宮のような犯罪都市にした原因には以上に述べたようにさまざまのものがあったわけだが、ロンドンのなかの犯罪空間、ロンドンのなかの〈異空間〉の住人たちの日常生活にとってきわめて重要なのが隠語であった。さきに具体例を引いたのもそのためであった。隠語に隠語一般cantがあって、それがそれぞれの犯罪者集団において一種の符牒argotに細分化していたのは事実かもしれないが、ここでわたしに関心があるのは、隠語そのものがもっていた社会的機能である。

隠語は身元確認の内緒の符号であり、秘密の世界と慣習への一つの社会的通行手形であった。隠語は、犯罪者集団の範囲を明確にする役目をはたしたし、信頼性と忠節を評価する手段、可能性のある集団メンバーを選抜する手段、そして異種の人間たちを犯罪的提携のネットワークに結びつける手段でもあった（注12）。

たとえshire-stateであれ、近世には一つの大きな社会があって、その社会のなかに〈整合空間〉と〈異空間〉が並存していた。そして、隠語はなによりもまず〈異空間〉の言語であった。それは社会の異次元を生きるための生活上の重要な符牒であった。〈異空間〉言語としての隠語は、虚構などではなく、実際に近世の〈異空間〉の住人たちが使用して生きていた血の通った言葉であった。定住性の高い〈整合空間〉の住人たちが話していたふつうの英語と、定住性の低い〈異空間〉の住人たちが話していた隠語とのあいだには認識が共振する部分はなかった。

犯罪的〈異空間〉の住人たちにとって、〈整合空間〉言語としてのふつうの英語と疎通すること自体、忌避しなければならなかった。〈異空間〉の住人たちにとって、じぶんたちの秘密の行動が露見することは、生きていくこと自体をおびやかすことになったからである。そして、共振する部分は、第十章でくわしく述べるつもりであるが、犯罪的〈異空間〉言語の領域のなかにのみあったのである。そして、〈異空間〉の言語は、なにも犯罪的〈異空間〉の占有物では決してなく、そのほかの、例えば本書の考察対象であるやぶ医者たちにもそれなりの異言語があ

ただただ恐ろしいものと思えるのである。

注

1 Christopher Hill, *The World Turned Upside Down* (Penguin, 1988), p. 39.

2 ibid., pp. 48-9.

3 John L. McMullan, *The Canting Crew* (Rutgers UP, 1984), p. 50.

4 ibid., p.58.

5 ibid., pp. 96-105. および Arthur F. Kinney (ed.), *Rogues, Vagabonds, and Sturdy Beggars* (The University of Massachusetts Press, 1990) 参照。

6 cf. Arthur F. Kinney, op. cit., p. 295.

7 cf. ibid., p. 295.

8 Peter Burke & Roy Porter (eds.), *The Social History of Language* (Cambridge UP, 1988), Introduction, pp. 3-4.

9 John L. McMullan, op. cit., pp. 161-65.

10 ibid., pp. 29-30.

11 Christopher Hill, *A Nation of Change and Novelty* (Routledge, 1990), p. 6.

12 John L. McMullan, op. cit., p. 97.

第三章　やぶ医者の定義

凡例でも少々説明しておいたとおり、やぶ医者にあたる英語は多種多様である。そこで、やぶ医者といわれていたひとびとについての基本的用件をかんがえてみよう。やぶ医者はまずその大部分が正規の大学教育を受けた経験がない。したがって、正規の医師でないことはあきらかである。つぎに、例外はいくつかあるが、彼らの大部分はおおやけの立場にはつかなかったので、その意味では民間の治療師であったといえよう。では、やぶ医者でありながら民間の域をこえた例外的存在としてはどのようなひとびとがいたのであろうか。ノリッジの外科医の息子で、のちに行商眼科医としてヨーロッパでカサノヴァに匹敵するほど名をあげたジョン・テイラー（一七〇三―七二年）も、やぶ医者としては例外的な人であったが、彼の場合はべつにおおやけの立場についたわけではないので、ここでは省くが、いわば在野の存在から公共社会の領域へと、さまざまな理由でその生活テリトリを移行したひとびとがいた。生活のトポスのこのような変化も、まことに近世医術的だといわなければならない。近世のイギリス社会と同様、医術の領野もまた流動的だったのである。

近世のアイルランドにヴァランタイン・グレイトレイクス（あるいはグレイトラクス）（一六二九―八三年）という男性がいた。このやぶ医者は「慰撫師」とも呼ばれ、患部に手をおいて

瘰癧（第五章参照）などの病気をなおすことで知られていた。軍役についていた彼は無料で治療をほどこしたことなどもあって名をはせ、やがてイングランドにわたる。しかし、彼を待っていたのは、医師や科学者たちからの嫉妬をこめた敵意であった。その神秘的な慰撫に科学的根拠がみられなかったからである。しかし、彼の名は広く聞こえ、例えば風刺詩人のアンドルー・マーヴェル（一六二一―七八年）などからも信頼されていたらしい。このグレイトレイクスも、イングランドにわたってのちは科学者たちから非難されることによって有名になったが、終始やぶ医者であることにはかわりなかった。

例外的やぶ医者のつぎの例はライオネル・ロキャ（?―一六七二年）である。彼も典型的な行商売薬商人であったが、グレイトレイクスと同様、治療率で名をあげ、一般によく知られるようになった。知名度は彼に相当の利益をもたらしたらしいが、彼を例外的存在にしているのは、その思想である。一般に、やぶ医者は生きるなりわいとして行商をするわけだが、ロキャは金もうけばかりをもくろむ一般のやぶ医者とはちがって、万人をひとしく治療し、貧民、漂泊民、乞食といった近世の棄民たちには無料治療をおこなったらしい。その意味であまねく名を知られるようになった人である。

つぎにあげるサー・ウィリアム・リード（?―一七一五年）はサーの称号がついていることからもわかるとおり、近世のやぶ医者のなかで民間の領域をこえた代表的存在といってもいいかもしれない。リードはもともと仕立て屋であったが、一六八〇年代から眼のやぶ医者として

名をあげた。とくに眼のガラス体の移植にすぐれていることが知られ、その名はアン女王のところにもとどいた。そして、弱視であったアン女王の眼を治療し、女王の寵愛を受け、一七〇五年には女王の常任眼科医に任命されたばかりでなく、対フランス戦争で負傷した水兵や兵士の眼の治療を無料でおこなったことでナイト爵位にも叙せられている。サーと呼ばれた所以である。

つぎに紹介するジェイムズ・クレッグ（一六七九―一七五五年）も、近世的な意味でじつにユニークな人物であった。彼はもともとはチャプルーアンールーフリスの長老派の牧師であったが、ますますふえる家族をやしなうために医術から収入をえるようになる。正式の医師の資格は五十歳になったときに取得するが、副職をもつ牧師ということで国教会派のひとびとの嫉妬をかい、宗教裁判にかけると迫害されることになる。しかし、彼は医学（術）をあきらめず、結局アバディーン大学からどうやら正式の医師の資格を買ったらしい。このクレッグも、嫉妬という形で英国国教会派のひとびとの注目をひいたわけで、その意味では在野に埋没したままのやぶ医者ではなかった。

このクレッグとはまったくちがった形で当時の社会に名をはせたのがジョシュア・ウォード（一六八五―一七六一年）であった。ウォードの最初の身分は従僕であったが、歴史家たちのいう「やぶ医者の黄金時代」の人間にふさわしく、彼のつくった錠剤と滴剤は、当時としては、天文学的数字で売れた。代議士になるためにだいぶ疑わしいこともやったらしいし、また、そ

の錠剤と滴剤にしてもアンチモンなどを使ったあやしげなものであったが、のちに彼の思想は博愛主義の様相をおび、ロンドンに貧民のための病院を四つ建てることになる。やぶ医者時代にえた収入をこうした形で使用したわけで、晩節をけがすどころか、彼は王室の許可をえて、セント・ジェイムズ公園を六頭だての馬車で走ることさえできるようになる。在野のやぶ医者像とはうらはらに、彼はさっそうと六頭だての馬車に乗っていたのである。

こうした例外的なやぶ医者の最後の例として、ここではリチャード・ウィルクス（一六九〇―一七六〇年）をあげておこう。リチャード・ウィルクスもジェイムズ・クレッグに似て、ストウーバイーチャートリの聖職者だった。しかし、ウィルクスも専門的な修業をつむことなしに医術をほどこしはじめ、やぶ医者としてのその名は一部の地域ばかりでなく、あまねく知られるようになった人である。

さて、このようないわば例外的なやぶ医者よりもはるかに数も多く、一般庶民と接触する機会も多かった一般的やぶ医者とは、いったい、どのような人間だったのだろうか。ここでは、やぶ医者にあたる言葉に対するＯＥＤの定義と歴史的用例をみてみよう。

○quack。

定義「医術もしくは外科術的技量を詐称する無学者。驚異的治療法についての知識をもっていると自慢する者。empiric、もしくは医術における山師＝charlatan」。

用例（一六五九年）「Quack 先生、この頑固な熱病はどうやってもなおりません、と患者はい

った」。

○charlatan。

定義「一、街頭の群衆にむかってよどみなく口上をいうmountebank、あるいは大道商人。このような形で自分の〈学〉と薬を誇大広告する薬の行商人、二、とくに治癒のわざに驚異的秘密をもっていると詐称するempiric。医術におけるempiricもしくは山師、quack」。

二の用例（一六八〇年）「charlatanたちは、薬を病気に合わせるのではなく、病気を彼らの薬に合わせる」。

○empiric。

定義「医術あるいは外科術の修業をつんでいない開業者」。

用例（一五二七年）「やがて無教養なEmpiricusがやってきた」。

○mountebank。

定義「多くの場合、プロの道化師や道化の力を借りて、ホラ話、手品、曲芸などの手段で、一段高い台から聴衆の興味を引いた行商のquack」。

用例（一五七七年）「彼は仲間とともに罰せられるべきではなかったし、mountebankのように（in Mounterbanckwyse）商品を最大限に利用すべきだった」。

これらの定義や歴史的用例から浮かんでくるのは、どこかうさん臭い、犯罪的でさえあるやぶ医者像である。それでは、テューダー朝のエリザベス女王の治世に活躍したシェイクスピア

は作品のなかでこれらの言葉をどのように使っているだろうか。シェイクスピアの時代にはまだ人口に膾炙していなかったとみえ、quack と charlatan は彼の作品のなかでは使われていない。mountebank については、『間違いの喜劇』の第一幕第二場に「ぺちゃくちゃしゃべる mountebank」と、第五幕に「mountebank で、みすぼらしい、手品師で、占い師」という用例と、『ハムレット』の第四幕第七場に「ある mountebank からぬり薬を買ってあります」という用例と、さらに『オセロウ』の第一幕第三場には「mountebank たちから手に入れた魔術と薬の力で」という用例がある。また、empiric については、『終わりよければすべてよし』の第二幕第一場に「不治の病をあきらめて empiric たちにまかせる」という用例がみられる。

シェイクスピアのこれらの用例においても、mountebank や empiric という言葉には決して積極的な意味はない。むしろ、わけのわからないあやしげな存在といった意味で使われている。それでは、一七五五年に二巻本で上梓されたサミュエル・ジョンスン（一七〇九—八四年）の『辞典』では、この quack をどのように定義しているであろうか。ジョンスンはこの言葉に、一、理解もしていない術（わざ）を自慢げに詐称する者、二、うぬぼれて医術を自慢する詐称者、おおやけの場でみずからの医術的才能を公言する者、三、狡猾でインチキの医術業者、という定義をあたえていて、ジョンスンにおいては quack はまさにやぶ医者、にせ医者として扱われていることがわかる。

しかし、OEDにしても、ジョンスンにしても、その定義は十全だとはとうていいえない。

第一、ＯＥＤの場合、定義のなかにおなじ言葉が重複している点はあきらかである。もっとも、近世のイギリスにおいては職業的区分が非常にあやふやであったので、これはＯＥＤやジョンスンの責任ではないかもしれない。近世のイギリスにおいては、現代的発想にはなじまないが、ひとびとは、職業的種別も曖昧で、また生活のテリトリもはっきりしない社会に生きていた。都市細民のような下層民の場合、そうした職業的区分や生活圏の境界はいっそう曖昧であったから、quack や mountebank といった言葉を定義すること自体が不可能なものだともいえよう。

十七世紀の医術市場を説明するためには、まずわたしたちは、免許のある開業医が明確に認められた職業の一つだったという想定をわたしたちの頭のなかから除去しなければならない（注1）。

近世という時代は、現代人の発想、想定の多くを放棄することを求める時代で、やぶ医者以前に、免許のある開業医さえはっきりと認められた職業ではなかったのである。免許のある開業医でさえこうした見方でとらえられていたのであるから、やぶ医者の定義、その生活テリトリの詳細は、きわめて不鮮明である。

多くのスチュアート朝後期のempiricたちは、みすぼらしい、人里はなれた裏通りの家にひと目につかないように住んでいたらしい（それは、たぶん、多くの場合、彼らは漂泊しており、また、彼らの財源が不安定だったからであった）。広告のビラによっては、彼らの部屋が狭い裏通り、路地、あるいは裏口から入ることができることを強調しているものもあった。ギルバート・アンダスン（一七〇〇年ごろ活躍していた性病専門のやぶ医者、売薬行商人）のビラは、彼の家には二つの入り口があり、その一つは都合のよいことに袋小路に隠れている（「お客様はお好きな入り口からどうぞ」）と客に教えている（注2）。

やぶ医者の定義がむずかしいのは、定住性の高い表通りではなく、こうした社会の裏通り、袋小路などに住み、社会生活を送りながら、その社会の〈整合空間〉から韜晦して生活していたからである。しかし、やぶ医者たちは、街頭に、つまり〈整合空間〉の一隅に登場し、行商する面があったこともいなめない。そこで、彼らの当時の街頭活動を伝える資料があるので、それを読んでみよう。

Mountebankeという言葉は、montare（イタリア語で……台にあがること）、つまりあるところへのぼる、あがる、と、bancoつまりベンチとの合成語である。その理由は、男たちはベンチあるいは枠組みで構成されている舞台のうえで自分たちの役割を演ずるからである。

もっとも、わたしは何人かの者が……話をする際に地上に立っているのをみたことがある……こうした連中は「おしゃべり屋」Ciaratones もしくは「香具師」Ciarlatans と一般に呼ばれている……一日に二回、つまり午前と午後、五つから六つの舞台が彼らのためにつくられるのがみられる。地面で演ずる「香具師」は、より貧しい連中である。

これはトマス・コリアト（一五七七?――一六一七年）が一六一一年にロンドンでだした『コリアト雑文集』の一節（注3）である。ここには、街頭の一隅を即席演劇の舞台にしてしまうやぶ医者の姿がみられると同時に、OEDの定義の傍証ともなるまだ未分化状態にいた mountebank と charlatan が登場している。これはコリアトのイタリアでの見聞であるが、ここには、やぶ医者にあたる mountebank と charlatan という英語の誕生時の状態もえがかれている。要するに、やぶ医者には、〈整合空間〉から韜晦する隠遁的傾向と、生活のために街頭で即席演劇よろしく薬を行商するパフォーマーに変身する傾向との二面があったといえよう。

ここで、charlatan に関するOEDの定義の一部を想起してみよう。そこには「街頭の群衆にむかってよどみなく口上をいう」という表現がある。じつは、この「よどみなく」（原語 volubly）という副詞にやぶ医者の実態の一部がひそんでいる。英語に patter という言葉があって、これは、呪文のように早口でしゃべるという意味だが、その語源はラテン語の paternoster にある。ラテン語の paternoster は文字どおりに訳せば「わが主」という意味だが、それは教会での主の

祈りの冒頭にでてくる表現なのである。この「わが主」がなぜ「呪文のように早口でしゃべる」の語源になったのであろうか。

近世の一般庶民の識字率は決して高くなかったが、それにもかかわらず、〈整合空間〉の精神的支柱ともなっていた近世イギリスのプロテスタンティズムは、みずからの機能的限界を忘れて、農民、貧民、都市細民、また漂泊民をもふくむ一般庶民に対し、教会への参集を呼びかけてやまなかった。しかし、さきに述べたように、一般庶民は母国語の識字率さえ高くなかったのである。英語による説教さえ十分に理解できないこのような一般庶民が、ラテン語の祈りへの唱和を求められた場合、彼らはどのようにおもったであろうか。

「わが主よ」にはじまる祈りを聞いても、それは一般庶民にとってまったくちんぷんかんぷんの「音」でしかなかったであろう。近世の説教師や牧師は、一般庶民にとってちんぷんかんぷんの音を発しつづけていたのである。ラテン語の祈りがちんぷんかんぷんだったところに、じつはpatterと結びつく要素があった。ちんぷんかんぷんの言葉をしゃべる点では、呪文のように早口でしゃべるやぶ医者も共通していたのである。のちにべつの章で実例をしめすつもりだが、客の注意を引き、しかも自分たちの都合のよい雰囲気を街頭にかもしだすために、近世のやぶ医者たちは自分たちさえ理解していないラテン語やギリシャ語やヘブライ語などをちりばめた口上をまるで呪文のように早口でまくしたてていたのである。

では、なぜやぶ医者が近世イギリスに誕生したのであろうか。これはきわめて大きく、かつ

深遠な問題で、その原因は決して単純ではむろんないが、ここでは、この点に関して、つぎの二つの大きな原因だけをあげておこう。その一つは、一五一八年に創立された王立ロンドン医科大学 the Royal College of Physicians of London にあった。科学がいまだ試行錯誤の途上にあった近世、「毎日、多くのことが発見されているし、わたしたちの祖先たちが可能だとは決して知らなかったさらに多くのことが発見される」(注4)近世において、王立ロンドン医科大学は特権的地位に固執するあまり、縁者びいきにあけくれ、治療費、診療代などの重要な要因に対する熟慮を欠いていた。事実、王立ロンドン医科大学の治療費、診察代、薬品代は、一般庶民にはとても手のとどかないほど高かった。そして、もう一つの大きな原因は、医師が処方する薬と、やぶ医者が行商的に販売する薬とのあいだにさして隔たりがなかったことである。

quack の薬とは、いったい、どのようなものだったのだろうか。例えば、王立ロンドン医科大学が出版した公式の薬局方は、まだ玉石混淆であったし、平均的薬剤師の処方慣習についてのわたしたちの知識はほとんどない。そのような状態のもとで、しかも試行錯誤していた法律の痛ましい軋みをかんがえると、五十年あるいは百年――あるいはもっと長い期間！――市場占有率を意のままにしていた empiric の調合剤が、医師が処方するものより決定的に質がおちるものだったとはいえないであろう(注5)。

近世イギリス医術史の専門家のこの証言は、近世医術事情における医師とやぶ医者との関係をかんがえるとき、その意味はきわめて深長である。

それでは、近世のイギリス人の医療との接し方はどうだったのであろうか。医師、やぶ医者双方をふくめてまとめると、だいたいつぎの九つあったとおもわれる。一、自己流の調薬にたよる、二、家庭療法を試す、三、友人の忠告を聞く、四、経済的余裕がある場合は、医師にかかる、五、新しい医術的発見発明について調べる、六、ロンドンなどの大都市にいく、七、有名な専門家の門をたたく、八、温泉にいく、九、経済的余裕がある場合は、郵便で著名な医者の診断をあおぎ、治療のことをきく。これらの接し方のうち、なんらかの意味でやぶ医者に関係があるのは、一、二、三、五、六、七、八で、四と九はやぶ医者のみならず、一般庶民とも無縁だったであろう。

ＯＥＤやジョンスンの定義をみても、その生活テリトリの輪郭が不鮮明なやぶ医者は、いったい、近世イギリスにはどのくらいいたのであろうか。生活テリトリばかりでなく、出自も履歴も生年没年もはっきりしないやぶ医者たちの数を把握することは至難である。

これらの治療師たちの活動あるいはその数について信憑性のある情報を入手することはむずかしい。なぜなら、こうした治療師たちについて書かれたものの大部分が敵対者の手になるものだからである（注6）。

しかし、自分自身がやぶ医者だったエドワード・グレイ（一六九〇年ごろ活躍）のチラシにみられる「本王国ほど高名な医師を幸運にも生みだした国民はなかった」と、万人の目にあきらかなように、「これほど多い無学なquackやempiricたちに悩まされた国はなかった」（注7）といった証言もあるほど、やぶ医者の数はかなりのものだった。ロバート・バートン（一五七七―一六四〇年）も『憂鬱の分析』（一六二一年）のなかで「どの村にも非常に多くのMountebanksやEmpirickssやQuacksalversやParacelsiansがいる」と述べている。村ではなく、ロンドンに限定しても、二五〇名のやぶ医者がいたことを最近の研究が確認している。

やぶ医者が多く存在した理由に、近世医術の中心ともなるべき王立ロンドン医科大学に医術的資格が欠落していたこともあったであろう。また、近世の医術において、医師とやぶ医者に決定的な差異がなかったこともその原因の一つであろう。しかし、近世には、やぶ医者たちが実際に完治していた病気もあったのである。最近の研究によると、瘻孔fistula、結石stone、ヘルニアrupture、甲状腺腫wens、癰carnuncle、それに外的な力による奇形、耳の障害などはやぶ医者たちがなおしていたのである。

しかし、こう述べてきても、近世のやぶ医者像はいぜんとして不鮮明であろう。そこで、外科医ダニエル・ターナー（一六六七―一七四一年）が『最近のやぶ医者たち』（一七一八年）のなかで、揶揄をこめてえがいている検尿師piss-prophetの姿をみてみよう。

⑦　ジョウ・ヘインズ

彼は手品師の帽子をかぶり、尿器をもちあげ、首を横にふって、しかつめらしく演説をはじめる。こちらさんはとってもひどい。ほんとうにひどい、とドクターはその老女にこたえる。ほんとうにひどい。男性の尿を採取しているわけで、ドクターはつづけていう、これは殿方のお小水であって、ご婦人のものではありませんな。はい、そうです、とそのサクラがこたえる。すると、また落ちつきはらって、ドクターは始終使っている病気目録をこんなふうにざっと話す。これをみますと頭痛がひどいですな。それから、願望をこめた様子で、その女性が首を横にふるかどうかをみる。その女性が、頭の痛みはそれほどでもありません、というと、胸の痛みがひどい、ということになり、はい、たいへんな痛みです、とその女性はこたえる。このお小水からみると、胸と胃にたいへん大きな病気がありますな（注8）。

これは検尿師piss-prophet像、しかも外科医の皮肉をこめた民間治療師の姿に関する断片的描写にしかすぎないが、その断片から、街頭演劇的空間の雰囲気やぶ医者の語り口などがかすかに垣間みることができる。

こうしたさまざまの断片的史料を一つの像に再現したものがある。再現したのは、近世イギリス医術史の専門家ロイ・ポーターである。少し長くなるが、その再現図（注9）をつぎに紹介しよう。

彼(mountebank)は、どこか外国風でどこか制服をおもわせるような目をみはるような服装であらわれた。彼には、いつもぼけ役(harlequin, clown, zany)がついていて、そのぼけ役の仕事は群衆を引きつけ、多くの場合、聴衆の感情的代理人の役を演ずるために、おどけ、無言の芝居、ざれ歌、手品、とんぼ返りなどで見物人たちの抵抗力を弱めることであった。そうした出し物は、猫、どくろ、剝製のワニ、錬金術の装置、そして外科の道具などによって支えられていた。幟(のぼり)と旗布が雰囲気をつくり、音楽がいやがうえにも興奮を高めた(そして、抜歯してもらったり、おできを切開してもらった患者たちの悲鳴をかき消した)。たぶん満足した顧客や患者たちの手になる推薦状、証文、勲章、そしてヨーロッパの何人かの王侯貴族がそのドクターに対する特別の敬意と尊敬の証人となる璽などが、その出し物を飾りたてた。

quackのなかには、早口の語りを自分でやるものもいた。ほかの者――とくに、英語のおぼつかない外国人たち――は、その大風呂敷を客の呼びこみ役にまかせ、寡黙な哲人といった神秘的雰囲気をつくって悦に入っていた。もっともすぐれたサーカスやヴォードヴィルの出し物と同様、quackの定番の演技は、よくみなれた伝統的なものに、オリジナルで、滑稽で、スリリングで、奇想天外なものを混ぜあわせたものであった。聴衆は、それ自体のプラシーボ効果をもっていたかもしれない型にはまったパフォーマンスによって、quackの側に

引きいれられることになった。すなわち、ちょっとしたおもしろみと気ばらしがすでに病人の気分をよくしていたのである。

この文字による再現図を補完する意味で、おなじくポーターが『健康売ります』の原書の表紙に使っている版画もあわせて紹介しておこう。(九十七頁⑦参照)

この版画はジョウゼフ・ヘインズ(?—一七〇一年)というmountebankの街頭での姿をえがいた一七五〇年ころの作者不明の絵で、「ジョウ・ヘインズのmountebankの口上」というタイトルがついている。この絵には、ポーターのいうぼけ役らしき人物の姿もあるし、猫はいないが、どうやら猿らしき動物の姿もみられ、ポーターの文字による再現図とともに、やぶ医者の実像をかなりリアリスティックにしめしている。

近世イギリスのやぶ医者とは、結局、辞書では定義することのできない生活者で、現代の歴史家のこうした再現図や当時の版画や断片的史料から想像する以外、その実像に近づく方法はないのかもしれない。しかし、わたしは、反定義的なそのやぶ医者の活動を、彼らが展開したパロールとしての宣伝、エクリチュールとしての宣伝にまで探針をいれ、のちの章でさらに考察していこうとおもう。

注

1 L. M. Beier, *Sufferers and Healers* (Routledge & Kegan Paul, 1987), p. 8.

2 ibid., p. 154.

3 cf. Sandra Billington, *A Short History of the Fool* (Harvester Press, 1984), p. 130.

4 cf. Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (Penguin, 1978), p. 790.

5 Roy Porter, op. cit., p. 141.

6 L. M. Beier, op. cit., p. 19.

7 cf. Roy Porter, op. cit., p. 189.

8 W. F. Bynum & Roy Porter (eds.), *Medical Fringe and Medical Orthodoxy 1750～1850* (Croom Helm, 1987), p. 77.

9 Roy Porter, op. cit., p. 95.

第四章　近世医術の社会小史

この図版⑧は、十二宮一覧図にしたがって瀉血に適した人体の部位をしめした十五世紀の絵（注1）である。医術がまだ医学の段階にまで発達しておらず、占星術と深く結びついていた時代をしめす絵である。また、図版⑨（注2）は十七世紀の薬剤師と外科医の姿をしめしたものである。

⑧

⑨

この二つの図版が図像としてわたしたちに提供している情報は決して少なくないが、ここでは、一種の記号として解読することができる二つのことがらだけをあげてみよう。その一つは、近世のイギリスの医術も、占星術や錬金術とわかちがたく融即していた点である。ヨーロッパの近世には、医術と占星術の結合、医術と錬金術の結合を象徴的にしめす二人の人物がいた。それは、パラケルスス（一四九三―一五四一年）とノストラダムス（一五〇三―六六年）である。まず、スイス人のパラケルススであるが、彼はイタリアのフェララ大学で医術を学び、バーゼル大学では内科と外科の講義をおこなうほど研鑽をつんだ人であったが、その一方では錬金術師でもあった。また、フランス人のノストラダムスは本名をミシェル・ド・ノストラドームといい、医師であると同時に占星術師でもあった。すなわち、この二人のヨーロッパ人は、医師であると同時に錬金術師、あるいは医師であると同時に占星術師でもあった。つまり、この二人の近世ヨーロッパ人のなかには、医師と錬金術師、医師と占星術師が並存していたのである。このことは、近世イギリスの医術をかんがえる場合にも忘れてはならない点である。

つぎに、図版⑨は、右側に外科医が鋸で患者の足を切っている姿がえがかれているが、重要なのは、この外科の手術が麻酔なしにおこなわれていたという点である。この図版では、患者の患部の近くの四カ所ほどを紐のようなもので縛ってあるのがみられるが、いずれにしても麻酔なしの手術なのである。麻酔なしの外科手術、しかも鋸での切断といったことが想像できるであろうか。

しかし、医術と錬金術との融合、医術と占星術との結合、そして、麻酔なしの外科手術といったことすべてが、近世においては現実だったのである。こうした現実は、現代的発想にはなじまないであろう。すなわち、わたしたちは近世の医術的現実を考察する際には、現代的発想をすべていったん捨てさらなければならないのである。

そこで、つぎにその医術の現実をかんがえるために、時代をテューダー朝とスチュアート朝、国をイギリスだけにしぼって医術の動きをざっと追ってみよう。

イギリスでは、王立ロンドン医科大学が創立される六年前、つまり一五一二年に「医師ならびに外科医の任命に関する法」という議会制定法が発布されている。この法律は、一五四三年にでる「民間治療師の特許状に関する法」(通称 Quack's Charter) とならんで、近世イギリスの医術が統合化、体系化されることを妨害した元凶の一つであるので、そのもっとも重要な部分を読んでみよう。

医術ならびに外科術 (両者に関する十全な知識には大いなる学問と成熟した体験が必須である) に関する技術と悪知恵が、多数の無学者によりわが国において日々実践されており、その多くの者は医術ならびに外科術に関する病識はおろか、その他の学問にもなんらの認識ももっていないがゆえに、本法を施行する。鍛冶屋、織工ならびに女性たちが、治療や至難なることどもを大胆かつ常習的にひきうけている。そこにおいて彼らの用いるものは、ある

者は妖術、魔術であり、またある者はまことに有害なる薬を疾病に適用するので、なんらの治療も望むことはできない。これは、神の大いなる不快、医術に対する大いなる不名誉、王の臣下に対する嘆かわしい危害、害悪、惨害である。なかでも、学識と悪知恵の識別のつかぬものはもっとも咎むべきものである。

「医師ならびに外科医の任命に関する法」の条文のこの部分からうかがえることは、専門家以外の者たちに対する厳しい排他的な姿勢である。六年後の王立ロンドン医科大学の創立にむけての予測があるせいか、この議会制定法の態度は、妖術、魔術などを行使する鍛冶屋、織工、女性といった無学者たちを徹底的に排斥している。科学がいまだ試行錯誤の段階にあり、また、社会全体が多層的に流動していたとはいえ、医術を専門家たちの処置にまかせようとするこの法律の姿勢は当然のものだったといえよう。

そして、この法律施行後六年たった一五一八年に王立ロンドン医科大学が創設される。この医科大学がこの「医師ならびに外科医の任命に関する法」の庇護のもとに、大学としての特権に固執するあまり、医術の中心的存在になることができなかったことはまえに述べたとおりである。みずからを庇護するこの一五一二年の法律の影響を受け、この医科大学も排他的姿勢をますます強めることになる。

そして、一五三一年になると、第一章でふれた救貧法「乞食ならびに漂泊者の処罰」が議会

を通過する。主として貧民に対する救貧法の姿勢を考察した第一章では省いたのだが、この一五三一年の救貧法の処罰の対象には、「医術に関する知識をもっているといつわる者たち」もふくまれていたのである。暴力的になつかしい故郷から追いだされ、離郷をしいられた漂泊民のなかには、生きていくために医術の知識をほのめかす者もいたであろう。というのは、乞食、あるいは漂泊者といっても、それは職種ではなく、他律的離郷後の農民だったかもしれないからである。

そして、医術との関連でいえば、一五四〇年には床屋医者の組合が設立される。この組合は、外科医以外の医師や薬剤師たちの不満もあって、二年後の一五四二年には、その独占権を廃止する別の議会制定法が施行されることになって、廃絶を余儀なくされる。

そして、翌一五四三年に「民間治療師の特許状に関する法」が施行される。この法律も「医師ならびに外科医の任命に関する法」とともに、近世イギリスの医術事情にとってきわめて重要なものなので、その条文の中心的な部分をつぎにあげておこう。Quack's Charter とも呼ばれているこの法律は、民間治療師に

> イギリス国土ならびにその他の王領のいずれかの地域内において、洞察力と実践によって、薬草、根菜類、液体類の性質、またそれらのものの作用に関する知識と経験を有する王の臣民たる万人が、訴訟、叱責、悶着、不利あるいは財産の損傷なくして・・・病気、腫れ物、

疾病のいずれかに関するみずからの熟練、経験、知識に従い、薬草、軟膏、鉱泉、湿布、硬膏を、外部の腫れ物……外傷、膿瘍、体外の腫脹あるいは病気に対し、また同種のものを同類の病気に、あるいは結石、有痛排尿困難または瘧(おこり)に対しては飲料を、実用実践する

権限をあたえることをうたっている。

この部分だけをみても、一五一二年の「医師ならびに外科医の任命に関する法」との差異は歴然としているであろう。排他的で閉鎖的でさえあった一五一二年の法律に対し、この「民間治療師の特許状に関する法」は、「洞察力と実践によって、薬草、根菜類、液体類の性質、またはそれらのものの作用に関する知識と経験」さえもっていれば、外部的疾病のみとはいえ、「王の臣民たる万人」が医術に携わることを認可している。これら二法のあいだの落差、懸隔は、いったい、なにをわたしたちに語るのであろうか。科学自体が試行錯誤の段階にあった近世において、医術もまだ「学」といえる段階にはいたっていなかった。内在的に混乱をはらんでいた医術が、三十一年のあいだにこの二法の掣肘のなかに置かれた。いってしまえば、正反対の姿勢をしめすこの二つの法律のはざまに置かれ、近世イギリスの医術は、混乱することはあっても、「学」として収斂することはとうていできなかった。この二つの法律によって、試行錯誤の途上にあった科学と医術は、いわば相乗的混乱のなかに投げこまれたのである。イギリスの近世の医術について考察する場合、この点はもっとも肝要な事実である。

法律を案出し、施行する〈整合空間〉側のこうした混乱を反映しているのか、あるいは腸チフス sweating sickness が蔓延したせいか、一五五一年には、教会法により、疾病の治療資格が医師だけに限定されるようになる。そして、翌一五五二年には、当時は捨て子養育院という形だったが、ロンドンにクライスツ・ホスピタルが創設されている。

そして、一五五八年には、近世の民間医療史の実態をしめす一つの重要な看板がロンドンで掲げられる。それは生年も没年も不明の漂泊行商医トマス・ラフキンがだしたつぎのような看板広告である。

老若男女、またお子様でも、ご病気の方、瀉血をご希望の方、癘、熱病、胸膜炎、疝痛、結石、絞扼、膿瘍、瘻孔、潰瘍、痛風、痘疹、骨の痛み、瀉血不足から起こる関節痛など、体の内外のあらゆる病気にかかっておられる方は、イースト・レインのサラセンの首の看板のあるところに、検査のためお小水をご持参のうえご来駕ください。治療うけたまわります。

このやぶ医者は、看板を掲げたばかりでなく、自宅の所在地もかなり具体的に公言しているところをみると、裏通りや袋小路に隠れ住んでいたのではなく、また、みずからの治癒力にかなりの自信をもっていたとおもわれる。

近世における病名についてはつぎの章でとりあげるが、この看板広告には、本章図版⑨でし

めした瀉血の習慣がこの一五五八年の時点ではかなり定着していたこと、そして、検尿の習慣も一般化していたことなどの情報がふくまれていてまことに興味深い。

近世の外科手術が麻酔なしでおこなわれていたことはすでに述べたが、一五六二年には、詩人アーサー・ブルック（?—一五六三年）が、シェイクスピアに発想を提供した『ロウミアスとジュウリエットの悲劇物語』を発表し、そのなかで「完全に意識を失う」薬液について述べている。しかし、この作品は、イタリアの小説家マテオ・バンデルロ（一四八〇—一五六二年）の作品のフランス語訳からいわば重訳されたもので、意識を喪失させるこの薬液が実在したものなのか、それとも虚構のものなのか、いまとなっては不明である。したがって、ブルックのこの作品のなかでは、麻酔的薬液についての言及はたしかにあっても、それが実際の外科手術において使用された証拠にはならない。ただ、関連は不詳だが、一五四〇年にプロシャ人の植物学者ヴァレリウス・コルドゥス（一五一五—四四年）がエチルエーテルの合成にはじめて成功したという事実はある。

さて、一五六五年になると、混乱と試行錯誤に揺れうごく王立ロンドン医科大学に人体解剖の特権があたえられる。一五四三年にはベルギーの医師アンドレアス・ヴェサリウス（一五一四—六四年）が七巻の『人体解剖学』をバーゼルで出版しているので、その影響がかなりあったとおもわれる。

そして、一五七七年には、近世イギリスの医術を象徴するような同種の事件が数件起こって

⑩ 1653年出版の「人体解剖」の口絵に描かれている
Nicholas Culpeper（1616-54年）

いる。それは「黒い裁判」と呼ばれる事件で、最初はオクスフォードで起こった。その裁判では、監獄熱 gaol fever と呼ばれていた病気によって、裁判官、陪審、証人、そのほか法廷にでたすべてのひとびとが死亡してしまい、囚人だけが生き残ったために閉廷となったのである。この監獄熱は、一五八一年にはヨークで、一五八六年にはエクシタで、一五九〇年にはリンカンで、そして一六三六年にはヘリフォードでも発生し、当時の関係者はこの熱病が地球の底から発生したものだとかんがえていたが、じつはそれは不潔な囚人の生活から伝染する発疹チフスだったのである。病気の原因も把握できないひとびとがこの病気の発生源を「地球の底」とかんがえたところにも、近世医術の現実の一部をみることができるであろう。

そして、近世の医術は、ウィリアム・ハーヴィ（一五七八―一六五七年）というすぐれた医師をえて、ようやく人体の血液が循環していることを知らされる。ハーヴィは、ケンブリジ大学をでたのち、イタリアのパドヴァ大学で学び、一六〇二年にはロンドンで開業した人だが、のちにはオクスフォード大学でも教鞭をとった。そのハーヴィが『動物における心臓の運動および血液に関する解剖学的実験』を出版し、血液が循環していること、またその循環の原動力が心臓の拍動にあることを証明したのは一六二八年であるが、彼が人体の血液の循環に気づいたのは一六一五年だったのである。このハーヴィの発見が、イギリスのみならず、世界的価値があったことはその後の医術史が証明しているところである。

さらに、医療の分業化がすすんだというより、むしろ独占権へのこだわりの結果というべき

であろうが、一六一七年には薬剤師組合が創設される。そして、その翌年、一六一八年には『ロンドン薬局方』*Pharmacopoeia Londinensis* の第一版が上梓される。この『ロンドン薬局方』は王立ロンドン医科大学の手になる公式の薬局方で、この大学もこれを金科玉条として固守し、医術研究の大きな指針としていた。しかし、実際は、この薬局方も、現代的発想をみごとに裏切って、芋虫、狐の乾燥した肺のほか、一、〇二八種の薬草をリストアップしただけのものであった。この『ロンドン薬局方』は、一六四九年にニコラス・カルペパー（一六一六—五四年）（一一三頁⑩参照）によって英訳されるまではラテン語版のままであったので、ますます王立ロンドン医科大学の独占物となり、ラテン語を知らないやぶ医者たちは読むことができず、その神秘性は増大するばかりであった。

一六二一年になると、後世サミュエル・ジョンスンやチャールズ・ラム（一七七五—一八三四年）などに愛読されるロバート・バートンの『憂鬱の分析』が出版されている。そのなかのやぶ医者の数について断片的な言及については前述したとおりである。

そして、一六三四年になると、医師トマス・ジョンスン（?—一六四四年）によるフランス人医師アンブロワーズ・パレ（一五〇九—九〇年）の『全集』の英訳版が出版されている。このパレについての詳細はカルボニエの『床屋医者パレ』（注3）にゆずるが、このパレ自身はヨーロッパ近世の医術の象徴的存在であると同時に、ヨーロッパ全体の医術界に深い影響をあたえた人で、ジョンスンによるこの英訳の意味は決して小さくない。

さて、一六四九年はさきにふれたニコラス・カルペパーの『ロンドン薬局方』の英訳版がでた年で、この英語版の意味をここでかんがえてみたい。アンブロワーズ・パレも「なぜ外科医たちは自分の知識を秘密にしたがるんだろうか？」(注4)という疑問を抱いたが、ラテン語版の『ロンドン薬局方』を秘守する王立ロンドン医科大学に対して、カルペパーも同様の疑問を抱いていた。「カルペパーは、一六四九年に、イギリス国家の自由は、三つの独占権、つまり聖職者、医師、そして弁護士たちの独占権によって侵害されていると言明した」(注5)のである。カルペパーは一六五一年にだした『助産婦（夫）への助言』のなかでもつぎのように述べている。

やぶ医者を大声で非難しているのはだれか？いったいだれなのだ？それは医科大学。そしてなぜなのか？やぶ医者たちは判断力がないために人を殺しているというわけである。ところが、こうした状況をつくりだす原因はだれにあるのか？大学の医師たち自身である。なぜなら、もし彼ら医師たちが医術の真の定則をひとびとに授けていたら、やぶの医術をおこなうほど血迷った人などでるであろうか(注6)。

パレとカルペパーに共通する怒りをこめたこの疑問が投げかけられている対象はかなりはっきりしているだろう。それは医術的知識の独占であり、その独占を排他的におこなっていたパリ大学（パレ）であり、王立ロンドン医科大学（カルペパー）であった。パレが疑問を抱いた

のも、カルペパーが怒りをぶつけたのも、医術がその第一義的な目的を忘れていたからであろう。

医術の改善にとって最大の障害は、健康を保ち、寿命をのばし、疾病を治癒するという人生の安楽と幸福にほかならない医術の第一の目的と意図に対する注意の欠如であった。しかし、このもっとも価値のある目的は、虚栄、見せびらかし、技巧、術策ならびにいやしい追従による財産の獲得の犠牲となったのである（注7）。

カルペパーがこの英語版をだした一六四九年という年は、ロンドン市当局が二つの布告（注8）をだすほど、追い剝ぎや強盗が跳梁し、ロンドンはきわめて物騒な状態にあったが、翌一六五〇年には、イギリスは発疹チフスの全国的蔓延にみまわれている。解剖学者のトマス・ウィリス（一六二一―七五年）が腸チフスに関するはじめての報告をおこなったのは、それから九年後の一六五九年であった。そして、さらにその翌年の一六六〇年には、試行錯誤の渦中にあったイギリスの科学界は王立協会（正式名称は The Royal Society of London for the Improvement of Natural Knowledge）を設立することになる。

一六八三年になると、コレラ、ヒステリー、マラリア、痛風、天然痘などを研究していた医師トマス・シドナム（一六二四―八九年）の著作がアムステルダムで刊行されるが、そのなか

でシドナムが自分自身が悩まされていた痛風に阿片が効果を発揮することを論じたことをきっかけに、阿片の普遍的効果が公然と議論されるようになる。シドナムは、ヒポクラテス（紀元前四六〇？―三三七年？）の原理にまでさかのぼり、すべての病因は自然であり、病気はおのずから治るものだという前提にもとづいて、ロンドンで大規模に開業し、多くの患者を集めていた。彼は「シドナムのドロップ」という阿片チンキをみずから考案したばかりでなく、食餌療法、控えめな瀉血、また肺結核には乗馬を推奨し、病室には新鮮な空気を送りこむことも提唱した。さらに、彼は、マラリア、ヒステリーのほか聖ウィトゥスのダンス（少年殉教者ウィトゥスがかかったとされるところからこの病名がついたが、実際は舞踏病 chorea）などについて正確で、詳細な臨床記録を残したことでも知られている。

そして、一六九五年には、医師ニーヒマイア・グルー（一六四一―一七一二年）がノース・ダウンズの泉から下剤用の瀉利塩を単離することに成功している。一方、時代も一七〇〇年になると、ヨーロッパ全体に天然痘が蔓延し、その後一世紀のあいだの天然痘による死亡者は六、〇〇〇万人に及んだのである。医師のジョン・ウッドウォード（一六六五―一七二八年）が、その天然痘の跳梁のなかで、エマヌエル・ティモニというギリシャ人から、予防注射で天然痘を防ぐ方法を書いた手紙を受けとったのが一七一三年であった。

以上のように、近世の医術を生んだ社会の歴史を素描してみても、医術ややぶ医者の未然の様相が提示されるだけであろう。そこで、第一章でフランチェスコ・ダッシージの思想を中軸

にして述べた近世キリスト教思想の思惟的変化についての考察を、ここで、近世のイギリス医術にそってさらに深化させてみよう。

やぶ医者という特異な生活者のいたテューダー朝とスチュアート朝のイギリス社会には、上下、縦横の流動がみられたことはすでに述べたが、一方では、かなり大規模の商業資本主義的な「物」の流通もみられはじめていた。そして、そのような社会において、個人を基盤とする「物の所有」に対する欲求も芽生えていた。ヨーロッパにおける個人の誕生については、アグネ・ジェラールがつぎのように述べている。

> 結局のところ、中世の個人は、依存と服従と連帯の網の目にとらえられていた。その網の目は、個人どうしを結びつけると同時に、個人を権力者（封建関係）や集団（信心会、同業組合、家族）に従属させた。しかしながら、独立した個人が誕生したのは、ユマニスムやルネサンスよりは早い。個人は、十五世紀早々、たいへんはっきりとその姿をあらわすのである（注9）。

ジェラールのこの見解がフランスを基盤にしていることはあきらかである。それでは、イギリスにおいてはどうであろうか。名詞としての個人 individual のもっとも古い用例としてOEDがあげているのは、ジョン・イェイツ（一六二二―五八年ごろ活躍）というピューリタンの

聖職者が一六二六年に書いた「神は、すべての特定の人間をその血のなかにみたとも、〈汝、生きるべし〉とすべての個人に対していうあわれみをもっていたとも、預言者はいっていない」という文章である。

個人の誕生を十五世紀初頭とするジェラールの見解と、イギリスにおけるもっとも古い一六二六年の個人の用例とのあいだにはほぼ二世紀の差があることになるが、ヨーロッパにおける個人の誕生というこの問題は、この本でかんがえるにはあまりにも大きく、またあまりにも重要なので、あらためてかんがえることにして、ここでは、イギリスの近世社会における商業資本主義的な物的流通と、近世のイギリスの個人のなかに芽生えはじめた所有に対する意識との関連についてのみ考察してみたい。もともと個人という言葉は、ラテン語のこれ以上分けられないものという意味であったが、この「これ以上分けられないもの」という意識のなかに、商業資本主義に刺激された所有の意識の嚆矢があったとわたしはおもう。

そして、重要なことは、芽生えはじめていたその所有意識の対象が、物ばかりでなく、病気の苦しみや苦痛を通じて意識せざるをえなかった自分の肉体をもふくんでいた点である。

巷間伝えられるところでは、男性の大部分はさまざまな折にこの病気のなんらかの種類にかかったことがあるとおもわれ、とくに多くの者が重傷になっているその病気が無害だとはおもわれないがゆえに、その病気が原因で死亡した者がなぜかくも少数なのか不審におもっ

ている。調査の結果、その病気で死亡した者は、潰瘍およびただれが死因として病院より報告されたことが判明した。さらに簡潔にいえば、死因を梅毒(French Pox)と記されているすべての者が、セント・ジャイルズならびにセント・マーティン・イン・ザ・フィールズ教会の書記たちのみによって報告されたことが判明した。当地には、もっとも堕落した、もっとも破廉恥な不純の館があったのである。以上の事由から、忌み嫌われた人間、および鼻の欠落した人間のみが、猖獗をきわめているこの疾病を死因として検屍官により報告されたというのがわたしの結論である(注10)。

これは、イギリスでもっとも初期の統計学者であるジョン・グラント(一六二〇—七四年)が一六六一年に出版した『週間死亡報告に基づく自然ならびに政治に関する観察』の一部である。梅毒についてはつぎの章でもふれることになるが、この猖獗をきわめた病気が梅毒であることはあきらかである。「潰瘍」や「ただれ」や「鼻の欠落した人間」が梅毒に関係があることはだれの目にもあきらかであったはずなのに、その事実を隠蔽しようとした〈整合空間〉の論理を、グラントはみごとにうち砕いている。

近世のイギリスに芽生えた個人の意識は、快楽への欲求を内包するみずからの肉体をもまるごと、所有の対象としてとらえていた。そして、その快楽への欲求が結果として梅毒、淋病の跳梁を許していたことは歴史的事実なのである。その歴史的事実の一環として、ここで、あの

日記を残したサミュエル・ピープス（一六三三―一七〇三年）のカサノヴァにも匹敵する性的遍歴についてかんがえてみよう。ピープスは海軍省の役人をしていた一六六〇年から一六六九年の期間に、梅毒などの性病に対する恐怖もあり、しかも避妊についての知識もまったくない状態で、五十人余の女性と肉体関係をもっている。ヨーロッパにおけるコンドームについての最初の言及は、一六五五年にパリで匿名出版された『女の学校』にあるとするのが一般的だが、どうやらピープスはこの本も読んでいなかったらしい。

……彼（ピープス）は、執拗に自分を苦しめる禁欲的良心と、抑えることのできない肉欲と快楽嗜好とにつねに心をかき乱されていた。絶えずりっぱな決意をし、そしていつもその決意を裏切っていた彼には、自分を固定する強い道徳的中心がなかったのである。海軍省での職務については大いに細心でありながら、彼の私生活はちょっとした混乱状態であった。おそらく、それは、彼が職務の緊張からの解放の方法として女性を追い求めたからである（注11）。

ピープスも、ヨーロッパ人に古くからみられた「精神と肉体との相容れない欲求をいかに一致させるかという問題」（注12）に懊悩していたのである。近世のヨーロッパにおいては、例えばこのサミュエル・ピープスにみられた内面的苦悩とは、いったい、どのようなものだったので

あろうか。所有に対する欲求をはらみはじめた個人の肉体は、いうまでもなく普遍的に時間的なものである。ところが、たとえ表層的にしろ、近世のイギリス人たちの宗教的思惟に君臨していたプロテスタンティズムには、時間の領野にみられるすべての事象に対する不信があった。

したがって、ピープスの心がひき裂かれていたのも、時間的存在としての肉体と、プロテスタンティズムが信念の中心としてかんがえていた無時間的な思惟とのあいだに一種の乖離があったからである。しかも、これは決して近世型の乖離などではなく、ヨーロッパ史の古層にもみられる乖離なのである。肉体を場とする病気あるいは痛みを通じて、ひとびとの意識は医療にむかったわけだが、疾病や痛みによって意識化された肉体の意識には無時間的なものを志向する余裕はなかったのである。近世における医療をかんがえるとき、〈時間的なもの〉と〈無時間的なもの〉とのこの乖離は決して看過することのできない問題なのである。

注

1 Benjamin Lee Gordon, *Medicine throughout Antiquity* (F. A. Davis, 1949), p. 628

2 L. M. Beier, op. cit., p. 13.

3 ジャンヌ・カルボニエ、『床屋医者パレ』、藤川正信訳、福武文庫。

4 同書、七十六頁。

5 Christopher Hill, *The World Turned Upside Down* (Penguin, 1988), pp. 297-8.

6 L. M. Beier, op. cit., p. 48.

7 Roy Porter, op. cit., p. 210.

8 'Two Orders of Parliament: The one, Appointing the Giving of Ten Pounds to Every One who shall bring in a High-way-man; The Other: Referring to the Council of State to give Reprieves to Persons Guilty of Robberies, if they Shall Discover any of their Accomplices' (City of London), & 'Instructions to be Observed by the Several Justices of the Peace in the Several Counties within the Commonwealth for the Better Prevention of Robberies, Burglaries and Other Outrages' (City of London).

9 アグネ・シュラール『ヨーロッパ中世社会史事典』池田健二訳　藤原書店　二二八頁。

10 cf. L. M. Beier, op. cit., p. 137.

11 Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500 - 1800* (Penguin, 1988), pp. 343-4.

12 Angus McLaren, *A History of Contraception* (Basil Blackwell, 1990), p. 77.

第五章　王立ロンドン医科大学の成り立ち

第一章「〈整合空間〉と〈異空間〉」でものべたように、近世のイギリス社会はほとんどすべての様相において流動的であった。政治、経済、法律の面でも、体系的に完成度に欠けていた。こうした面においてそうであったのだから、科学的分野における未然性はいっそうきわだっていた。医術の基盤となる〈知〉の体系がもともと科学的領域に属していることはいまさらいうまでもない。しかし、近世の医術はどうであったか。近世の医術の〈知〉はいまだ試行錯誤の段階にあって、科学にまで体系化されていたとはとうていいえない。

しかし、近世イギリスの医術事情のなかに厳然と存在していた王立ロンドン医科大学を無視して近世医術史を語ることはできないだろう。そこで、この王立ロンドン医科大学の存在の意義をかんがえるまえに、あらためて簡略にこの医科大学の沿革をまとめてみておく必要があるだろう。といっても、現代の組織や制度のように、何年に創設されたというように画然と話を進めることはできない。根幹となる医術知識のありようを反映して、王立ロンドン医科大学も揺藍期から混迷が多くみられたからである。

年代記的にいうと、まず一四二三年に医科大学 the College of Medicine なるものが創設されているが、この大学はまもなく歴史から姿を消していて、王立ロンドン医科大学と直接関連

づけてかんがえることはできないであろう。王立ロンドン医科大学を主軸にすえると、つぎにみえてくるのは一五一一年という年である。この年に医業規制法が議会で制定されているからである。この医業規制法は、医師の免許を規制しようとするものであった。

しかし、この医業規制法で明確にうちだされたのは、各監督管区の主教が免許の交付の責任をもつという、現代的発想にはなじまない特色であった。これはいったいどういうことであろうか。こうした事態が生じる根底には、〈知〉の領域の未熟な体系化があったことは明白である。本来科学の領域にはいるべき医術の世界に、まったく無関係であるはずの神学の領域が侵入してきたのである。医術的習練をおさめているわけでもなく、また医術的知識もまったくない宗教家が医術の重要な局面にかかわってくるというこの近世的な事情は、王立ロンドン医科大学の成立をかんがえる場合、忘れてはならない随伴条件だったのである。

王立ロンドン医科大学の前史についていえば、つぎに問題となるのは、前章でもふれた一五一二年の「医師ならびに外科医の任命に関する法」であろう。これはれっきとした議会制定法であるが、この法律には、王立ロンドン医科大学をも特徴づける特権的、排他的性質が色濃くみられた。要するに、この法律は、大学における正規の教育を受けた者だけを庇護し、それ以外の者たちを徹底的に放逐するものだったのである。近世イギリスの医術事情にとって、この「医師ならびに外科医の任命に関する法」のデメリットはきわめて大きいといわなければならない。というのは、この法律によって、近世イギリスの医術のなかに、特権の中央集権化が根づ

よくみられるようになるからである。

そうした特殊な状況のなかの王立ロンドン医科大学の誕生にまつわる事情をここではもう少しくわしくみてみよう。

歴史的には、王立ロンドン医科大学の創立は一五一八年ということになっている。しかし、この年は、当時の枢機卿であったトマス・ウルジ（一四七五？―一五三〇年）が、トマス・リナカ（一四六〇？―一五二四年）をふくむ侍医団とともにヘンリ八世に医科大学創設の請願書を提出した年なのである。当時、疫病が蔓延していたという歴史的背景もあって、ヘンリ八世はこの請願書に特許状を与える。この請願書の提出にもトマス・ウルジという宗教家がかかわっていた点を忘れてはならない。

しかし、侍医団のなかでのトマス・リナカの医師としてのエネルギッシュな活躍も忘れてはならない。リナカはオクスフォード大学を卒業したのち、一四八五年か一四八六年にイタリアのパドヴァに留学している。それはパドヴァが当時のヨーロッパにおいてもっとも進歩した医術をほこっていたからである。トマス・リナカは一四九六年にパドヴァで医学博士の学位を取得し、その年にイギリスに帰国してヘンリ八世の侍医団の一人になっていたのである。

リナカが一五一八年に請願書を出す動機はなんだったのだろうか。その動機の源となったもののなかには、パドヴァで学んだ医術哲学があったはずである。リナカが留学した当時のパドヴァの医術の中心には、現代からみればまことに当然におもえるが、人間尊重の哲学が底流し

ていた。一五一八年に請願書を提出する動機のなかには、リナカがパドヴァで習得したその人間尊重の哲学も大きく作用していたはずである。人間尊重ということは、人間を時間的存在としてまず認め、その人間を人間以外のものより重視するかんがえである。

しかし、パドヴァの思想を身につけてイギリスに帰国したリナカを待っていたのは、パドヴァのそれとはひどく異なる思想であった。パドヴァの医術哲学はいわばルネサンスを意識したものであったが、リナカが帰国したイギリスの思想風土はまだルネサンスとはいえないものであった。

したがって、跳梁していた疫病といった要因もあったにせよ、リナカはパドヴァ型とは異なる思想風土のなかでパドヴァ型の理想を実現すべく請願書を提出したのであった。しかし、リナカは、パドヴァ型とは距離のあるこの思想風土のなかで挫折したわけではなかった。リナカの周囲には、イタリア滞在の経験もあり、さらにはエラスムスに年間配当金を支給することになるジョン・コリット（一四六七？――一五一九年）や、おなじくイタリア留学の経験をもち、エラスムスやトマス・モアとも親交のあったウィリアム・グロウシン（一四五〇？――一五一九年）などがいて、リナカのパドヴァへの傾倒をささえていたからである。しかし、この思想風土的な齟齬は忘れてはならないだろう。

しかし、ともあれ、こうした事情で請願書が提出され、ヘンリ八世によって特許状は授与されたのである。したがって、この一五一八年は王立ロンドン医科大学創立の種がまかれた年と

かんがえるほうがより正確ではないだろうか。請願書を提出したトマス・リナカは、特許状がおりたのち王立ロンドン医科大学の初代学長になる。しかし、王立ロンドン医科大学はリナカだけによって充実されていくのではない。

リナカにつづいて次期学長になったジョン・キーズ（一五一〇―七三年）もリナカとおなじようにパドヴァに留学している。さらにはウィリアム・ハーヴィ（一五七八―一六五七年）、トマス・シドナム（一六二四―八九年）らの努力によって徐々に王立ロンドン医科大学は充実したものになっていくのである。

しかし、リナカが体感し、体得したパドヴァ型の思想風土は容易にはイギリスでは現実のものとはならなかった。医術をめぐる思潮に新しい風を送りこんだ人間としては、フランシス・ベイコン（一五六一―一六二六年）とウィリアム・デル（?―一六六九年）も挙げなければならない。ベイコンは『学問の進歩』（一六〇五年）や『新論法』（一六二〇年）によって新しい科学研究、新しい自然認識を主張したが、その背景にルネサンス的自覚があったことはあきらかである。また、ウィリアム・デルも『学問、学校ならびに大学の正しい改革』（一六五一年）において狭隘な王立ロンドン医科大学のあり方を批判した。しかしながら、当時のイギリスの思潮は容易にはパドヴァ化しなかった。

もう一度話を王立ロンドン医科大学の誕生にまつわる事情にもどそう。一五四二年になると、一五一二年の「医師ならびに外科医の任命に関する法」とはほとんど正反対の「民間治療師の

特許状に関する法」が制定される。この「民間治療師の特許状に関する法」の内容については前章でのべたのでここでは省略するが、この法律の背景にルネサンス思想の萌芽があったとはわたしはいわないし、いうつもりもないが、しかし、この法律を成立させた要因の一つとして、イギリス国民の意識のルネサンス的変化があったことを否定できる者もいないであろう。ともあれ、この法律によって、医術が万人にいわば解放されたことだけは事実である。

そして、一五五一年になると、教会法によって、医師だけに治療する資格が与えられる。したがって、王立ロンドン医科大学の創立をこの一五五一年にするほうが妥当なのではないだろうか。というのは、混迷のまっただ中にあった王立ロンドン医科大学がこの時点で一つの区切りをむかえたといえるからである。

しかし、王立ロンドン医科大学が創設当初から排他的、特権的姿勢をもっていた点にはかわりがない。エリートはエリートの患者だけと接することによってますますエリート化していき、その独占権という権勢に安住する姿勢は十九世紀までみられた。近世のイギリスの医師には友人より敵が多かったといわれる所以である。医師はエリート化して殻にこもり、独占化現象はますますひどくなっていった。

ヒュー・ラティマ司教（一四八五―一五五五年）が「医術は貧しいひとびとではなく、裕福なひとびとだけのために用意されている治療だ。貧しいひとは医師をやとうことはできないからである」（注1）と慨嘆したのは一五五二年であったし、ロドウィック・マグルトン（一六〇九

—九八年）が医者は「この世で最悪のぺてん師だ」（注2）と怒りを爆発させたのは一六九九年であった。リナカ、キーズ、ハーヴィ、シドナムたちのほか、ベイコン、デルたちの活動がありながら、王立ロンドン医科大学をとりまく状況はなぜ独占化の傾向を強めていったのだろうか。

そこには、近世イギリスにおけるルネサンス思潮定着のたち遅れという原因もあるだろう。しかし、医術を中心にかんがえるとき、もう一つ大きな動勢があったことも忘れてはならない。

近世はヨーロッパ諸国における大学の興隆の時代でもあった。大学の興隆と充実の時代といったほうが正確かもしれない。イギリスもいわゆる教育革命をむかえる以前であった。この大学の興隆と充実によってどのような変化がみられたのだろうか。その変化の中心にあったのは神学と法学であったが、医術事情もその変化の影響をこうむることになる。さらに具体的にみてみると、王立ロンドン医科大学などの医術の教師たちは、臨床にさく時間よりも、大学における講義にむける時間をより重視するようになっていった。講義の準備をし、つぎに実際に学生たちに講義をする時間のほうがますます重要になっていったのである。

医師あるいは医術の教師たちのこの臨床性からの離反は、理論研究には役だったが、実際に痛みや苦しみを感じている患者たちをおきざりにすることになった。医術は、科学としてまだ揺藍期にあったわけだから、医術理論の研究が優先的にかんがえられたのも当然だったかもしれない。しかし、医術を志すひとびとの数を非常に限定したことも、近世イギリスにおいては大きな問題であった。

たとえば、一五一八年ごろのロンドンの人口は約六万人であったが、王立ロンドン医科大学に在学していた学生は十人ぐらいであったし、一五八九年になっても、着実に増加する人口をしり目に在学学生の数は三十八人だったのである。いっぽう、地方をみてみると、一五七〇年から一五九〇年までの時期のノリッジでは医師は十一人しかいなかったし、一六〇〇年ごろのロンドンにおいてもわずか五〇人ほどであった。しかも、ロンドンの場合は中心部から七マイル以内で開業しなければならなかった。

一六〇三年から一六四三年までの時期にあたってみると、王立ロンドン医科大学で医師の資格を取得して開業した人数は合計八一四名いたが、そのうちロンドンを離れてノリッジで開業した者十七名、カンタベリで開業した者二十二名、イクセタで開業した者十三名、ヨークは十名であった。また、女性に対して非常に排他的な近世においては当然のこととかんがえられていたのだろうが、王立ロンドン医科大学には女子学生は皆無だったのである。

科学思想史的にみてまだ試行錯誤の段階を脱却していなかった王立ロンドン医科大学が、臨床よりも理論研究に努力を集中したのは当然だったかもしれない。しかし、薬草集成にすぎなかったロンドン薬局方を金科玉条として、排他的な殻にこもってしまった王立ロンドン医科大学が入学学生の数を限定し、臨床医術から乖離する傾向にあったことは、仁術の本道に悖ることではなかったのだろうか。

したがって、イギリスにおける王立ロンドン医科大学の沿革をかんがえる場合、学生に資格

を与え、医術の恩恵をひろくひとびとにおよぼしたといった単純な結果を予想するのではなく、そこにみられた入学者の限定、ルネサンス思潮への対応の遅れ、性差意識、〈知〉の領域の混淆、薬局方の秘匿といったさまざまな近世的事情もあわせてかんがえる必要があるのである。

それにしても、一般のひとびとが数シリングしか払えない経済的窮状にあった時代において、王立ロンドン医科大学がますます仁術とは反対の方向に進んでいったことは痛ましいことであった。たとえば、一六九七年に一日の医療費として五ポンドも請求した外科医ジェイムズ・ヤング（一六四六―一七二一年）のような人物が登場する状況からもあきらかなように、近世イギリスの医術事情は容易にパドヴァ化しなかったのである。

注

1　Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (Penguin, 1978), p. 13.

2　ibid., p. 17.

第六章　近世病名考

近世のイギリス人の心は〈時間的なもの〉と〈無時間的なもの〉といういわば背反する二律にひき裂かれていたわけだが、とくに病気は、その〈時間的なもの〉のトポス、つまり肉体への意識をいやがうえにも刺激した。しかし、その病気の名称となると、医術自体が一つの学への収斂をはばまれていた状態にあったので、近世の一般のひとびとはいうにおよばす、医師やぶ医者も苦慮していた。言葉をかえていえば、体系化、細分化されている現代医学の観点からみると、はっきりと認定できない病名が多くみられるのである。

その不可解な森にわけいるために、近世の医者が残している断片的記録をまずみてみよう。最初にあげるのは、一五九五年から一六〇五年の時期にシュルーズベリで医業をいとなみ、名前はドクター・バーカーだったというデータ以外は生年も没年も不明の医師のものである。この医師は、存命中に一四五名の患者を診察したことがわかっているが、つぎにあげるのはそのカルテの一つである。

「クライヴ氏について」

強度の鬱病で、孤独をよろこぶ。彼は、自分がばかげた、むだなことを語っているとかんが

えている。また、自分が弱く、足と肉体が衰えていると想像する……食欲、睡眠良好、皮膚はざらざらに乾き、硬く、肉にまでその割れ目が及んでいる（注1）。

つぎにあげるのは、一六一九年から一六二二年の期間に活躍したことは判明しているが、姓名および生年没年も不明の医師のカルテである。

「若いメイナド嬢について」

肝臓障害。胃には粘液凝結。身体は湿気多し。歯痛に悩む。両目は腫れ、ふくれあがっている。月経異常にしばしばみまわれたが、現在は少々。しかし、頻度は多く、水っぽい。肺病あるいは浮腫をもっとも恐れている（注2）。

これらのカルテには、近世の医術の生々しい現実の一部が記載されている。しかし、これだけではあまりにも断片的すぎるので、つぎにかなり詳細な記録を残している二人の医師のカルテをそれぞれ三種類ずつみることにしよう。

最初はジョン・シムコッツ（一五九二?——一六六二年）の記載例である。

一、「手術をほかの外科医にゆずった症例」

一六五二年。左腕に潰瘍のあるケンプスンのケイター氏はあまりにも内臓浄化をおこなったため、左腋窩に激痛をともなう硬い腺腫瘍ができ、熱性疾患を併発。その後、外からぴったりとつけた湿布と、友人にすすめられたほかの硬膏を適用。患部はますます悪化し、消滅するどころかついに化膿の傾向が強くなりはじめた。わたしは小さな孔を無理にあけ、多量の膿をだし、その後ロンドンのある外科医により切開され、その外科医により完治。

二、ハンティンドンのコーベット氏の子供(女児)、へその緒の稚拙な切開により、へその穴がふさがらず、治療せず……少なくとも三年間通院。その母親、古いイギリスの医術書の秘法をみつけ、それを断行し、成功。

三、ケンブリジの五十歳のクリスティアン・ティーナム夫人はほとんど睡眠をとることができず、十五年間、毎夜ほとんど二時間、そしてごくまれに三時間しか睡眠をとっていない。二十年間、動悸がし、最初に床に入ると、いろいろなものの姿が眼前を通過する。耳鳴り。夫人はまるでいつも頭の頂上を重い荷物か、錘が押さえつけているように感じている。後頭部に激しい熱を感ずる。いつも日に一度、譫妄状態に陥る。左腹部に痛み。疝痛の際は、腸内ガスが膿化。背中虚弱。月経中(五年前に閉経)顔は腫れあがり、その後数回の大便。三年前、麻痺におそわれ、この麻痺により、いぜん頭部は麻痺している(注3)。

つぎは、ジョウゼフ・ビンズという医師のカルテであるが、この医師についてはつぎにしめ

すように一六四〇年代に活躍していたということ以外、生年も没年も現時点では不詳である。

一、一六四〇年六月七日夜、兵士エリス・モーガンなる者（酒気を帯びた兵士仲間と親族の男により）四カ所の穿刺を受ける。一つは胸骨の中心部、一つは胸部左の上方部……一つは左肩近く……一つは鎖骨先端方向の左腋窩の少々上方。

二、「ウィルスン夫人が出産した嬰児について」

その嬰児には、頭骨のうなじの部分に小さな瘤、もしくは柔らかい腫瘍が所見された。この瘤、もしくは腫瘍は、毎月その大きさを増したので、一六四八年九月には人のこぶし大になった。わたしはそれが分泌液であると確信していた。その嬰児の頭はその年齢の子供の通常のものよりはるかに大きく（その時点ではほぼ生後八カ月）、わたしは頭骨に穿孔を認めた。術後に発生するかもしれない偶発症候のため、わたしは不安だったが、嬰児の母親のたっての懇願もあり、嬰児について母親は十分覚悟を固めてもいたので、一六四八年九月十五日、この腫瘍の切開をおこなった。

三、「未熟な医者にかかり、梅毒治療に水銀を内服したジョウン・カーターについての所見」

（一六三九年五月八日）

（この女性患者の）下顎骨は腐敗（そして歯は抜け落ちている）、片方の頬からもう片方の頬へかけての部分、また両頬と顎はひどく腫れて硬くなっている。患者は三年前にやぶ医

者quackのキクストンにより、溶剤処置を加えられ、それ以後ときおり嘔吐しつづけている。当時、患者の両頬は手当されておらず、潰瘍を生じ、両頬には非常に硬い瘢痕が形成されていたため、患者は上下の顎を十分にあけることができず、キクストンにより切開。その後、患者は、頬の筋肉に萎縮が生じ、口を十分に開くことも、頭を十分にあげることもできなくなっていた（注4）。

近世の医術という複雑な迷路の現実をみるために、残存している当時の医師たちのカルテをいくつかあげたが、そこにはいわば統一原理を欠いたままの事実の記録、記載が提示されているだけなので、十全な資料とはとうていいえない。記載者がやぶ医者ではなく、医師であっても、欝病、肝臓障害、月経異常、稚拙な切開、譫妄、腫瘍、手術後の偶発症候、梅毒に関するやぶ医者の未熟な加療などについての記録には、「学」としての統一性があるとはいえないであろう。

ここでは、近世の病名についてかんがえるつもりなので、ここにあげたジョウゼフ・ビンズのカルテを詳細に調査した最近の研究（注5）をまずみてみよう。つぎの頁の表はビンズが一六三三年から一六六三年の期間にみた患者の疾病を一覧表にしたものである。

この一覧表からは、病名不明一名、性別の記載のないもの二十三名は省いたが、性別の記載もれのうち、膿瘍と腫瘍と水頭症がそれぞれ三名ともっとも多いことを断っておきたい。さて、

病名	女	男
淋病		27
梅毒	29	74
癪	4	3
わき腹の痛み	1	
悪心		1
不眠症		1
排尿停止		3
予防医術	1	1
一般的疾病		1
背中の痛み	1	2
吐血	1	1
咳	1	1
ヒステリー	2	
喘息	1	
壊血病	1	1
新種の熱病		1
下痢質	2	2
悪液	4	
カタル	1	
癇痛		1
頭痛	3	2
胃痛	3	1
咽喉炎	5	1
てんかん		1
火傷	3	3
犬の嚙み傷		2
人間の嚙み傷		3
頭部の傷	12	9
牛の角傷		1
ヨーロッパクサリヘビによる傷		1
くるぶし捻挫		1
骨折	18	24
脱臼	2	12
銃弾の傷		9
刺し傷	1	11
傷(雑)	3	14
膝の傷		1
手首の傷		1
かすり傷	4	8
捻挫	3	1
足の傷		1
膿瘍	26	37
脱腸		10
瘻孔	6	15
睾丸水瘤		8
肛門瘻孔		4
潰瘍	3	2

病名	女	男
手の潰瘍	1	
舌の潰瘍と腫瘍	1	2
口の潰瘍	1	
腕の潰瘍		1
足の潰瘍	6	1
口唇の潰瘍		1
顎の潰瘍		1
顔面の潰瘍		1
腫瘍	5	14
腕の腫瘍		2
背中の腫瘍		1
額の腫瘍		1
腋窩の皮脂嚢胞	1	
鶏眼		1
鼻の茸腫	1	
背中の腫脹		1
壊血性腫脹	1	
足の腫れ	2	2
瘡痒		2
皮疹	4	
帯状疱疹	1	
しらくも	1	
斜頸		1
瘰癧	4	1
壊疽	1	2
カリエス性の骨	2	4
四肢切断		1
痔核	1	1
鼻の疾病		1
睾丸の腫脹		1
関節炎		1
動脈瘤		2
動脈転位	1	
足の痛み	1	1
歯肉障害	1	4
肩の痛み	3	2
膝の腫脹	2	1
腰痛	1	1
虫歯	1	
口唇の疾病	1	
眼病	7	2
胸部感染	5	
こし不けつ	3	
月経不順	10	
目の癌		1
胸部の癌	6	
陰茎の癌		1
小火器による傷		2

この一覧表をみてわかるとおり、またさきにふれたグラントの指摘を裏づけるように、男女とも淋病と梅毒がもっとも多い。性病は、グラントの指摘どおり、近世イギリス社会でもっとも多い病気だったのである。

ところで、この一覧表のなかには現代的知識から想像のつくものもある。例えば、排尿停止 stopping of urine は、男性特有の前立腺肥大症か、性病の進行による排尿障害であろうし、肛門瘻孔 anal fistula は、内痔核か肛門膿瘍であろう。しかし、近世の病名はこのビンズのカルテでつきているわけではないので、つぎに現代からは想像しにくい近世の病名をあげておこう。

以下にあげるのは近世で知られていた病名のうちの三十あまりのものだが、例えば、聖ロレンスの熱病 St. Laurence's fever といった病名は、現在となってはその意味もまったくわからないので省いてある。それでは、これ以外の病名の意味は把握できるであろうか。以下の近世的病名については、その用例を主としてＯＥＤにたよることにしたが、実際の用例を読んでも、それが近世という歴史的コンテクストのなかで使われているために、その用例自体が論理学でいう一種の petitio principii（先決問題要求の虚偽）になってしまい、真の意味はおしなべてきわめてつかみにくい。

わたしたち人間の歴史は、ある観点からすれば、さまざまのものに名前をあたえてきた歴史、つまり命名の歴史ともいえよう。例えば、日本語でも猫をべつの名詞で表現しろといわれても、わたしたちはたちまち困惑してしまうであろう。人類史は、さまざまなものにはじめて名前を

あたえる瞬間の積みかさねの歴史ともいえるだろう。そして、人間は、ものにはじめて名前をあたえ、その言葉によって、そのものをこの世界に存在させてきた。花や草といった目にみえるもの、形のあるものをはじめて命名する瞬間には、人間は詩人になったはずである。それが、例えば病気といった目にみえないものの場合、人間ははじめて詩人の苦しみを経験したにちがいない。目にみえないもののことを語る、すなわち、不可視のものを可視化しなければならない瞬間に遭遇したからである。現代のわたしたちは、過去の人間たちが苦しみながら詩人になって生みだそうとしたそうした言葉の群れのなかで生きている。

したがって、近世の病名をかんがえる場合も、そうした命名の瞬間、創造の瞬間におけるわたしたちの父祖の苦悩に思いを馳せるべきであろう。とくに、近世の病名の場合、医術自体が試行錯誤の途上にあったことをかんがえれば、病名が petitio principii にならざるをえなかったのは当然だったともいえよう。つぎにあげる近世の病名群も、その意味で一種の petitio principii 博物館になっている。リストは、日本語、原語、短い説明、そして現代の病名、の順である。

一、瘰癧 King's evil, scrofula。この病気については、キース・トマスのつぎのような説明がある。「英国国教会の指導的聖職者たちがとりおこなう特別な宗教儀式において、王は、長い行列をつくって待っているひとびと一人ひとりに両手でふれた。患者たちが、一人ひ

とり、王に近づき、ひざまずくと、王たちは患者たちの顔に軽くふれた。一方では、司祭が新訳聖書の「マルコによる福音書」の一節「彼らは病めるひとびとのうえに手をおく、すると、病めるひとびとは治るであろう」を音読した。患者たちはいったんさがり、ふたたび前方に進みでた。王が、白い絹のリボンに結ばれた金貨を彼らの首にかけてくれるからである」(注6)。これは、多くの青少年がかかった病気で、王もしくは女王にふれると治ると信じられていた。その意味で、別名 royal touch とも呼ばれていた。[現代の病名]頸部リンパ節結核。

二、淋疾 rickets。ロレンス・ストーンはこの病気についてつぎのように述べている。「幼児期の不十分な毎日の飲食物が多くの子供たちを淋疾で奇形にした」(注7)。[現代の病名]骨軟化症、あるいはビタミンD欠乏症。

三、聖アントニ熱 St. Anthony's fire。聖アントニ熱とは、麦角に感染した小麦から作られたパンを食べたことが原因で三五六年に死亡したといわれているエジプトの荒野の隠者に由来している(注8)。[現代の病名]丹毒、麦角中毒などによる皮膚の炎症。

四、監獄熱 gaol fever。本書一一四頁参照。[現代の病名]発疹チフス。

五、癰 carbuncle。癰とは、赤く腫れるものをいうが、それが同時に多く発生すること。[現代の病名]一種の癤腫症?

六、消渇(しょうかつ) gonorrhea。別名ポックス、あるいはクラップとも呼ばれていたが、語源はフラン

ス語の le grande gorre にあるらしい（注9）。［現代の病名］淋病。

七、聖ウィトゥスの舞踏 St. Vitus('s) dance。本書一一八頁参照。一説には、この病気の患者たちが舞踏の守護神聖ウィトゥスの寺院で回復祈願をしたことから。［現代の病名］リウマチ熱。

八、脱腸 rupture。OEDは用例の一つとして、トマス・エリオット（一四九〇―一五四六年）の『健康の城』（一五三九年）のなかの「したがって、運動をする者には、閉鎖症や rupture の危険は起こらないであろう」をあげている。［現代の病名］ヘルニア。

九、癆 ptisick。OEDは、ここでの意味にあう用例としては聖職者で著述家だったエドワード・トプセル（?―一六二五年）の『四足獣の話』（一六〇七年）のなかの「雌豚の乳は、血行と tissick に対しても効果がある」をあげている。別名 hectic fever, lupus, scrofula, 'the wasting sickness', 'the white plague' とも呼ばれていた。［現代の病名］肺結核。

十、癲癇 falling sickness。OEDは前項のトプセルの『四足獣の話』の「ケナガイタチの胆嚢は Falling disease に推薦されている」をあげている。［現代の病名］英語では、epilepsy。

十一、水頭症 hydrocephalus。頭蓋骨がまだ連結していない嬰児の場合、頭部がふくれあがることがある。用例の一つとしてOEDがあげているのは、一六七〇年に書かれた「生後一年のある子供は、Hydrocephalus にひどく冒されていたので、切開してみると、頭部か

ら透明だが、塩分をふくんだ水が三十六オンス採取された」という文章の一節である。［現代の病名］風疹に代表されるウィルス感染による障害で、中枢神経が冒されることがあることが現代では判明しているので、風疹か。

十二、後麻 gleets。OEDが用例の一つにあげているのは、一六九九年の「わたしは傷口にあてておいた塗布が、一般に Gleet と呼ばれる水っぽい体液でびっしょりになっているのに気づいた」。これは、また、貧者の性病とも呼ばれていた。［現代の病名］性病性リンパ肉芽腫瘍？慢性尿道炎？軟性下疳？

十三、横痃 buboes。OEDは薬草学者のジョン・ジェラード（一五四六―一六一二年）の『本草書、もしくは植物概論』（一五九七年）のなかの「その膿瘍は、そのような秘所に潜んでいるところから Bubo と呼ばれている」を用例の一つとしてあげている。要するに、鼠蹊部リンパ節が炎症を起こして腫れたものを指しているとおもわれる。［現代の病名］梅毒？軟性下疳？鼠蹊部リンパ肉芽腫？

十四、性病 shanker。これは下疳を意味するフランス語 chancre に由来し、OEDは用例の一つとしてスコットランドの詩人アリグザンダー・モンゴマリ（一五六八―八九年ごろ活躍）の『モンゴマリとポウルワトとの口論詩』（一六〇五年）のなかの「ヒリヒリ熱いところ、chanker」をあげている。［現代の病名］下疳？前項参照。

十五、疝痛 colic。胸部臓器の疼痛を指していたらしいが、OEDは以前に引用したトマス・

コリアトの『雑文集』（一六一一年）のなかの「三、四日ごとに起こる瘧、疥癬、cholicke」を用例の一つとしてあげている。［現代の病名］狭心症？自然気胸？ただし、このcolicには結腸の意味もあり、近世の用例ではどちらの意味で使用されているか判然としない場合もある。

十六、瘻 fistula。通常は、細長い穿孔を指していたらしい。用例の一つとしてOEDは翻訳家で印刷業者であったロレンス・アンドルー（一五一〇―三七年ごろ活躍）の「一日に二回、その水でfistulaを洗浄するのがよい」をあげている。［現代の病名］膀胱腫瘍？膀胱膣瘻？十二指腸潰瘍？

十七、瘰癧 scurvy。このことについてロイ・ポーターはつぎのように述べている。

「一般に理解されていた壊血病的症状、そして正規の医師とquackの説明におなじように登場し、強調されていた壊血病的症状とは、皮膚疾患となってあらわれるとかんがえられていた。そして、この皮膚疾患のなかには、潰瘍、瘰癧による腫れ、腫れた歯ぐき、ぐらぐらの歯、臭い口臭、出血、衰弱、食欲不振などがふくまれ、そのすべてが悪性の血液、消化不良、体内の病的体液（とくに、血液の濃度をあげて黒ずませた黒胆汁の異常増加）の結果だとかんがえられた」（注10）。これは近世においては非常に多くみられた病気で、そのためトモシリソウscurvy-grassが家庭療法によく使われた。（リスト一参照）［現代の病名］ビタミンC欠乏症。

十八、痕堪(わいたい) pain of joints。この病気の近世的用例はきわめてまぎらわしく、その意味範囲もきわめて曖昧である。[現代の病名]しいていえば、関節痛、風疹や糖尿病などから起こる関節の痛み。

十九、瘧 ague。「マラリアと同一視される場合もある間欠性の熱性疾患。ague の形態は発作の間隔によって決まる。毎日起こる ague は連日性の発作、隔日性の ague は二日ごとの発作、四日性の ague は三日ごとの発作という特徴がある」(注11)。[現代の病名]マラリア熱?

二十、火病 sweating sickness or military fever。この病気がイギリスで最初に発生したのは一四八五年とされているが、それはOEDが用例としてあげている好古家ジョシュア・チャイルドリ(一六二三—七〇年)の一六六一年の文章「この sweating sickness が最初にあらわれたのは一四八五年だった」によるものである。しかし、その実態はきわめて曖昧であった。[現代の病名]ある種の黄熱ウィルス感染 arbovirus か、もしくは腸チフス?

二十一、腹部膨張 tympanites。ガスの充満による腹部の膨張を指していたらしいが、実態はさだかではない。OEDは用例の一つとして長老派の神学者リチャード・バクスター(一六一五—九一年)の「治った Tympanites をいくつ知っているか医師に聞いてみるがいい」(一六五一年)をあげている。[現代の病名]腹膜炎によるガスの充満?

二十二、鵞口瘡 canker。この病名もまことに近世的で、指ししめしているものはさだかではなく、口癌、癰の意味で使われる場合もある。OEDは翻訳家トマス・ペイニル(一五二

八―六八年ごろ活躍）の一五二八年の「canker とは、肉体の食事をとる部分の憂欝な膿瘍である」を用例の一つとしてあげている。［現代の病名］口腔潰瘍。

二十三、内箝頓（かんとん）、捻転 strangulation。この病名も、また、なにを指しているかはなはだ曖昧である。導管や腸などが、血行を圧止するほど括約する状態を意味していたらしい。OEDは医師で旅行家でもあったアンドルー・バード（一四九〇―一五四九年）が一五四二年に出版した通称『健康食餌』（注12）のなかの「暴飲暴食は strangulation と頓死の原因になる」を用例の一つとしてあげている。［現代の病名］箝頓ヘルニア？絞扼？

二十四、扁桃膿瘍 squinsey or quinsy。どうやら扁桃腺炎が悪化した状態を指していたらしい。OEDは医師ウィリアム・ターナー（一五一〇―六八年）が一五五一年にだした『本草新書』のなかの「ヘンルーダ（著者注。地中海沿岸原産の蜜柑科の常緑多年草）と油とともにくるみを Squynsie にあてることがよい」を用例の一つとしてあげている。［現代の病名］扁桃周囲膿瘍？咽頭炎？

二十五、子宮窒息 suffocation of the Mother。恐ろしい病名のようだが、この場合の Mother は子宮の意。この名称は子宮の異常を指す言葉らしいが、ヒステリー症の別名でもあるふしがあり、よくわからない。ちなみに、OEDは翻訳家で印刷業者だったロレンス・アンドルー（前出）の一五二七年の文章の一部、「その水を飲むことは、子宮 moder が心臓の方に動く女性たちにたいへん効き目がある」を用例の一つとしてあげている。［現代の病名］

ヒステリー症?子癇?。

二十六、こむらがえり、からすなべりcramp。この病気については、OEDは、エリザベス一世の特務軍医であったトマス・ゲイル（一五〇七―八六年）の一五六三年に書かれた「この軟膏をもって、crampのある四肢に塗布する」という文章の一節を用例の一つにあげている。［現代の病名］腎不全?（注13）。

二十七、癪、さしこみstitch。OEDが用例の一つとしてあげているのは外交官トマス・エリオット（前出）が一五三三年に書いた「わき腹のStytchesと苦痛」という文章の一節である。［現代の病名］胸痛?左心不全?心筋梗塞?心内膜炎?（注14）

二十八、泄痢、しぶり腹squirt。OEDは、アンドルー（前出）の一五二七年に書かれた「それはsquyrtに効く。ぼろきれをそれに浸し、臀部のうしろにあてがう」という文章の一節を用例の一つとしてあげている。［現代の病名］急性腸炎?胃腸管アレルギー?胃癌?（注15）

二十九、痞（つかえぼら）mulligrubs。これもじつによくわからない病名であるが、OEDは用例の一つとしてトマス・ナッシュ（一五六七―一六〇一年）の『四旬節料理』（一五九九年）のなかの「そのヨーマンはこの二度目に口に入れたものもうまくないことを繰り返ししゃべったので、それを聞いたピーターの跡継ぎは、とてもmulliegrumsを感じたあまり、彼を虐待してしまったとおもった」という文章をあげている。［現代の病名］急性腸炎?胃腸管アレ

ルギー？（注16）

三十、沈痾、疔、癤scrub。OEDは一七〇九年に出版されたオウズワルド・ダイクス（生年没年不詳）の『道徳的見解つきイギリス諺集』のなかの「われわれイギリス人は、scrubとおなじくらい瘰癧におかされている」という一節を用例の一つとしてあげている。［現代の病名］毛嚢炎？単純性疱疹？帯状疱疹？水虫？（注17）

三十一、萎黄病green sickness。この病気についてはL・M・バイアはつぎのように述べている。「彼ら（十七世紀の患者）は自分たちがかかっているものはたしかに知っていた。例えば、現代人がでしゃばってgreen sicknessをchlorosisだと診断しても、それは彼らの理解とその疾病の治療とはなんら関係のないこと――彼らの行動についての現代人の理解ともなんら関係のないことなのである」（注18）［現代の病名］神経症？不安神経症？強迫神経症？

以上がわたしがいうpetitio principii博物館の陳列品であるが、これらの陳列品は、考古学のような発掘をおこなってみても、歴史的な事実を提供してくれるものではない。わたしたちはいわば混沌に逢着するだけなのである。いま、わたしの眼前に一八四八年に活字になったウィラビ夫人の日記（注19）がある。彼女はフランシス・ウィラビ（一六一三？――六六年）と一六二八年ごろ結婚した女性である。その日記の一六五二年七月十日（土曜日）のところに彼女は

つぎのように書いている。愛する夫が帰宅したと勘違いをし、彼女ががっかりしたところである。「ふり返ると、すぐ近くにあるとおもわれた喜びにすぐつづく失望のショックがわたしを圧倒し、手足はふるえ、ほとんど自分の部屋まで歩いていけなかった。そして、その夜、熱がでて、その悪寒があまりにひどいので、瘧 Ague ではないかととても心配になった」。（リスト十九参照）

ここでは、ウィラビ夫人は悪寒を感じて、それを瘧ではないかと心配している。これが近世人の病気の認識の仕方なのである。病気に対する夫人の意識は、いってしまえば、まだ近世型なのである。その近世型の理解に対して、現代人が現代において、マラリアかもしれないと診断してもなんの意味もないであろう。バイアが述べたとおり、病気に対する近世人の意識と、豊富な科学的、医学的知識のなかに生きている現代人の意識とのあいだには大きな懸隔がある。わたしのこの petitio principii 博物館への入館の条件にも、その懸隔認識が入っていて、その認識のプリズムを通してはじめて陳列されているものの実像が浮かびあがってくるのである。

注

1　L. M. Beier, op. cit., p. 121.
2　ibid., p. 124.
3　ibid., pp. 99-103.

4 ibid., pp. 65-96.

5 ibid., p. 58.

6 Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (Penguin, 1978), p. 227.

7 Lawrence Stone, op. cit., p. 62.

8 詳しくはS. Campbell, B. Hall, D. Klausner (eds.), *Health, Disease and Healing in Medieval Culture* (Macmillan, 1992), pp. 152-57.

9 詳しくはClaude Quétel, *History of Syphilis* (Polity Press, 1990), pp. 53-8.

10 Roy Porter, op. cit., p. 137.

11 L. M. Beier, op. cit., p. 309. また、ウィリアム・ダンピア（一六五一―一七一五年）、『最新世界周航記』、平野敬一訳、岩波書店、二九五頁など参照。

12 正式のタイトルは*Hereafter foloweth a compendyous regyment or dyetary of helth, made in Mountpylier, compyled by Andrew Boorde of Physycke doctour, dedycated to the amypotent Prynce and valyaunt Lorde Thomas Duke Northfolche.*

13 cf. Roger Cooter, *Studies in the History of Alternative Medicine* (Macmillan, 1988), p. 15.

14 cf. Campbell, Hall, Klausner, op. cit., p. 18.

15 cf. Roger Cooter, op. cit., p. 15.

16 cf. ibid & Donald B. McKerrow, *The Works of Thomas Nashe*, vol. IV (Basil Blackwell, 1966), p. 408.

17 cf. Roger Cooter, op. cit., p. 15.

18 L. M. Beier, op. cit., p. 133.

19 cf. *Some further Portions of the Diary of Lady Willoughby* (Longman, 1848), p. 39.

第七章　やぶ医者への非難

医師たち自身でさえ、医術を体系的に把握できずにいた近世において、正規の教育を受けることなく、その医術を一つの生活手段としていとなんでいたやぶ医者たちへの風あたりが強かったのはむしろ当然であった。しかし、この問題は複眼的にみる必要があるのではないだろうか。資格のない者、正規の教育を受けていない者が専門的分野でなりわいをいとなむことは、現代においては論外であるばかりか、場合によっては違法行為になるであろう。ところが、近世においては、第一章でも述べたように、その専門性が確立されていなかった。しかも、正規の教育も資格もないまま、ある分野でなりわいを成立させていた者たちはかならずしも自発的に、もしくは楽観的にそのなりわいをおこなっていたわけではなかった。

晴れた日も雨の日も、たゆまず耕作にはげんでいた農民がある日、突然、でていけといわれたらどうするであろうか。土地の囲い込みで離郷を余儀なくされて漂泊民にならざるをえなかった農民は、その他律的な漂泊生活のなかで、まず生きることをかんがえたにちがいない。その赤貧の生活の末路は、漂泊民となったひとびとの能力や偶然のチャンスによって多岐に分化した。その一つにやぶ医者稼業もあったのである。やぶ医者への非難といっても、現代的発想になじみにくいこうした歴史的背景をまず考慮にいれておく必要があるであろう。要するに、

わたしたちは、ここでも現代的発想のすべてを放棄しなければならないのである。

この章では、歴史に残されているやぶ医者への非難の多くの実例をとりあげることになろうが、その実例の種類は、重層的に輻輳しているので、実例の考察に入るまえに、まずその点をかんがえなければならない。

まず、非難者層の問題からかんがえてみよう。時代はテューダー朝のまえのヨーク朝になるが、一四二三年にはすでに医師の同業組合が医術の世界から、「やぶ医者たち quack, empiriks や悪辣な」者たちを追放することを公言している。王立ロンドン医科大学が創立される九十五年まえである。正式の医科大学が創設されるほぼ一世紀まえから、医師たちは自分たちの科学的能力や社会的要因を考慮することなく、やぶ医者を排斥していたわけで、非難者層という意味では、まず医師たちをあげなければならないだろう。そして、医師たちのやぶ医者への攻撃は、一五一八年に王立ロンドン医科大学という正式のアカデミアを獲得し、一六一八年には『ロンドン薬局方』という金科玉条をえるなかで、ますます激しさを加えていくのである。

ところで、やぶ医者を攻撃したのは医師たちだけだったのだろうか。やぶ医者と呼ばれていたひとびとは、形態には多少の差異があったとはいえ、生きるために医術あるいは医薬品を行商していた商人である。商業的活動をおこなえば、そこには、当然、商業上の競争が生じることになる。競争とは、商売仇を攻撃し、放逐しようとする動きである。つまり、近世のやぶ医者の世界に一種の同士討ちがみられるようになる。やぶ医者がやぶ医者を非難、攻撃するよう

になるのである。

二人のやぶ医者が、フランス王（著者注。ルイ十四世）のまえで、どちらがよりすぐれた医者であるか論争になった。雌雄を決すべく、二人は命を賭して、やってみることになった。どちらが先にはじめるかを決めるためにクジを引き、クジを引いたのち、片方が他方に毒をあたえ、それを飲めといった。いわれた方は毒の入ったコップを受けとり、それを飲んだ。そのあと、彼は自分の解毒剤を飲み、体を少しこすると息をふきかえした。その後、彼は完全に復調し、こんどは相手にある散薬を渡し、それを鼻の孔から吸いこめといった。相手はいわれたとおりにして、死亡した。解毒剤はなんの役にもたたなかった。王は、残ったやぶ医者に、いま彼に渡したものはなんだと尋ねた。もっとも有害な潰瘍から抽出した毒でございますと彼は答えた（注1）。

これは、サー・トマス・アイシャム（一六五七―八一年）が残した一六七〇年代の日記の一節であるが、近世のやぶ医者の同士討ちは、このように決闘にまでいたるほどの熾烈さをもっていたのである。この日記が書かれた時代のフランスでは、すでに民間医薬品に対する法的規制がはじまっていたので、ここに登場する二人のやぶ医者がイギリス人であることは明白である。こういうわけで、やぶ医者への非難者層という意味でつぎにあげなければならないのは、

やぶ医者たち自身である。

第八章でもふれることになるとおもうが、やぶ医者への非難が重層的に輻輳しているのは、テューダー朝からスチュアート朝にかけてのやぶ医者たちの言葉による活動のなかに、パロール（口上など、口頭によるもの）からエクリチュール（自分で書いたビラや活字の広告など）へ移行してゆく大きな変化がみられるからである。識字率も決して高くなかったやぶ医者たちは、字の読み書きができなくても、まず口上などをしゃべる、しかも呪文のように早口にしゃべることからなりわいをはじめた。その口頭による商売上の活動は、のちに詳しくふれるが、やがて文字、活字を武器とする活動へと変容をとげることになる。パロールからエクリチュールへのこの変化は、近世におけるやぶ医者の生活誌をかんがえる際、忘れてはならない要因なのである。

近世のやぶ医者への非難にこのような重層性があることを念頭にいれて、つぎに実例をみていくことにしよう。パロールといっても、近世にテープレコーダーがあったわけではない。そこで、パロールにもっとも近い形のものを読む以外に方法はない。したがって、ここでは、まず、当時の世相をえがいたネッド（エドワード）・ウォード（一六六七―一七三一年）の『ロンドン精査』（一六八九―一七〇〇年）のなかの「やぶ医者気質」という詩のつぎのような一部を読んでみよう。

わざ、学問、分別への恥
徳の敵、無礼の友、
天稟も天の恩寵もなく、
人類の醜聞のまと。
どこかの得体のしれない名なしの権兵衛から生まれた
その辺の男の私生児。
どんな女も生めやしない
これほど卑劣で、これほどの人非人は（注2）。

また、時代はスチュアート朝から少しあとになるが、一七四四年に匿名で出版された『花綱。寸鉄詩選』のなかの「やぶ医者の薬に対する流行の嗜好について」という詩のなかにはつぎのような一節がある。

お願いだから、君たち自身のために、
ご注意を、友よ、やぶ医者にはご注意を！
かんがえてみるがいい、彼らがどんなひどい手でわれわれをおちょくるか、
彼らは自慢しているではないか、特性の巨丸薬とか

名高い不老不死の霊薬が
熱病、浮腫、結石、痛風でも根こそぎにできると。
こちらにはちゃんとわかっているんだ、この自慢のインチキ妙薬が
田舎の香具師からもらった薬のように
いくさ、人殺し、頓死よりも
もっと人の息の根を止めるものだと（注3）。

世相の風潮を反映しているごく一般的なウォードの詩に対して、後者にはかなり具体性がある。テューダー朝からスチュアート朝にかけての時代の医術、とくにやぶ医者がなりわいとしていた医術には、いわば万能薬神話のようなものが通底していたが、この不老不死の霊薬 Elixir への言及もそのあらわれの一つである。

それにしても、「人非人」にしろ、「インチキ妙薬」にしろ、攻撃の舌鋒はきわめて鋭い。非難にこのような激しさをあたえた背景には事情が二つあったといえよう。まず、一つは、近世における疾病発生の頻度である。テューダー朝とスチュアート朝だけに限定しても、腺ペストは、一五九二年、一六〇三年、一六二六年、そして一六六五年に猛威をふるったし、一六五〇年には全国規模で発疹チフスが蔓延した。規模の大きなこれらの伝染病のほかにも多くの疾病が近世のイギリスをおそっている。地域をロンドンに限定しても、つぎの表（注4）をみてもわ

1563〜1665年のロンドンにおける主要な伝染病

ロンドンならびに特別行政区	総埋葬者数	腺ペスト埋葬者数	相対死亡率指数	推定総人口	死亡者数の%
1563年	20,372	17,404	7.70	85,000	24.0
1578年	7,830	3,568	2.29	101,000	7.8
1593年	17,893	10,675	4.25	125,000	14.3
1603年	31,861	25,045	6.74	141,000	22.6
1625年	41,312	26,350	6.18	206,000	20.1
ロンドン、特別行政区ならびに都市外小教区					
1636年	23,359	10,400	2.25	313,000	7.5
1665年	80,696	55,797	5.41	459,000	17.6

かるとおり、腺ペストの跳梁が激しかったことを最近の研究は確認している。

病気が非常に多くみられた状況のなかでは、やぶ医者の活動も活発であったにちがいない。やぶ医者たちの活発な活動によって、しぜんに彼らの存在が目につきやすくなり、非難の的になる頻度も増加した。また、跳梁する疾病に治療者の数が追いつけない状態もみられるようになった。最近の研究（注5）は、そのような状態について、つぎのように分析している。

占星術的医者より低い立場にいたのが、民間の物知り、男女の魔術師、善魔女、そして魔術師たちであった。魔術師たちは、治療のほかに、失せ物、遺失物をみつけたり、どろぼうや魔女の正体をつきとめたり、媚薬をつくったり、未来を予言したりした。こうした術を使うひとびとは、ただちに診断できる肉体的疾病から、呪術によってひき起こされた疾患にいたるまで、動物と人間両方のすべての病気を処理した。彼らの治療代はかなりまちまちであったが、ほかのタイプの

治療師の費用とくらべてまさるとも劣らないものであった。なかには、完治した場合のみ、治療代をとる者もいた。そのほかの者は、金銭は受けとらず、食料品を治療費として受けとった。

この種の治療師たちは、治療法をつくりだすために、伝統的な医術的知識、伝承魔術、祈禱などをあわせて使った。彼らは呪文を用い、その呪文を朗誦したり、あるいはそれを紙に書いて、患者の首にかけたりした。彼らは、腕尺占いや、病気を病人から自分たちに乗り移らせるといったほかの魔術的わざを使った。また、彼らは、empiricsや免許をもった開業医が利用していた薬草調整品も使った。

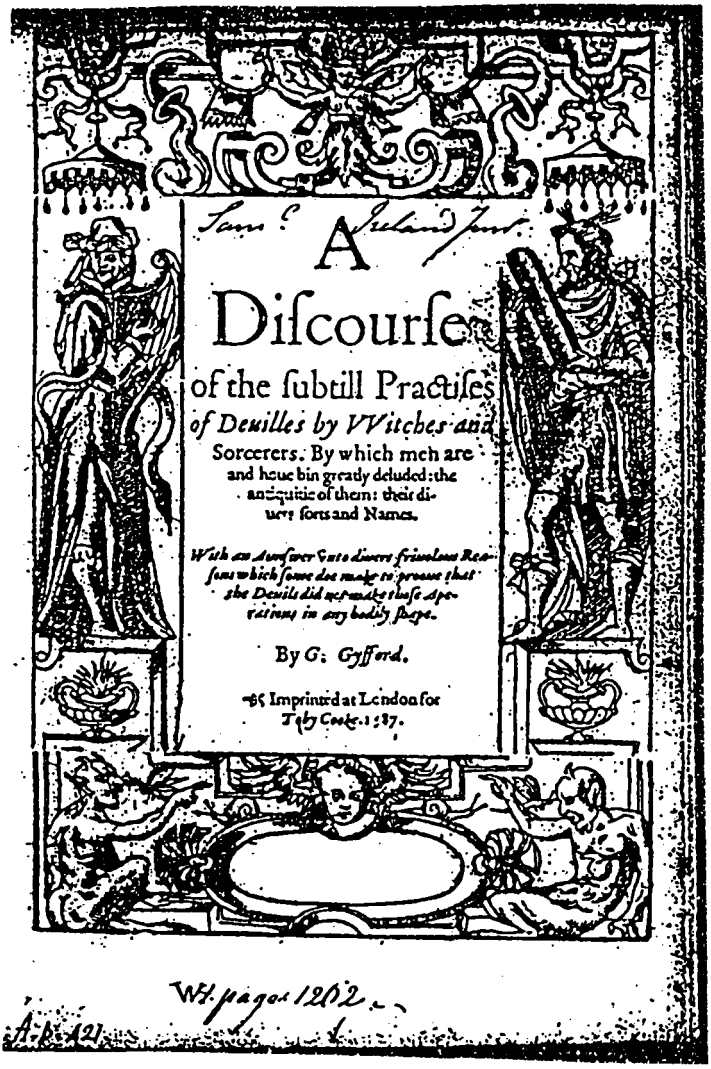
やぶ医者たちへの攻撃が激しくなったもう一つの理由としては、医師たちからの非難が増加した点をあげることができるだろう。一四二三年にはじまる医師たちのやぶ医者排斥は、時代がテューダー朝、スチュアート朝になるにつれてますます熾烈になっていった。そこで、つぎに、そのような熾烈な排斥的姿勢を証明するような近世の医師たちや聖職者の四つの文章の断片を読んでみよう。

最初は、エリザベス一世の特務軍医をつとめたトマス・ゲイル（前章参照）の一五六四年にでた『外科術 Chirurgerie 論』の序文である。

読者諸氏は、これら烏合の無教養なEmpirics(そして、ほかの方法で生活できないとなると、相手をけたおしてでも外科術に踏みこんでくる大地の屑)が、外科医などではなく、国民の殺害者、殺人者、略奪者であるとただちに判断されるであろう。彼らの一部は、靴下屋、洋服仕立て屋、矢羽師、吟遊楽人、靴屋、獣医、奇術師、魔女、妖術師、女衒、ならびにそのたぐいの烏合の衆である。こうしたやからは、かくも神聖なる術から、法によって追放されている。この術の実践においては、知識が欠如していれば、場合によっては、いくらかの国民、生命、また生命全体の喪失をもたらすのである(注6)。

このゲイルの序文は、「かくも神聖なる術から、法によって追放されている」やぶ医者への激しい非難になっているが、その「法」が一五一二年に議会を通過した「医師ならびに外科医の任命に関する法」であることは明瞭である。勅令によって医師たちにあたえられた特権は、医術のほかの分野(例えば、薬剤師の店を純度低下のかどで検査すること)を管理する権利も、王立ロンドン医科大学にあたえていた(注7)。

エリザベス一世、ジェイムズ一世ならびにチャールズ一世治下では、この大学はもぐりの治療師を勢力的に探しだし、告発していた(注8)。



A
Discourse
of the subtill Practises
of Deuilles by VVitches and
Sorcerers. By which men are
and haue bin greatly deluded: the
antiquitie of them: their di-
uers sorts and Names.

With an Answer vnto diuers friuolous Rea-
sons which some doe make to proue that
the Deuils did not make those apa-
ritions in any bodily shape.

By G: Gyfford.

Imprinted at London for
Tho: Cooke. 1587.

Wt. pages 1202
A-P-A21

ジョージ・ギフォード、「魔女ならびに妖術師による
巧妙なる悪魔の陰謀に関する論説」（1587年）の表紙

こうした法と特権の庇護のもとでのゲイルの非難は、また、さきに指摘した疾病と治療者の量的アンバランスという事実をしめす結果にもなっている。

つぎは、前頁に表紙をあげた『魔女ならびに妖術師による巧妙なる悪魔の陰謀に関する論説』を一五八七年に出版した聖職者ジョージ・ギフォード（?――一六〇〇年）の文章の一節である（注9）。

ある人間が病気になり、その病いがいつまでも長びく。なかには、あなたには呪いがかけられているから、物知りばあさんのところに使いにやったほうがいいと吹きこむ者もいる。物知りばあさんは、たしかにあなたには予言がくだされているといい、なにを使用すべきか指示する。呪文や妖術が利用されるにちがいない。当人は、楽になり、喜び、こうしたことはごく普通のことで、また経験で十分立証済みのことで、苦しんでいる多くの人がこうした女性の魔術師のもとに送られて、苦しみから救われてきたとかんがえる……ところが、彼らは、主はわが健康なり、わが救いなりとはいえず、彼らに医術を施した人間は悪魔だという。

これは、〈整合空間〉のなかで医師との共感を感じている者の誹謗にほかならない。確立してもいなかった専門性に対する意識というより、近世の宗教的思惟に基づく誹謗である。

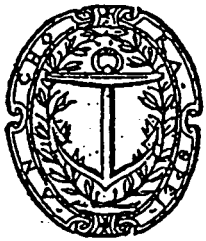
つぎのものはふたたび医師からのものである。

A
SHORT DISCO-
VERIE OF THE VN-
OBSERVED DANGERS OF
seuerall sorts of ignorant and vnconsiderate
Practisers of Physicke in England:

Profitable not onely for the deceiued mul-
titude, and easie for their meane capacities, but
raising reformed and more aduised thoughts
in the best vnderstandings:

With
Direction for the safest election of a Physition
in necessitie:

By IOHN COTTA *of Northampton*
Doctor in Physicke.



LONDON,
Imprinted for WILLIAM IONES, and RICHARD
BOYLE dwelling in the Blacke-
Friers. 1612.

ジョン・コタ、「イングランドにおける数種の無学軽率なる医術家のいまだ観察されざる危険についての管見」(1612年)

これは、前頁の図版にあるように、医師ジョン・コタ（一五七五?―一六五〇年?）が一六一二年に出版した『イングランドにおける数種の無学軽率なる医術家のいまだ観察されざる危険についての管見』の一節である。

われわれは、その特性によって、愛情の真正なる主権者である女性の魅力は認めざるをえないし、またその魅力は礼節をもって賞賛せざるをえない。しかるに、学問における女性の権能は真正なものになりえないところから察するに、神も自然も、女性を、学問ある理性と悟性の判定者の最高権威者にはしなかったのである（注10）。

このコタの誹謗にも、疾病と治療者の量的不均衡、そしてその不均衡の状況のなかから登場した、あるいは登場しようとしていた女性のやぶ医者に対する警戒が認められるであろう。つぎのものも、そのジョン・コタが一六二四年に出版した『自信過剰の完全無欠の真の魔女』からの一節である。

ある者たちが占星術の仮面のもとに魔術ならびに妖術を実践していることは分明であり、しかも、ほかの多くの者たちが、病気の治療もしくは徴候に対する医術的助言あるいは相談という口実のもとに、おなじ極悪非道の実践をおなじようにおこなっていることも明々白々

である（注11）。

やぶ医者に対するこれらの非難は、彼らに対する排斥の歴史の証左になっているばかりではない。これらの非難文は、疾病と治療者の量的アンバランス、近世医術と占星術や妖術との結びつき、学問や永続的職業への門を閉ざされていた女性たちの医術への進出など、近世医術のさまざまな様相を読みとることもできる第一級の資料にもなっているのである。

最近のある研究は、一五五五年から一五六四年のあいだにケントのメイドストンを漂泊していたやぶ医者たちについて貴重な記録を残した外科医ジョン・ハリ（一五七五―一六三五年）の『当代における外科術ならびに医術の嫌悪すべき悪用者に対する歴史的忠言』を引用しつつ、つぎのように述べている。

行商医 itinerant physician の妻が薬を買うために町にきたが、いくつかの薬の名前を忘れてしまった。薬剤師の妻が、なぜお医者さんが注文を書かなかったのかと尋ねると、行商医の妻は主人は「ラテン語しか使わない人で、英語が書けないんです」と答えた。この行商医は、ウィールド地方（著者注。ケント、サリ、東サシクス、ハンプシャなどを含む森林地帯）の客たちにギリシャ語とヘブライ語を話せるとおもいこませていたのである。ハリによると、真相は、この行商医は「文盲で、羽子板 battledore の b も知らなかったのである。べつの例

では、ハリは、目の病気を治療する専門家だと主張する靴屋に質問をしている。その靴屋は、人間の目の性質についてなにも知らないし、「靴がどのように作られるか、あるいは靴がなにでできているかさえ知らない」と認めながらも、なお痛い目を治すことができると主張した(注12)。

そして、これもまた漂泊のなかで行商をしていた近世のやぶ医者の実像であろう。しかし、母国語も書けず、靴がなにでできているかさえ知らないこのやぶ医者も、近世の医術的コンテクストのなかに置いてはじめてほんとうに理解できるはずである。

注

1 Roy Porter, op. cit., pp. 188-9.
2 Ned Ward, *The London Spy* (ed. by Paul Hyland, Colleagues Press, 1993), p. 106.
3 ibid., p. 55.
4 Paul Slack, *The Impact of Plague in Tudor and Stuart England* (Oxford UP, 1990), p. 151.
5 L. M. Beier, op. cit., p. 24.
6 ibid., p. 39.
7 Roy Porter, op. cit., p. 27.
8 ibid., p. 27.

9 L. M. Beier, op. cit., pp. 46-7.

10 ibid., p. 43.

11 ibid., p. 23.

12 A. L. Beier, *Masterless Men* (Methuen, 1985), pp. 100-1.

第八章　医師への非難

特権と法の庇護のもとにやぶ医者たちを誹謗していたとはいえ、誹謗していた医師たちの側にも科学的統一性がなかったことはすでに述べたとおりである。ミシェル・フーコーは「十七世紀と十八世紀には、医学上の思考と実務は、われわれが今日それらについて認識しているような統一性、すくなくとも首尾一貫性をもってはいない」(注1)と述べている。つぎの頁にあげたのは、頭蓋骨穿孔の外科手術の模様をしめす一六七八年の版画であるが、麻酔なしにおこなわれていたこの外科的手術には、野蛮さこそみられても、科学的統一性があるとはとえもおもえない。

手術は、だいたい、切断、頭蓋骨穿孔、結石切開摘出、接骨、そして膿瘍の切開に限られていた。患者たちがこの種の拷問を受けることに恐怖を抱いていたことはわかるし、そのような手術の死亡率も高かった。リチャード・ワイズマン(一六二二?―七六年)の権威のある『外科術論集』(一六七六年)は、一般には「ワイズマンの殉難者の本」の名で知られていた(注2)。

「頭蓋骨穿孔の外科手術」（1678年）

そして、やぶ医者たちのなりわいを非難する一方では、近世の医師たちの医術は、科学になるまえに、宗教に依存していた。

健康は、医者からではなく、神があたえるものであった。外科医たちは手術をおこなうまえに祈りを捧げねばならず、患者は、いかに教養があろうと、神を否定するような医者にかからぬよう留意しなければならないのである（注3）。

しかも、占星術や魔女を攻撃する蔭で、近世の医術はそれらのものを、みずからの欠陥を隠蔽する道具として利用してもいたのである。

なんらかの病気の治療のために医師のところへいくものはまずいないのであって［とトマス・エイディ（生年没年不詳）は書いている］、医師に彼らが聞く質問は、「先生、この人はひどい治療を受けているのでしょうか、それとも、うまく騙されているのでしょうか」という質問か、あるいはもっと単刀直入に「先生、この人は魔術にかけられているとおもいますか」という質問であり、これに対し、多くの無知な医師は「はい、おっしゃるとおりです」と答える。その理由は、ignorantiae pallium maleficium et incantario、つまり無知の医者の隠れ蓑になるからである。その病気の性質がわからない場合、医師は本人は魔術にかか

っているというのである」（注4）。

近世の医術が、麻酔なしに手術をおこなったり、完治しない病気を魔術のせいにするといった実態のなかにあったとはいっても、そうした未熟な医術に診断をあおぐことができるのは、経済的余裕のあるごく一部のひとびとだけであった。ここで、第一章でしめした近世の総合物価指数と実質賃金指数に関する表を想起してもらいたい。その表は、近世のイギリス社会がいかに経済的不振に苦しみ、疲弊していたかをしめしていたはずである。

その半恒常的な経済不況の縮図となったのがロンドンであった。

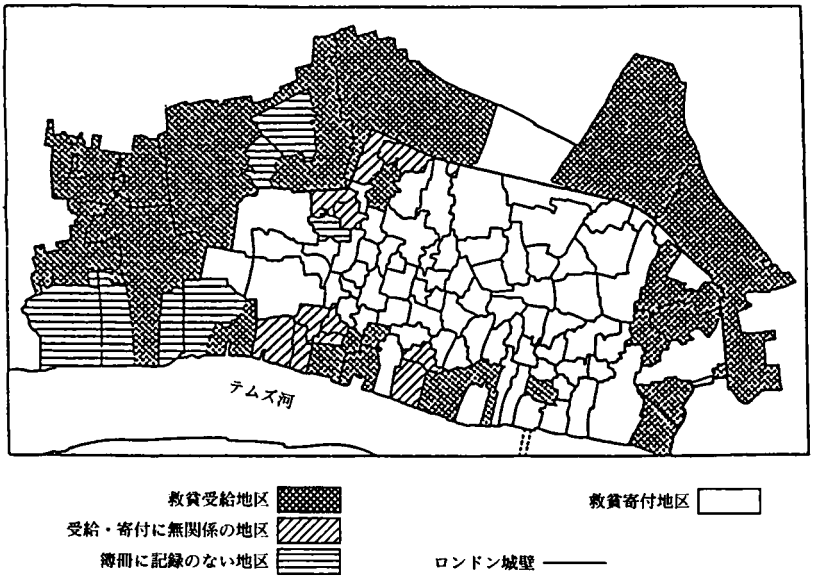
上の表（注5）は、不正確であった従来の数値を精査しなおしたものであるが、十六世紀のロンドンにおいてさえ、市民の人口のほぼ一割（この四年の平均）にあたる貧民が生活していた。そして、第一章で述べた救貧法がそのロンドンという地域にあたえた行政的影響はつぎの頁の表（注6）に図示されているとおりである。

十六世紀ロンドンにおける貧民の推定数

年	調査の際の貧民数	訂正後の貧民数	ロンドンの人口（サザクを除く）	比率
1518	772	3,088	50,800	6.1
1552	2,100	6,900	63,300	10.9
1596	4,010	16,040	127,000	12.6
1598	2,196	8,784	131,000	6.7

たとえロンドンというメガロポリスに住んでいたとしても、救貧金を受給しなければならなかったこうした都市細民が医師に診断をあおぐことができたであろうか。一五四四年にはすでにつぎのような意見が活字になっている（注7）。

1598年のロンドンの102の教区の救貧負担の分布図



彼ら（医師たち）はいつまで民衆を無知のままにしておくのか？なぜ、彼らは医術が英語で語られるのをいやがるのか？彼らは自分たち以外の人間に教えたくないのか？それとも、彼らを、われわれが金を払って彼らたちだけから健康を、しかも彼らの言い値で買わなければならない生死の商人にしたのはなにか？

これは一五四四年に公表された見解であるから、ニコラス・カルペパーが『助産婦（夫）への助言』においておなじような義憤を公言する百七年まえのことである。医師たちの閉鎖性、そして彼らの高い治療費に対する非難は、十七世紀に入るとますます熾烈になってくる。「この世の詐欺師。この世に、もし医術のドクターが存在しなければ、ひとびとはもっと長生きするであろうし、もっと健康に生きるであろう」というロドウィック・マグルトン（一六〇九―九八年）の意見（注8）も決して極端ではない。

一五四四年にはじまるこの種の医師誹謗の系列にはいるものとしては、自身が医師であったギディアン・ハーヴィ（一六四〇？―一七〇〇年？）のつぎのような意見もある。これは一六八三年に発表された『医師の秘密会議、患者に対する彼らの術策、詐欺、奸計を見破る』の一節である。やぶ医者の活動のなかに同士討ちがあったのとちょうどおなじように、これは医師の同士討ちである。

……患者はみずからにあれこれ誤った重罪の判決をくだされている。そして、患者の罪、つまり病気が重大の場合、死刑判決を受け、腕に絞首索をしばりつけられ、そのあと、完全に死ぬまで多量の血液を抜きとるため、槍状刀でそこを突き刺されるのがもっとも一般的である。ほかの処刑方法は、浣腸器となんら変わらない箱型もしくは象牙の機器で患者を刺し貫くというものである。そして、この方法はその機器が口からでるまで何度でもおこなわれる。あるいは、うまくいかない場合、それに類似した水薬を口から流しこむことが指示され、数日のうちに患者の生命の炎を窒息させるのに大いに役立つことになる（注9）。

これは医師であったハーヴィ自身が「生死の商人」であることを確認したようなものであろう。また、『名士小伝』を書いたジョン・オーブリ（一六二六―九七年）はつぎのように述べている。

世間が医師たちと薬剤師たちの（無知に加えて）悪行と偽瞞を知ったら、ひとびとは町を歩く彼らに石を投げつけるだろうと、教養ある敬虔な医学博士ドクター・リジリがいうのを耳にしたことがある（注10）。

近世では、開業医という職業は、たとえ正規の大学教育を受け、資格をもっていても、一般に認められた一つの職業ではなかった。このドクター・リジリの意見は、そのような医術的状況をわたしたちにヴィヴィッドに伝えるものである。

スチュアート朝末期になっても、医師に対するこうした誹謗的風土は変わらなかった。つぎにあげるのは、一七一〇年十二月八日付けの『トーリ・タトラー』誌に載ったある記事である。

みんなおなじさ、とわたしは答えた。どれを選んでいいかわからない。あわれな「健康」嬢は元気でいなければならない。不倶戴天の敵としてこんなにも多くの医師、やぶ医者、外科医、薬剤師がおり、そして丸薬や薬の宝庫全体が彼女の破滅をもくろんで待ち伏せしているのだから。どんな病気で死んだのか、熱病だったのか、それとも胸膜炎だったのか、とよく聞かれるが、正しくいえば、その質問は、どんな病気で、ではなく、どんなドクターにかかって死んだのか、とならなければならない。病気が人をとらえるが、医師が人間たちを処刑してしまうのだ。……わたしにいわせれば、薬剤師のすり鉢が音をたてているのを一度も聞いたことがない。弔いの鐘がなっているようなものだ。ドクターの処方箋など一度たりとも読んだことがない。そんなものはあの世行きの通行手形だ……（注11）。

医師たちに対するこうした痛烈な誹謗の背景に未熟な科学的進歩、未然の医術があったこと

は事実であろう。しかし、未熟なままの医術事情のなかで、特権に庇護されて高い診察料をとり、蓄財にはげんでいた医師たちもいた。つぎの歌はそのような医師たちへの風刺の歌である(注12)。

ロンドンの外科医諸君、さっそうと馬車に乗り、
土地を買うことで頭を悩ませている諸君、
みっともないから、あきらめたまえ、諸君の名誉は地に落ちたのだ、
エプソムの女医は諸君よりまさっているのだ。

ここで「エプソムの女医」といわれているのは、接骨医だったサリ・マップ(?——一七三七年)のことである。彼女については、

現在、無知にもかかわらず、偉そうな詐称者にはこと欠かないが、エプソムの接骨医である高名なマップ夫人はそのなかでは抜きんでている。「最高のサリ」と称して、彼女はあわれな姿で村々を漂泊し、その巡回の旅のなかで、その名にふさわしい職務を果たした。その旅の果てにエプソムにたどりついた彼女は、当地のかなりの田舎者たちをまんまとだました(注13)。

といった評判もあって、正体は謎に包まれているが、毀誉褒貶のなかにいたサリ・マップでさえ、ある意味では医師たちより高い評価を受けていた。

医師への非難の歴史をみてみると、やぶ医者への非難の歴史と同様、そこには重層的に輻輳した様相がある。容易に解明しがたいそうした様相をいくつかかんがえてみよう。まず、一般民衆でさえ手のとどかなかった医師の高い診察代が大きな問題である。王立ロンドン医科大学が創立される三十四年後の一五五二年には、すでに医術が経済的余裕のある者たちだけのものになっていると嘆く声があがっている（注14）。

近世のイギリスには疾病の種類と数が多く、疾病と治療者とのあいだにもともと量的アンバランスがあったことはすでに述べたところだが、そのような医術事情のなかに、医術が富裕階層に独占される傾向があった。医師の絶対数の不足（注15）という状況のなかで、この傾向は、一般民衆、貧民、そして都市細民たちを医術からますます隔絶することになる。そうした状況にさからうように、あの『ロンドン薬局方』を、英訳することによって、王立ロンドン医科大学の独占物になることを阻止したニコラス・カルペパーの場合は、自身が医師でもあったので、午前中だけで平均四〇人の患者を診察していた（注16）。

富裕階層やインテリ階層が財力によって近世の医術を独占していたのは事実だとしても、近世のその医術が、科学としていまだ独立しておらず、占星術などと分けがたく結びついていた

こともまた事実なのである。

イギリスの近世には、テューダー朝の末期に生まれ、スチュアート朝、およびそれ以降の時代に多大な影響をおよぼした一人の占星術の巨人がいた。ウィリアム・リリィ（一六〇二―八一年）である。彼が巨人の名にふさわしいのは、まず著作が多い点である。リリィは占星術的カリスマをもっていたとみえ、多くの患者（顧客）の相談を受けている。一六五四年六月から一六五六年九月までの期間に、リリィは四、四〇三人の相談者に会っていることが判明している。そして、そのうちの六八二人の職業あるいは身分については以下のような内訳であった(注17)。

ジェントリ階層、ならびにそれ以上の者……一二四人
専門職……三六〃
商業、職人、その他（五十九の職業）……一二八〃
船員……一〇四〃
兵士……三二〃
女性召使……二五四〃
貧民……四〃

しかも、リリィには二〇〇ポンドの年収があった(注18)といわれているのであるから、この占星術師に対するスチュアート朝のひとびとの傾倒はかなりのものであったにちがいない。

さて、このように占星術とも未分化の状態にあった医師たちへの非難の歴史をもう少し整理してみよう。いうまでもなかろうが、医師に対して非難が向けられた第一の原因は医師たち自身にあった。医師といえば、正規の大学教育を受け、資格をもっている者のことであるが、近世においては、いわば亞種の医師とでもいうべきひとびともいたのである。それは、「博愛主義という理由で、あるいは単なる趣味として、医術に〈従事〉したがり、しかも通常はまったく罰を受けることなく医術をほどこしていたジェントリ階層や専門職階層のひとびと」(注19)である。

やぶ医者といわれるひとびとの身分、出自、職種は一いちとりあげきれないほど多岐にわたっていたが、近世の医師の種類のなかにも、占星術や妖術と未分化の者や、こうしたまったくの素人もいたのである。近世の医術自体が一つの学として統一されるところまで進歩していなかったわけだが、そうした状況は、亞種の医師や素人の医者が医業をいとなむことを許していた。そして、医師のなかでもこうした周縁的領域にいたひとびとの治癒率が低かったことはいうまでもない。職業の専門性が確立されていなかった近世の世相は、こうした周縁的医術家をふくめて、医師を一つにまとめて、誹謗のまなざしでみていたといえよう。

つぎに、医師への非難の様相として、こういった非専門的医術家ばかりでなく、正規の医師たちの治癒能力の劣悪さを指摘しなければならない。しかし、これは、近世の医師たち自身の能力をこえたもっと大きな問題でもあった。もちろん、まえにもふれた医師アンドルー・バー

ドが、

医師たる者すべからく、まず学問を知り、しかるのちに実践を知らなければならない。すなわち、まず自分でラテン語で読むものを理解できる文法を身につけ、しかるのちに、真偽の論証によって論述し、定義する正しい論理を身につけ……さらに説得力ある雄弁力を身につけ……さらにまた投与すべき薬品あるいはその投与量を熟慮し、計算する計量学を体得しなければならない。計算法に関して算術を学ぶことが必要であるが、とりわけ、医師は、文法について、しっかりと自分の天文学をもたなければならない。すなわち、いかにして、いつ、どのような時にあらゆる薬品を投与するかを知らなければならないし、そして最後に、自然物に関する知識のなかにある自然哲学を体得しなければならない（注20）。

と、すでに一五五二年に『健康抄本』のなかで述べているように、医師を志す個々人の側の専門的努力は、当然、求められていたが、近世においては、医術の深遠さ、規模の大きさが個人の能力を越えていたのである。

この点はつぎのようにもっと大きな一つの図式のなかでかんがえるべきではないだろうか。まず、近世のイギリスには、科学という大きな次元があり、その次元には医師ばかりでなく、やぶ医者も包摂されていた。すなわち、それは医術をも含む大きな次元であった。ところが、

その次元たる科学自体が試行錯誤の途上にあって、体系的収斂をはばまれていたのであるから、そのなかにあった医術も未熟な状態を脱却することができなかった。オーブリが実際に聞いた医師の発言にしても、『トーリ・タトラー』誌の記事にしても、医師と薬剤師、医師とやぶ医者が同次元で論じられているのはそのためである。医術が本章の冒頭にしめした頭蓋骨穿孔手術の図にみられるような野蛮な状態にありながら、その医術にたずさわる近世の医師たちの自意識が、医術の深遠な本質の解明にむけられず、現世的な特権や蓄財にむけられたところに非難が生じた最大の原因があったのである。

注

1 『狂気の歴史』、田村　俶訳、新潮社、三二〇頁。
2 Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (Penguin, 1978), p. 10.
3 ibid., p. 98.
4 ibid., p. 640.
5 Steve Rappaport, *Worlds within Worlds* (Cambridge UP, 1989), p. 169.
6 ibid., p. 172.
7 cf. L. M. Beier, op. cit., p. 21.
8 Keith Thomas, op. cit., p. 17.
9 L. M. Beier, op. cit., p. 177.

10 Keith Thomas, op. cit., p. 17.

11 Roy Porter, op. cit., p. 9

12 cf. ibid., pp. 34-5.

13 ibid., pp. 56-7.

14 cf. Keith Thomas, op. cit., p. 13.

15 cf. ibid., p. 244.

16 cf. ibid., p. 364 footnote.

17 ibid., p. 379 footnote.

18 ibid., p. 381.

19 W. F. Bynum & Roy Porter (eds.), *Medical Fringe and Medical Orthodoxy 1750 - 1850* (Croom Helm, 1987), p. 107.

20 L. M. Beier, op. cit., p. 35.

第九章　やぶ医者の街頭宣伝

わたしは第四章で、一五五八年に掲げられたやぶ医者トマス・ラフキンの看板のことを書いた。看板を掲げるという行為は、まぎれもなく宣伝行為である。やぶ医者は、正規の医師とちがって、原則的には、患者の訪問を待っていることはできなかった。彼らには、医師のような定収入がないうえに、その日その日を生きていかなければならない事情があった。医師は正々堂々と自分が医師であることを世間に公表もし、公言もできたであろうが、やぶ医者には資格がなかったので、その活動には、当然、公表性があまりみられなかった。

しかし、他律的な原因で、漂泊生活のなかに放置されたやぶ医者たちは、なりわいとして民間医術を選択した以上、資格のないまま、自分と自分の家族を養うために、毎日なにがしかの収入をえる必要があった。〈整合空間〉から、身を隠し、非合法の活動をしていた犯罪的なひとびとについては第二章で述べたが、やぶ医者といわれるひとびとも、生きていくために非合法すれすれの生活を送っていた。近世イギリスのやぶ医者の生活誌には、もともと大きな矛盾があったともいえよう。すなわち、おおやけに公表する資格の欠如と、なんらかの形でみずからの存在を世間にアピールして生活していかなければならない生存上の必然性とのあいだの矛盾である。

そして、近世イギリスのやぶ医者の生活誌を通観すると、この矛盾は、生存上の必然性のほうが優勢になることで決着がついているようである。しかし、生きることが優先するといっても、やぶ医者たちは、医師のように、正々堂々と自分のなりわいの宣伝をすることはできなかったであろう。トマス・ラフキンの看板にしても、それはおそらくラフキン自身が手書きしたものであったにちがいない。このことは、近世のやぶ医者たちの活動における重要な様相を示唆する点なのである。わたしは第六章で、テューダー朝とスチュアート朝のやぶ医者たちの言葉による活動のなかに、パロール（口上など、口頭によるもの）からエクリチュール（自分が書いたビラや活字の広告など）へ移行してゆく大きな変化があることを指摘した。

この章ではやぶ医者たちの街頭宣伝、あるいは宣伝合戦を考察するつもりだが、こうした宣伝活動のなかにこそ、パロールからエクリチュールへの移行がみられるのである。ラフキンの看板は、手書きだったとすると、この移行のいわば中間の段階に位置していたといえるのではないだろうか。すなわち、トマス・ラフキンのこの看板は、自分の活動をおおっぴらには公表できない。かといって、公表して需要を煽らなければ自分が生きていけない。こうしたやぶ医者ならではの逡巡の証拠になっているのではないだろうか。

これもまえに指摘した点であるが、パロールといっても、近世のやぶ医者たちの呪文のような早口の口上がテープレコーダーに録音されているわけではない。この章では、パロールからエクリチュールへの移行、変化を跡づけるために、まず彼らのパロール的活動をとりあげるが、

そのパロール的活動のいわば原典は、したがって、存在していない。そこで、ここでは、やぶ医者の語り口を伝えているとおもわれる当時の文献からみていくことになるが、そのまえに、形がパロールであれエクリチュールであれ、公表に逡巡があったにもかかわらず、なぜやぶ医者の活動に宣伝がみられるようになったかをかんがえてみたい。

メアリ・ワートリ・モンタギュ夫人（一六八九―一七六二年）は、当時の医療事情についてつぎのように述べている。

> イギリス人は、ほかのどの国民よりも、万能薬に対する期待にすぐのぼせあがってしまうし、医者がこんな莫大な財をなすことのできる国も世界中どこにもない。わたしは、それはすべての人間のなかに蓄えられた「信じやすさ」のせいだとおもう。もはや、われわれは奇跡も聖骨も信じてはおらず、それゆえおなじ熱狂をもって「秘薬」と「医師」を追い求める。三百年まえに魂の健康のために使ったおなじ額の金銭が、おなじ種類のひとびと、つまり女性や愚かな男性たちによって、肉体の健康のために費やされている。聖地や聖像のある国々においては、Quacksは軽蔑され、修道士や証聖者たちは、民衆の行動を支配する恐怖と希望をとりしきって満足している（注1）。

この発言のなかでは、「Quacksは軽蔑され」ているとあるが、ここで指摘されている「信じや

すさ」こそが近世の医術をかんがえる際に重要なのである。近世のやぶ医者文化を生んだ背景には、疾病と治療者の量的アンバランス、正規の医師たちの高い診察料、他律的原因でやぶ医者になることを余儀なくされたひとびとの存在、といったさまざまな要因があったわけだが、とくにやぶ医者文化を助長した大きな要因として、近世のイギリスの患者の側のこの「信じやすさ」を指摘しないわけにはいかない。

プロテスタンティズムに代表される〈無時間的なもの〉が「魂の健康」を志向していたのに対し、自分の肉体を〈時間的なもの〉として意識しはじめていた近世人はその「肉体の健康」を重要視するようになる。そして、「肉体の健康」への意識をなりわいのトポスにしていたやぶ医者たちが、もっぱら利用したのが、患者の側のこの「信じやすさ」だったのである。

やぶ医者文化の一つの様相について最近の研究はつぎのように述べている。

やぶ医者たちは、反撃が最善の防御になることを知っていた。彼らは、書物による学問がないこと、そして古い言語に通暁していないことをしばしば非難された。しかし、やぶ医者ジョン・スピンク（一七〇〇年代に活躍）は反撃した、ほんとうはお門違いで、ラテン語の初心者は彼の第一の中傷者ジョン・マーティン（一七〇八年ごろ活躍）なのだ、と。スピンクは自分の書いた本に『やぶ医者の正体暴露』（一七〇九年）という表題をつけることを楽しんでいたにちがいない。彼は、結局、ほんとうのやぶ医者は彼のライバルの外科医で、その

偽善的長広舌は「一つの大きなやぶ医者のビラ」にすぎないと主張した（注2）。

ここで指摘されているのは、やぶ医者同士の広告上の競争と、やぶ医者と正規の医師（この場合は外科医）との区別の曖昧化という近世医術的現象ではあるが、こうした現象の背景にもつねに近世人の「信じやすさ」の心理を読みとらなければならないであろう。

さて、パロールに準ずる資料からみてみよう。つぎにあげるのは、やぶ医者の街頭での口上を実際に聞いたことがあるとおもわれる人の発言である。

非常に有名だったドイツ系トルコ人の皇帝のある侍医は、七人の公爵や選挙侯やローマ・カトリック、トルコ、そして日本の天皇たちの推薦状と同時に、三人の皇帝と九人の王の推薦状をみせびらかす。彼は、ほかのドクターがみせることのできない三十六の国の言語で書かれた推薦状をみせることができる。彼は、トルコ皇帝の弟を治療し、その弟は十三年間盲目であったが、生まれつきの視力をふたたび回復した。このドイツ系の医師は世界の三つの大陸をくまなく遍歴してきた（注3）。

ほとんど聞きとることのできない早口のやぶ医者の口上を文字にすれば、だいたいこのような文章になるであろう。ここで、第三章でしめした外科医ダニエル・ターナーがえがく風刺漫

画風の検尿師と、ロイ・ポーターのやぶ医者の再現図を想起してもらいたい。行ったこともない異国の皇帝、天皇、そして貴族の名をもちだし、しかも自分でも意味のよくわからない外国語（による推薦状）を誇示するのは、近世のやぶ医者の常套手段であった。それは、自分自身やぶ医者であったドクター・デイヴィッド・アイリッシュ（一七〇〇年ごろ活躍）が述べているように

「女の力をはるかに越えた術にちょっかいをだす」べきではない「女のドクターたち」もよくなかった。そして、さらに悪いのは、かんがえられるとすれば、「馬に水薬をやる」技術さえない、単なる「人間を食いものにする人間」でしかない「Mountebanks」であった。貧民たちは、「そのような奇怪なあさはかな行い、愚かな遊び、そして道化師のトリック」にだまされて金をまきあげられることに熱中していた（注4）

からである。

信じやすい近世の民衆に対するやぶ医者の常套手段をしめす資料には、例えば、「あらゆる寄生虫を駆除する日本散薬 Japan Powder」（注5）を売りものにしていたやぶ医者フレデリック・ファン・ニューレンブルグ（一六九八年ごろ活躍）がいたし、ジョウゼフ・アディスン（一六七二―一七一六年）の一七一〇年の『タトラー』誌上での「わたしはロシア皇帝に医術をほど

こした二十人のmountebanksをみたとおもう」といった証言がある。

また、やぶ医者たちの口上や口演を実際に聞いたにちがいない当時の世相の証言者ネッド・ウォードにふたたび登場してもらおう。やぶ医者たちの口上については、「とんでもないわけのわからない早口の言葉」というロチェスター侯ジョン・ウィルモット（一六四七―八〇年）の証言(注6)があるように、文字による再現はきわめてむずかしいにちがいないが、「ごたまぜ万能薬の小包」を売ろうとするやぶ医者の口上についてのウォードのつぎの描写（注7）は、内容の具体性という点からもきわめて興味深い。

さてお立ちあい、みなさん、健全な肉体に健全な精神を保とうと留意なさる心、すなわち、学問のほまれ高いドクター・Honorificicabilitudinitatibusque がいうところの Cobile Sanaquorum の聖なる手をおもちのみなさん、六ペンスのお値段で一袋そなえることができますよ。見かけはちっちゃな袋だが、中身は強力。人間の体に強力な効能を発揮し、驚異の効き目がありますよ。効くのは、簡単なものであれ、複雑なものであれ、万病だ。病気なら、両親遺伝のものであれ、うつされたものであれ、お客さん自身の体の悪い体質に原因があるものであれ、万病だよ、お立ちあい。

まず、ここにとりいだしましたのは、みた目には小さな丸薬。胡椒の種子ほどの大きさしかないが、この超小粒の薬の効能は非常に強力で、効き目はものすごく、お客さんの血の主

要部に二十の病気が潜んでいたら、ちょうど二十の駆除をやってくれるし、飲むたびに効いて、病気なんざ根絶さ。もしお客さんの血が健康で、体も健康なら、この丸薬はせいぜいおなじ量のショウガ入りクッキーの作用とおなじ。その不思議な性質から、名づけてPilula Tondobula。これはギリシャ語で、自然の試金石という意味だ。というのも、この丸薬を飲めば、お客さんは、自分の体質がどんな健康状態、またどんな疾患状態に置かれているかほんとうにわかるよ、お立ちあい。

実際の街頭のやぶ医者はもっと多くのことを早口で「よどみなく」（第三章参照）しゃべったにちがいない。しかし、ウォードのやぶ医者のこの口上を実際のものとしてかんがえても、現実からさほどかけ離れはしないであろう。

以上にみてきたパロールのいくつかの特徴は、やぶ医者たちの宣伝活動がエクリチュール的段階に入っても、程度こそますます誇張語法的になりはするが、ほとんどそのまま継承されてゆく。しかも、やぶ医者の広告はエクリチュールの段階に入ると、ますますその数を増加してゆく。あの『ロビンスン・クルーソウ』を書いたダニエル・ディフォウ（一六六〇―一七三一年）は『ペスト』*A Journal of the Plague Year*（一七二二年）のなかでつぎのように述べている。

家の門柱や町角などにはおびただしい医者の広告や、いかさま師の貼紙が貼ってあったが、これなどは見たことのない人にはいくら説明してもわかるまいと思う。それは、何だか得体のわからない医術の効能を嘘八百ならべたてたり、治療を受けにどしどしお出でくださいといった広告であった。だいたいは次のような美辞麗句が掲げられてあった。たとえば、「疫病予防薬、効能確実」、「伝染病予防薬、効目絶対保証」、「空気汚染に対する妙薬」、「病気にかかった時の健康維持法、絶対間違いなし」、「防毒丸」、「疫病予防酒、効目無比、新発見の妙薬なり」、「悪疫万能薬」、「正真正銘の防毒酒」、「特効解毒剤、いかなる伝染病にも卓効あり」。ざっとこういった類で、とても一つ一つ私はここに数えあげられないほどである。もしたんねんに数えあげていったら、ゆうに本が一冊できあがろう（注8）。

これは小説家の虚構の一節である。しかし、ディフォウが「週間死亡報告」などの過去の文献を渉猟してこの虚構を仕上げたことはまちがいないし、彼が五歳のとき、つまり一六六五年が翌一六六六年をふくめて「驚異の年」annus mirabilis であったことも忘れてはならない。一六六五年に最大規模の跋扈をみせた腺ペストで、ロンドン市民の三分の二は感染をおそれてロンドンをあとにするが、少なくとも六八、五九六人が死亡しているし、翌一六六六年は、その腺ペストの猛威があとをひいているなか、あのロンドンの大火が起こり、ロンドンは四日間猛火にさらされ、八十六の教会と一三、〇〇〇戸の家屋が焼失し、火事による死亡者は二、〇〇

○人にもおよんだのである。

小説家でありながら、事実というものにことのほか深い関心をもっていたディフォウがこうした事実を知らないはずがないし、また実際に幼い目でその歴史的事件をみてもいるのである。そして、この作品が発表された一七二二年ごろになると、エクリチュールとしての医師ややぶ医者の宣伝活動は最盛期に入っていた。『ペスト』出版の直前のスチュアート朝後期でさえ、町はエクリチュールとしてのやぶ医者たちの広告にあふれていた。

スチュアート朝後期のロンドンは、やぶ医者のビラに酔いしれていた。コーヒー・ハウスに入ればかならず広告の猛攻を受けたとネッド・ウォードは述べている。例えば「五月の朝露、最高の霊薬、万人丸、薬用吸入液、美顔水、ねり歯みがき、滴薬、咳どめドロップ、すべて教皇のように間違いなし。〈あの有名なサフォルドがいっているように、他者より抜きんでている人が、だれでも、当然、最高の名をもらえるところでは〉その人がなんにでも効能を発揮し、あらゆる疾病を治療し、どの薬もまさしく万能薬だとふれこんでいる。「まったく、友だちがそこがコーヒー・ハウスだと教えてくれなかったら、わたしはどこかの有名なmountebankの客間だとおもってしまっただろう」と冷やかし気味にウォードは述べている(注9)

そうしたビラの実態を伝えるものをつぎに読んでみよう。

わたしは高地ドイツのドクターで、大いなる努力と遍歴と、夜毎の研鑽をかさね、医術の神アイスクラーピウスの祝福を受けることによって、いかなる先達よりも多くの知識を体得しました。嘘いつわりなし。みなさんにわたしの「万能瀉下剤」を提供いたします。本薬は体液疾患と悪液質によるすべての腸の病気、水頭症や癲癇の発作、胆汁の流出、そのほかにこれまで名前をつけられていなかった多くの疾患をすべて治癒します。つぎは、完全無比のHeliogenesなるわたしの「フレンドリ丸」で、これはわたし自身が発見いたしました誘笑筋を膨張拡大することにより、知力の場をきれいにし、脾臓の肥大を治し、下腹部を純化し、括約筋をゆるめ、あらゆるクロロシス、すなわち萎黄病に対してもこのうえない良薬です。本薬の効能は七つあり、催眠術的に、水治療法的に、通利的に、Proppysinatically（著者注。意味不明）に、利尿的に、Pulmatically（著者注。意味不明）に、そして七つ目は、全生命組織を補強することによって、感染呪術的に効能を発揮します（注10）。

ここには、エクリチュールとしてのやぶ医者の宣伝に典型的にみられるいくつかの特徴がある。例えば、それは異国趣味であり、不完全な古典的知識の披瀝であり、不十分なラテン語の使用であり、わけのわからない新造語の使用であり、誇張語法の濫用などである。極端な誇張

語法が多く使われているなかにも、例えば、医師ジョン・アーチャー（一六六〇—八四年ごろ活躍）のつぎのような素朴で、率直なエクリチュールもあった。

特許万能薬
サフラン・チンキ
癒瘡木万能薬
強壮水
タバコ
くしゃみ散薬
丸薬ならびに滴薬
強壮治療飲料
梅毒薬
強壮錠
収斂エイル錠
強壮丸
瀉下巨丸剤（注11）

やや素朴だとおもわれるこの医師の広告も、万能薬神話にだけは冒されていることがわかる。それでは、このような共通したいくつかの特徴をもつやぶ医者や医師のエクリチュールとは、いったい、どのような形状をしていたのであろうか。近世の医療事情をいろどったビラやチラシは、だいたい、縦二十五センチ、横二十センチくらいの紙面に印刷されていることが多かった。あまり広いとはいえないその紙面に、二、〇〇〇字ほどの活字が詰めこまれていた。そして、なかには、その紙面の裾の方に、別種の小さなスペイスをつくり、そのスペイスだけに共通する少し小さな活字をさらにぎっしり詰めこんでいるものもあった。

近世のやぶ医者たちが、新造語やラテン語の誤用や誇張語法にあふれた縦二十五センチ横二十センチのこのようなエクリチュールにどのくらいの費用をつぎこんでいたのかは、いまとなってははっきりしない。しかし、時代はスチュアート朝のあとになり、一八一九年に死亡しているあるやぶ医者の場合、年間の宣伝費は五、〇〇〇ポンドに達し、一〇〇ポンドを宣伝につぎこめば、二、〇〇〇ポンドの利益があがると主張していた（注12）。

さて、パロールからエクリチュールへと変化してゆき、活動に宣伝的要因がみられるようになるやぶ医者の生活誌のなかで、もっとも重要なことは、いったい、なにか。

やぶ医者稼業は一方的な言語方式である。医師の対話とはちがって、やぶ医者の早口の口上は、独白、独語により似ている――それは、確信を注入し、説得をおこない、抵抗をやわ

らげ――あえていえば――病気を論破するものなのであり、やぶ医者たちは、「台本」のなかの形式的せりふもない非個人的聴衆(あるいは読者)、一群の他人たちを想定する。やぶ医者稼業は、「魅了する」ものでないにしても、受容されやすいものでなければならない(本復を願わない病人がいたであろうか?)。やぶ医者の顧客たちは、扇動家の傾聴者、説教師の会衆、あるいは、過去の芝居の常連がしばしば口答えをした点を忘れなければ、芝居好きに譬えることができるだろう。

やぶ医者たちがしゃべる言葉は、より大きな一つの儀式の一部として効果的に演出されたものであった。イタリアのciarlataniを手本にしたルネサンス時代のヨーロッパの伝統的やぶ医者は、おおやけの空間、すなわち、一つの劇場の場所を明確に定めることで演技をはじめたが、その劇場では、彼の言葉こそ至上のものであった(注13)。

このロイ・ポーターの言葉に要約されているように、やぶ医者の街頭宣伝のもっとも重要な特徴は、様相がパロールからエクリチュールに変化しても、なによりも言葉であった。農耕生活から、ある日、突然、漂泊生活のなかに投げこまれたひとびとには、当然のことながら、手にこれといった技術があったわけではない。そこで、もって生まれた口、そこから発する音、言葉の利用がかんがえつかれ、その原初的な宣伝行為が、やがてエクリチュールの段階へと進んでいった。そして、その言葉は、信じやすい近世の患者たちを呪縛することになっていった

のである。

注

1 Roy Porter, op. cit., p. 106.
2 ibid., p. 194.
3 C. J. S. Thompson, *The Quacks of Old London* (Brentano, 1928), p.170.
4 Roy Porter, op. cit., p. 190.
5 ibid., p. 190.
6 ibid., p. 97.
7 Ned Ward, *The London Spy* (ed. by Paul Hyland, Colleagues Press, 1993), p. 103.
8 『ペスト』、平井正穂訳、中公文庫、五十四頁。
9 Roy Porter, op. cit., p. 116.
10 ibid., p. 102.
11 ibid., pp. 36-7.
12 W. F. Bynum & Roy Porter (eds.), *Medical Fringe and Medical Orthodoxy 1750- 1850* (Croom Helm, 1987), p. 126.
13 Roy Porter, op. cit., p. 94.

第十章　さまざまな物価のなかの薬

次頁の図版は、一五一六年ごろ、お盆の形をした容器に小間物を入れて、街頭を売り歩く行商人の姿をえがいたものである(注1)。服装からみて、地方ではなく、都会での行商人の姿とおもわれる。日常生活に必要な品物がこうして行商されていた一方で、日常性という意味では日用雑貨に決して劣らない病気のための薬も、日常的に行商販売されていた。病気は、人や時を選ばないからである。

この章では、薬代という具体的なものについてかんがえるわけであるから、扱う資料もできるかぎり具体的数値でしめしていきたいとおもう。そして、こうした具体的考察をおこなう場合にも、第一章であげた十五世紀末期から十七世紀初頭にかけての総合物価指数と実質賃金指数に関するあの二つの表を想起しなければならない。これらの表は、イギリス近世の経済的動勢の基本的鳥瞰図をわたしたちにしめしてくれるからである。

近世の医術事情における薬代をかんがえるまえに、近世のその経済的動勢のなかのさまざまの物価についての資料をまず読んでみなければならない。薬代が独立した特異な物価では決してなく、さまざまな物価環境のなかに置いてみなければならないとおもうからである。

ここでは、まず十六世紀末のあるパン屋の家計簿からみてみよう(注2)。

「街頭を売り歩く行商人」（1516年ごろ）

週間経費

家賃（年額三十ポンド）……十一シリング六ペンス
食費（夫婦十三シリング、子供三人七シリング）……十七シリング
食費（職人四人、徒弟二人、女中二人）……一ポンド十二シリング
夫婦と徒弟の衣類代（年額二十ポンド）……七シリング八ペンス
子供三人の衣類と教育費……三シリング
職人四人の賃金（一人分二シリング六ペンス）と
女中二人の賃金（一人分十ペンス）……十一シリング八ペンス
イースト……十シリング
薪……十二シリング
石炭……一シリング四ペンス
袋……一シリング
塩……一シリング
ふるい……一シリング
穀倉賃借料……二シリング
籠代……三ペンス
水代……八ペンス

粉挽き賃（十五シリング）、担ぎ人夫賃（二シリング）……十七シリング
教区司祭への喜捨、救貧税、ごみ収集人夫代、
夜警の心付け……一シリング

六クォーター（四十八ブッシェル）の小麦から
パンを焼くのに必要な費用の総額……六ポンド十三シリング一ペンス

これは店の経営が赤字であることを証明するために提示された資料であるが、十六世紀末の夫婦二人、子供三人、職人四人、女性のお手伝い二人の合計十一人の所帯 household がいかにつましい生活を送っていたかがよくわかる。十六世紀末といえば、総合物価指数と実質賃金指数の表から判断すると、物価は急騰する一方で、実質賃金はあがりはしているものの、一五九〇年代初頭のほぼ三分の二ほどにとどまっていることがわかる。このパン屋の窮状もそのような経済状況のなかから生じたものである。ちなみに、十六世紀末のロンドンにおけるパンの価格（一、八一六グラムにつきペンスで計算）をみると、一五九一年が二・二、一五九二年が二・六、一五九三年が二・九、一五九四年が四・七、一五九六年が六・五、一五九七年が五・六、一五九八年が三・七、一五九九年が四・三ペンスであることがわかる（注3）。一五九六年のパンの価格がほかの年にくらべてかなり高くなっているのは、この年がイギリスの凶作の年だったからである。

さて、総合的な物価環境をかんがえる方法の一つに検認済みの遺産目録の調査をあげることができるだろう。遺産目録を調べることは、その人物の生活水準をもあきらかにするからである。この点に関しては、すぐれた最近の研究（注4）があるので、それを詳細にみてみよう。その研究は、建設業関係の職人階層に関するものである。

まず、一五八〇年から一六五〇年のあいだに死亡したランカシャならびにチェシャの二十四人の大工の遺産目録が発見されているが、その目録群からは、二十四人のうち二十一人が、ほぼ平均一ポンドという評価額（もちろん当時の額）の大工道具類をもっていたことが判明している。また、大工であれば、木材などの資材を保管していたことも当然あったわけで、例えば一六三五年に死亡した一人の大工の場合、七十五ポンド二ペンスに値する資材を蓄えていた。また、一五五〇年から一六〇〇年のあいだのリンカンシャの六十七人の大工の遺産目録群からは、六十七人全員が平均ほぼ十四シリング六ペンスに評価される大工道具類をもっていたこと、そしてそのうち四十九人は資材を残していたことがわかる。また、その四十九人のうち、五ポンド以上に評価することができる資材を残したのがただの三人で、三十二人の資材については、一ポンド以下という評価額が記載されている。

また、一五八六年から翌年にかけての冬期に死亡したリンカンシャのある大工の遺産目録は、非常に細部にわたっている。彼は、まず家のまわりと納屋に木材を残していたが、その評価額が六ポンド十シリング、公園に残していた七本の木が二ポンド十シリング、四本の木材と下見

板が十シリング、舟底用にのこぎりで加工した板数枚が六シリング八ペンス、そして二トンの漆喰が三シリング四ペンスと評価されている。過去をこうしたまことに詳細な文字、数字によって記録しているという点で、遺産目録はじつに貴重な史料だといわなければならないであろう。

また、建具屋の財産についても記録は残っていて、リンカンシャの二人の建具屋のうちの一人は七ポンドと評価されている未加工の資材を残しているし、ランカシャとチェシャの七人の建具屋のうち六人が平均二十ポンドの値の資材と完成建具を残している。

また、一六〇五年に死亡したチェスターのある建具屋の周辺には非常に興味深い事情がみられる。この建具屋は、むろん、ギルド(当時のチェスターではcompanyと呼ばれていた)に所属していたが、その同業組合がある手袋職人の行動について不満を表明している。非常に裕福で、三度もチェスターの町長となったことのあるこの手袋職人は、金にものをいわせ、手袋職人以外の職域にまで進出したらしい。というのは、チェスターの町議会は二度にわたって、彼に木材の商売をやめるよう警告しているのである。しかし、彼は町議会の警告を無視した。その彼の一六〇一年の遺産目録は、チェスター中のあちこちに置かれていた多量の木材が、一一二ポンド六シリングに評価されたことを記載しているし、六ポンド一シリング四ペンスの値の二六、〇〇〇枚の石板を残していたことも記録している。町議会が、彼が所属していた建具屋の同業組合の不満を受け入れ、二度も警告を発したのも当然のことだったといえよう。近世に

おいて、専門性が確立されていなかった事情についてはすでに述べたが、この手袋職人の場合も、専門外の商売の領域にまで手をのばしたことが紛争の原因であった。

つぎに、石工の場合、原材が重量のかさむ石であることもあって、残した道具類が遺産目録に記載されることが圧倒的に多いが、原材に関する記載がないわけではない。例えば、一人の石工が残したのは木材だけであったが、もう一人は十シリングの壁用石材を残しているし、またべつのもう一人は四ポンド七シリングの珪石と石の破片を残しており、チェシャで一六三三年に死亡した石工の遺産目録には、評価額十シリングの採石場の石材と、そのほか評価額一ポンド十シリングの採石場の一部が記載されている。

建設業関係のそのほかの職人たちについてはどうであろうか。ランカシャとチェシャの二人の左官については、道具だけが記載されているだけで、評価額は書かれていない。死亡して、評価額がつかない左官道具だけを残したわけである。また、一五八八年に死亡したマンチェスターのあるガラス職人は、ガラスならびに商売に必要なほかの資材ももっていたが、十六シリング八ペンスの負債をふくむ商売用の現金も残している。一六三三年に死亡したある鉛工の場合は、当時としてはかなり羽振りがよかったとみえ、その遺産目録では、道具類と鋳型と天秤などが二ポンド十二シリング六ペンスと評価されているし、すぐに使える資材類のストックが五十ポンドと評価されている。一方、レンガ職人で遺産目録を残している例はきわめてまれだが、リンカンシャの一人のレンガ職人の場合、道具類と、少しの木材、積み枠、はしごなどが

十三シリングと評価されている。

ただ、このような近世の建設業関係の職人たちの場合、念頭にいれておかなければならない事情が一つあることを指摘しなければならない。それは、普通の民家や農家の小規模の普請工事に関する記録である。こうした普請工事は、むろん、遺産目録に数字としてでるものではないが、小規模の労働の軌跡は、対象が政府や大学や教会といった識字率の高いひとびとでなかったこともあって、歴史の記録には残っていない。したがって、建設業関係の職人階層については、このようないわば負の記録があった点も指摘しなければならない。

さて、買い物という形の支出についてはどうであろうか。つぎにしめすのは一五九六年五月七日のケントのある牧師の買い物についての記録である（注5）。

小鳥と雄鹿模様の上物大判ベッド上掛け……二ポンド十シリング
垂れ幕付きストライプ入りカーテン一式……一ポンド八シリング
並製上掛け……一ポンド二シリング
中掛け毛布二枚……一ポンド十三シリング六ペンス
オランダ製長枕……一ポンド四シリング

この牧師は、これらのものを、商品を馬に背に乗せて売り歩いていた行商人から買っている。それにしても、この牧師が、支出という点で一般民衆からかなりかけ離れていた点も忘れてはならないであろう。

一方、余暇に関する事情について述べるとすれば、まず第一に、こうした近世の経済状況のなかで、一般民衆には余暇などほとんどなかった点を指摘することから述べなければならないであろう。例えば、一般のひとびとの手にもとどくものとしてチャップブックというものがあったが、そのチャップブックについて、最近のある研究はつぎのように述べている。

ロバート・グリーン（一五五八―九二年）の『パンドスト』（『ドラスタスとフォーニアの物語』としても知られている）は、シェイクスピアの『冬物語』の筋を提供したが、一五八八年には一シリングの値段であった。しかし、廉価のそのチャップブック版の方が貧しいひとびとにはたいへん人気があった（注6）。

要するに、貧民たちは、日常の必需品以外には一シリングもだせなかったのである。これに類似した見解はべつの研究のなかにもみられる。

……本はたしかに安くはなかった。六ペンスのうすい四つ折判の芝居本は、一労働者、あるいは熟練職人の収入をゆうに越えた支出になりえたし、本が、それを読むことができるとおもわれる多くのひとびとの手のとどかない価格をつけられていたことはあきらかである（注7）。

こうした最近の研究にみられる見解は、さきのパン屋の家計簿に照らしてみても正しいものであることがわかるであろう。一シリングといえば、一週間にパン屋で使用する塩の費用であるし、六ペンスといえば、ほぼ一週間分の水の費用に匹敵する額である。

近世の一般民衆はおおむねきびしい物価事情のなかで生活していたわけで、生きることにとっての重要さの序列からすれば、余暇にあてる費用など論外であったといえよう。しかし、生きることにとっての重要さの序列という意味では、薬代は最低生存条件のつぎにくるほど重要であったはずである。病気を原因とする痛みや苦しみは、人や時間を選ばないし、場合によっては、人間の生存さえ脅かすからである。

近世のひとびとの生活においてそのような重要な位置を占めていた薬は、いったい、どのくらいの値段のものだったのであろうか。さきのパン屋の家計簿や建設業関係の職人たちの遺産目録を念頭において、近世の、とくにやぶ医者の売薬の価格を、いままでに引用した資料をふくむさまざまな資料から拾いあげてみよう。

飲み薬……一瓶、二〜三シリング

……半パイント、二シリング

……一瓶、半ギニー（つまり、十一・五シリング）

粉薬……二包、二シリング六ペンス

錠剤……一錠、一ペニー（つまり、十二分の一シリング）
……三ダース、三シリング

やぶ医者の売薬に関しては、価格の統一的規準というものはなかったわけだから、ほぼ無作為に薬代を抽出してみたが、やぶ医者の売薬でさえ、物価事情のなかでは安いものともいえないであろう。やぶ医者たちが一段高い台のうえから呪文のような早口の口上とともに行商していた薬については、買う側と売る側の二面からかんがえる必要がある。すなわち、買う側のひとびとにとって、それは、少し高いが、生活費をなんらかの形で工夫すれば入手できるものであった。そして、言葉を駆使してひとびとをいわば呪縛していた売る側のやぶ医者にとっては、自分の商品である売薬は相当の収入源になった。近世のイギリスにやぶ医者という生活者が生存できた背景には、需要と供給のこうした一種のからくりもあったのである。

注

1 モリー・ハリスン、『買い物の社会史』、工藤政司訳、法政大学出版局、四十五頁。
2 同書、六十二～三頁。
3 B. R. Mitchell, *British Historical Statistics* (Cambridge UP, 1990), p. 769.
4 cf. Donald Woodward, 'Wage rates and living standards in pre-industrial England', *Past and Present*, #91, 1981, pp. 28-46.
5 モリー・ハリスン、九十一頁。

6 Leslie Shepard, *The History of Street Literature* (David & Charles, 1973), p. 28.

7 Victor E. Neuburg, *Popular Literature* (Penguin, 1977), p. 48.

第十一章　異人としてのやぶ医者

やぶ医者といわれていたひとびとは、いったい、どのようなひとびとだったのであろうか。わたしは、彼らの個々人の人格やひととなりを問題にしようというわけではない。多層的、重層的な流動性を内包した近世社会を漂泊していたやぶ医者の存在形態をかんがえてみたいのである。定義できない非合法すれすれの生活を送り、どこからともなく現れ、町や村の一隅をいわば即席演劇の空間にしてしまい、パロールの面でもエクリチュールの面でも誇張語法を濫用し、呪文のごとき口上で聞く者を呪縛し、患者側の収入とのバランスのなかで決定された価格の売薬を行商していたやぶ医者とは、いったい、何者だったのだろうか。

わたしは、この章では、そのやぶ医者の存在を、商人としての形態、口演者（ほとんど演技者といってもいいだろう）としての形態、そして生活者としての形態、という三つの様相からかんがえてみたい。このような把握の仕方でもかんがえないかぎり、ＯＥＤが陥っている定義的困惑にわたしたちもとらわれてしまうとおもうからである。

まず、商人としての形態からかんがえてみよう。やぶ医者は、町や村を巡歴しながら、売薬を行商していたのであるから、民間治療者であると同時に、まずれっきとした商人であったといえるだろう。やぶ医者は、テューダー朝からスチュアート朝になるにつれて、エクリチュー

ルという手段を獲得することによって、個人営業でありながら企業性を帯びるようになる。しかし、近世初期のやぶ医者は、商業資本主義の波に乗ったわけではなく、いってみれば原初的な商人だったのである。その商人の原初態について、アグネ・ジェラールは「商人は、閉ざされた社会に、輸出入の生みだす混乱を持ちこむ」ものとしてとらえている（注1）。

近世初期のイギリス社会におけるやぶ医者についても、ジェラールのこの見解は該当するといえよう。やぶ医者という商人も、〈整合空間〉のなかでも定住性の高い農耕社会に、売薬という商品をもちこみ、その定住的、日常的空間にある種の混乱をもたらし、その混乱のなかになりわいを成立させていた。第三章で引用したダニエル・ターナーの描写やロイ・ポーターの再現図からもわかるとおり、やぶ医者は、「閉ざされた」定住社会のなかに、まずそぐわない異形の人として登場した。その異形を目にすることによってひとびとのなかに生じた混乱は、まるで呪文のような早口の口上とともに販売されるその異形の人の商品、つまり売薬によっていっそう助長されることになった。

つぎに、混乱を助長するそうした口吻をもっていたやぶ医者、すなわち口演者としての形態をかんがえてみなければならない。第二章の終わりでわたしは〈異空間〉の言語が犯罪的〈異空間〉だけの占有物ではなく、やぶ医者たちにもそれなりの異言語があったと述べた。しかし、やぶ医者のその異言語は決して隠語ではなかった。というのは、隠語の目的が、〈整合空間〉のなかに〈異空間〉を穿ち、その〈異空間〉のなかだけで通用することであるのに対し、やぶ医

者に異言語があったとすれば、それは商売を遂行する重要な手段であったので、〈異空間〉のなかだけで通用するものであってはならなかったからである。

やぶ医者の口吻はたしかに呪文のようなものであっただろう。また、自分もよくわかっていない異国の言葉を多く使ったであろう。しかし、それは、聞いている者たちを呪縛するという一つの演劇的方式の一部であった。そして、その演劇的方式は、町や村の一隅を即席の舞台に変え、ひとびとを寄せ集め、まず呪縛することからはじめられたのである。したがって、隠語が別種の空間の住人に通用することを否定しているのに対し、やぶ医者の口演は、パフォーマンス性とともにひとびとを行商の場にとりこむことを目的にしていた。わけのわからない言葉も異国の言葉も、やぶ医者の演技の重要な一部なのである。

ロイ・ポーターはこの点に関して、興味あるヒントを提示している。すなわち、「ちょっとしたおもしろみと気ばらしがすでに病人の気分をよくしていたのである」(第三章参照)。口演は早口にすぎたかもしれないし、使われる言葉も聞いたことのないものであったかもしれないが、やぶ医者たちのパフォーマンスには、病人の気分をよくする「おもしろみ」があったのである。わけがわからないまま、やぶ医者のパフォーマンスを聞き、みているうちにひとびとはふと笑いを浮かべたであろう。このようなパフォーマンス的効果、演劇的効果こそ、やぶ医者たちが自分たちの商売のトポスへの導入部として計算に入れていたものなのである。したがって、やぶ医者のパロールは決して隠語ではなかった。というより、それはなりわいの重要な手段であ

ったので、反隠語的といってもいいだろう。この意味では、非合法すれすれの生活を送っていたものの、やぶ医者は犯罪的集団とは決定的に異なっていた。

さて、ロイ・ポーターの再現図にもあるように、やぶ医者には道化が同行していた。スチュアート朝以後にまで、「道化いなけりゃ、やぶ医者 mountebank かたなし」(注2)といったことわざが人口に膾炙していたほど、道化はやぶ医者にとって必須の存在であった。即席の演劇的空間のなかで、わが国の漫才に似た道化たちのやりとり、珍しい猿や鰐といった動物を導入部として、やぶ医者の口演がはじまる。この口演が、まるで呪文のような早口でよどみなくおこなわれたのである。

つっこみ役とぼけ役になった道化のパフォーマンスに笑わされたひとびとは、呪縛されているという意識もないまま、こんどはやぶ医者の口演に笑うのである。こうして町や村の一隅にやぶ医者のなりわいのトポスが顕現する。いってしまえば、さきのことわざにあるように、道化が提供する笑いはやぶ医者にとって不可欠なものなのである。近世のイギリスには、民衆娯楽の受難史のような面があって、民衆が蝟集する祝祭的事象はほとんどことごとく排斥されていた。このような排斥的姿勢を現出したのも、〈整合空間〉のイデオロギーとなっていた近世の宗教であった。

このような歴史的状況のなかで、売薬ばかりでなく、笑いも提供していたやぶ医者が存続しえたのも、まさにこの笑いという要因があったからであろう。すなわち、笑いはやぶ医者の生

The Anatomie
of Abuſes:

Containing

A Diſcouerie, or brief Summarie of ſuch Notable Vices and Corruptions, as nowe raigne in many Chriſtian Countreyes of the Worlde: but (eſpecially) in the Countrey of AILGNA: Together, with moſt fearefull Examples of Gods Iudgementes, executed vpon the wicked for the ſame, aſwell in AILGNA of late, as in other places, elſewhere.

Very godly, to be read of all true Chriſtians, *euery where: but moſt chieſly, to be regarded in England*

Made Dialogue-wiſe by PHILLIP STVBS.

And now newly reuised recognized, and augmented the third time by the ſame Author.

MATH. 3. Ver. 2.
Repent, for the kingdome of God is at hande.

LVKE. 13. Ver. 5.
I say vnto you, except you repent you shall all periſh.

¶ Printed at *London*, by *Richard* Iones 12. October. 1584.

スタブズ、「悪習の分析」(1584年版)

存条件の一つだったのである。笑いをもたらす民衆的娯楽あるいは民衆的祝祭はどのような形の排斥を受けていたのであろうか。この点をもっともよく描写しているものとして、フィリップ・スタブス（一五八三―九一年ごろ活躍）の『悪習の分析』（一五八三年）をあげることができるであろう。前頁にあげたのは初版の翌年に出版されたものの表紙である。

スタブズのいう悪習のなかには、マナーや服装に関するものまでふくまれているが、ここでは、ヨーロッパの民衆に深く根ざした祭の君主、あるいは阿呆祭などと邦訳されるLord of Misruleという祝祭についての彼の非難を読んでみよう。皮肉なことに、彼の排斥的意図とはうらはらに、この部分は近世におけるイギリス版Lord of Misruleの詳細な解説にもなっている。

まず、教区のすべての乱暴者たちがつどい、頭領（あらゆるいたずらのなかで）を選び、その頭領に「わが祭の君主」という称号をさずけ、その男を大仰な荘重さで王位につかせ、自分たちの王にする。聖職に任命されたこの王は、二〇人、四〇人、六〇人あるいは一〇〇人もの自分に似た元気旺盛の大食漢を選び、この尊大な王に仕えさせ、その高貴なる身柄を護衛させる。そのあと、王になった男は、すべての家来にみどり、黄色、あるいはなにかほかの薄いむちゃくちゃの色の制服を着せる。そして、家来たちは、それでもまだ十分には俗っぽく（下品で）ないと言わんばかりに、金の輪や宝石のちりばめられたスカーフやリボンやレイスで身を飾りたてる。これがすむと、暗闇でキスしてやるかわりに、可愛い娘や恋人

からおおかた借りた高価なハンカチーフを手に、両足のまわりや、場合によっては肩や首のところに二〇個から四〇個もの鈴をつける。こうして、準備万端ととのえると、家来たちはそのうえに棒馬、龍、その他の古い飾りものをもちだし、同時に下品な笛吹きと耳をつんざくような太鼓たたきをしつらえ、悪魔の踊りをはじめる。そして、笛吹きは笛を鳴らし、太鼓たたきは割れんばかりの音をたてて、足は踊り、鈴をジャラジャラ鳴らし、ハンカチーフは気のふれた人間のように首のまわりで揺れ、棒馬やほかの怪獣は道の真ん中で小競り合いをしながら、この邪教の一行は教会と教会の境内をめざして行進する。そして、こんな具合に一行は教会の中（牧師が祈りをささげていようと、説教の途中であろうと）へと入り、あまりにもうるさい騒音をたて、まるで人の形をした悪魔のように、教会内で踊り、頭上でハンカチーフをふりまわすので、誰一人として牧師の声を聞くことができない。すると、教会の一同はこの愚かな連中をみて、目をこらし、笑い、嘲笑し、こういったとんでもない野外劇がこんな形で祝われるのをみるために、台や椅子のうえに乗る。これが終わると、家来たちは教会のまわりを何度もまわり、やがて教会の境内に入る。そこには、ふつう夏の広間、あずまや、園亭、宴会場がつくられており、そのなかで彼らは、日なが一日、そして（ひょっとすると）一晩中酒宴をはり、飲み騒ぎ、踊る。そして、こうしてこれらの俗なる凶暴な安息日を過ごすのである。

彼らはまた戯文やほかの像のようなもののえがかれた何枚かの紙をもっており、この紙を

「わが祭の君主のおしるし」だとのたまう。彼らは、自分たちの異教世界、極悪非道の行為、邪神崇拝、泥酔、装飾、そして得体のしれないものを続けさせるために金をだすすべての者にこの紙をあたえる。そして、彼らに対して柔軟な態度のとれない者、彼らの悪魔の紋章に金をださない者は少なからず嘲笑され、侮辱される。そして、なかには思慮分別をすっかり失い、彼らの人非人的行為を続けさせるために金をだすばかりでなく、帽子などに公然と彼らのおしるしや紋章をつける者もいる。しかし、気をつけるがいい。これらのものは、悪魔がそれによって神の子のしもべ、客を見抜く、悪魔のしるし、紋章、烙印、紋なのである。そして、そういったものを身につけているかぎり、「定まった権利と法にはむかう悪魔の軍旗のもとにある」のだ。彼らはイエス・キリストとその掟すべてに対し、悪魔の旗と軍旗のもとに闘っているのである。別の種類の奇矯なうつけ者は、これら地獄の番犬（祭の君主とその仲間）にパン、新しいチーズ、古いカスタード、そしておいしい菓子などを、ある者は一つ、ある者は別のものといったようにあたえる。しかし、うつけ者たちも、これらの呪うべき娯楽の維持のためになんらかのものをもってゆくたびに、悪魔とセイタンに犠牲をささげることになるということを知れば、後悔し、手をさしのべることをやめるであろう。

近世のイギリス社会に底流していたこのような排斥的風土のなかで、なぜやぶ医者は存続しえたのであろうか。まず第一には、やぶ医者が定住的日常空間のなかに非日常をもちこんだ点

を指摘しなければならない。Lord of Misruleにみられるような身分、地位、性別の逆転にまではいたらなかったものの、商人としてのやぶ医者が少なくとも日常空間のなかに非日常をもちこんだことはまちがいない。しかも、その非日常的トポスにおいて、やぶ医者は、民衆の手のとどく形で病気の治癒を売りものにした。身分、地位、性別を選ばない疾病の治療者が、その非日常的トポスに登場したわけである。スタブズの姿勢にみられるのは、日常の労働の時間の一時的停止に対する誹謗であり、日常の日課の忘却に対する非難である。しかし、やぶ医者にとって、労働的時間から非労働の時間を盗むこと、日課不在の空間を創造することこそ目的だったのである。

つぎに、さらに重要な笑いという要因をあげなければならないであろう。道化に誘導されて、民衆の耳に入ってくるやぶ医者のパロールは、呪文のようであり、早口であったかもしれない。しかし、排斥的風土のなかで民衆がやぶ医者を受容したのは、そこに共感するものがあったからである。それは、やぶ医者の口演に民衆が呼応したからであって、いうならばその非日常的トポスに両者の一種の共振構造が成立したからにほかならない。この共振という現象においても、やぶ医者の口演は隠語とは正反対のものであろう。

では、笑いのうちに発現するこの共振構造は、近世特有のものだったのであろうか。この共振構造には、そのような限定はないはずで、その淵源をさぐれば、おそらく古代にまでさかのぼることができるであろう。すなわち、この共振構造はその起源を人類史の古層にもっている

ともいえる。したがって、近世イギリスのやぶ医者がもたらした笑いは、人類史の古層に起源をもつその共振構造が、ただ単に近世という時代において、やぶ医者という具現者をえて、歴史のなかに発現しただけなのである。近世のひとびとは、まったく意識することなく、やぶ医者が創造する笑いのなかで、いわば古代人とともに笑っていたのである。やぶ医者と民衆との受容的関係は、このように理解してはじめて、真にとらえることができるはずである。

最後に、やぶ医者の生活者としての形態についてかんがえてみよう。わたしがたてた仮説的道標としての〈整合空間〉と〈異空間〉のそれぞれの特徴を、やぶ医者という生活者を中心に置いてあらためて列挙してみよう。

〈整合空間〉	〈異空間〉
秩序	非秩序
共同体	混沌
既知	未知
可解	不可解
みえるもの	みえないもの
内	外
規範	自由
日常	非日常

定住（農耕）　漂泊
ふだん着　異形
平地　森林地帯
日課　遊戯

この図式は、むろん、十全なものではないが、このような粗笨な図式でさえ、反定義的な生活者としてのやぶ医者の生存形態にある程度の光をあてることになるであろう。

それでは、やぶ医者はこのような特徴をもったどちらの空間に与する生活者だったのだろうか。いってしまえば、やぶ医者は〈整合空間〉にも〈異空間〉にも与していなかったのである。あえていえば、彼らは〈整合空間〉と〈異空間〉のはざまを生きていたというべきであろう。すなわち、やぶ医者は、ふだんはみえない未知の混沌とした森林地帯（都会であれば、袋小路や裏通り）に漂泊していて、ある日、異形をまとい、秩序や規範や日課にしばられた共同体のなかに登場し、なかば遊戯的な形でその共同体のなかに非日常的空間を穿つ生活者であった。

こうした意味で、やぶ医者は、〈整合空間〉と〈異空間〉という社会の二つの領域に同時に生きる両界棲息者、すぐれて融通無碍の一種の両棲類であった。そして、その両棲類は、平地の内側でなりわいをおこない、やがて共同体からみえない外側へとふたたび韜晦していった。このようなやぶ医者は、〈整合空間〉に与する普通の人間ではなく、存在的に〈整合空間〉になじまず、かといって〈異空間〉にだけいては生活できない人間であった。このような普通の規準

では定義することができない両棲類のような人間をどのように名づけたらいいのであろうか。〈整合空間〉になじむことなく、つねに最終的には〈異空間〉の混沌のなかに韜晦するやぶ医者を、わたしは異人と呼びたいのである。

注

1　『ヨーロッパ中世社会史事典』、池田健二訳、藤原書店、一七九頁。

2　Sandra Billington, *A Social History of the Fool* (Harvester Press, 1984), p. 59.

参考文献（英文、邦文）

参考文献（英文、アルファベット順）

John Ashton (ed.), *Modern Street Ballads* (Chatto & Windus, 1888)

A. L. Beier, *Masterless Men* (Methuen, 1985)

A. L. Beier, *The Problem of the Poor in Tudor and Early Stuart England* (Methuen, 1983)

L. M. Beier, *Sufferers and Healers* (Routledge & Kegan Paul, 1987)

Sandra Billington, *A Short History of the Fool* (Harvester Press, 1984)

Peter Burke & Roy Porter (eds.), *The Social History of Language* (Cambridge UP, 1988)

W. F. Bynum & Roy Porter (eds.), *Medical Fringe and Medical Orthodoxy 1750-1850* (Croom Helm, 1987)

W. F. Bynum & Roy Porter (eds.), *Companion Encyclopedia of the History of Medicine,* vols. 1 & 2 (Routledge, 1993)

M. L. Cameron, *Anglo-Saxon Medicine* (Cambridge UP, 1993)

S. Campbell, B. Hall, D. Klausner (eds.), *Health, Disease and Healing in Medieval Culture* (Macmillan, 1992)

Rick J. Carlson (ed.), *The Frontiers of Science and Medicine* (Wildwood House, 1975)

Sandra Clark, *The Elizabethan Pamphleteers* (Fairleigh Dickinson UP, 1985)

D. C. Coleman, *The Economy of England 1450-1750* (Oxford UP, 1986)

Vernon Coleman, *The Medicine Men* (Temple Smith, 1975)

John Payne Collier (ed.), *A Book of Roxburghe Ballads* (Longman, 1847)

Roger Cooter, *Studies in the History of Alternative Medicine* (Macmillan, 1988)

J. C. K. Cornwall, *Wealth and Society in Early Sixteenth Century England* (Routledge & Kegan Paul, 1988)

Culpeper's Complete Herbal, and English Physician (Manchester, 1826)

Angus Fraser, *The Gypsies* (Blackwell, 1992)

B. L. Gordon, *Medicine throughout Antiquity* (F. A. Davis, 1949)

Christopher Hill, *The World Turned Upside Down* (Penguin, 1988)
Christopher Hill, *A Nation of Change and Novelty* (Routledge, 1990)
Christopher Hill, *Antichrist in Seventeenth-Century England* (Verso, 1990)
A. V. Judges, *The Elizabethan Underworld* (E. P. Dutton & Co., 1930)
Arthur F. Kinney (ed.), *Rougues, Vagabonds, and Sturdy Beggars* (The Univ. of Massachusetts Press, 1992)
Irvine Loudon, *Medical Care and the General Practitioner 1750-1850* (Clarendon Press, Oxford, 1986)
Eric Maple, *Magic, Medicine and Quackery* (Barnes Co., 1968)
Donald B. McKerrow, *The Works of Thomas Nashe* (Basil Blackwell, 1966)
Angus McLaren, *A History of Contraception* (Basil Blackwell, 1990)
John L. McMullan, *The Canting Crew* (Rutgers UP, 1984)
John Mann, *Murder, Magic, and Medicine* (Oxford UP, 1992)
B. R. Mitchell, *British Historical Statistics* (Cambridge UP, 1988)
V. E. Neuburg, *Popular Literature* (Penguin, 1977)
Roy Porter, *Health for Sale* (Manchester UP, 1989)
Roy Porter (ed.), *Patients and Practitioners* (Cambridge UP, 1985)
Roy Porter, *Disease, Medicine and Society in England 1550-1860* (Macmillan, 1987)
Mary Prior (ed.), *Women in English Society 1500-1800* (Methuen, 1985)
Claude Quétel, *History of Syphilis* (Polity Press, 1990)
Steve Rappaport, *Worlds within Worlds* (Cambridge UP, 1989)
Barry Reay (ed.), *Popular Culture in Seventeenth-Century England* (Croom Helm, 1985)
Samuel J. Rogal, *Medicine in Great Britain from the Restoration to the Nineteenth Century, 1600-1800* (Greenwood Press, 1992)
Barbara Rosen (ed.), *Witchcraft in England 1558-1616* (The Univ. of Massachusetts Press, 1991)
J. A. Sharpe, *Crime in Early Modern England 1550-1750* (Longman, 1984)
Leslie Shepard, *The History of Street Literature* (David & Charles, 1973)

Leslie Shepard, *The Broadside Ballad* (Legacy Books, 1978)
Edward Shorter, *Doctors and Their Patients* (Transaction Publishers, 1991)
Paul Slack, *The Impact of Plague in Tudor and Stuart England* (Oxford UP, 1990)
Paul Slack, *The English Poor Law 1531-1782* (Macmillan, 1990)
Some further Portions of the Diary of Lady Willoughby (Longman, 1848)
Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* (Penguin, 1988)
Lawrence Stone, *Uncertain Unions* (Oxford UP, 1992)
Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (Penguin, 1978)
C. J. S. Thompson, *The Quacks of Old London* (Brentano, 1928)
Jurgen Thorwald, *Science and Secrets of Early Medicine* (Thames & Hudson, 1962)
M. P. Tilley, *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (The Univ. of Michigan Press, 1982)
Benjamin Walker, *Encyclopedia of Metaphysical Medicine* (Routledge & Kegan Paul, 1978)
J. Walter & R. Schofield (eds.), *Famine, Disease and the Social Order in Early Modern Society* (Cambridge UP, 1991)
Ned Ward, *The London Spy* (ed. by Paul Hyland, Colleagues Press, 1993)
Donald Woodward, "Wage rates and living standards in pre-industrial England", *Past and Present*, #91, 1981.

参考文献（邦文、アイウエオ順）

赤坂憲雄、『異人論序説』、筑摩書房。
ウィリアム・ウィルフォード、『道化と笏杖』、高山　宏訳、晶文社。
マックス・ヴェーバー、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、大塚久雄訳、岩波文庫。
イーニッド・ウェルズフォード、『道化』、内藤健二訳、晶文社。
ジョン・オーブリ、『名士小伝』、橋口・小池訳、冨山房百科文庫。
角山　榮、川北　稔（編）、『路地裏の大英帝国』、平凡社。
川北　稔、『民衆の大英帝国』、岩波書店。
川北　稔（編）、『「非労働時間」の生活史』、リブロポート。
T・カプチャック、M・クラウチャー、『ヒーリング・アーツ』、上野・野口訳、春秋社。
ジャンヌ・カルボニエ、『床屋医者パレ』、藤川正信訳、福武文庫。
川名隆史、篠原敏昭、野村真理、『路上の人びと』、日本エディタースクール出版部。
J・R・ギリス、『〈若者〉の社会史』、北本正章訳、新曜社。
カルロ・ギンズブルグ、『闇の歴史』、竹山博英訳、せりか書房。
蔵持不三也、『シャリヴァリ』、同文舘。
E・H・ゴンブリッチ、『棒馬考』、二見・谷川・横山訳、勁草書房。
アグネ・ジェラール、『ヨーロッパ中世社会史事典』、池田健二訳、藤原書店。
柴田三千雄ほか編、『民衆文化』、岩波書店。

スーザン・ソンタグ、『隠喩としての病、エイズとその隠喩』、富山太佳夫訳、みすず書房。
立川昭二、『病気の社会史』、NHKブックス。
ウィリアム・ダンピア、『最新世界周航記』、平野敬一訳、岩波書店。
ダニエル・ディフォー、『ペスト』、平井正穂訳、中公文庫。
ジャン・デュヴィニョー、『笑いのたくらみ』、利光哲夫訳、東海大学出版会。
土井正興（編）、『ヨーロッパ中世の民衆と蜂起』、三省堂。
長島伸一、『世紀末までの大英帝国』、法政大学出版局。
シャーウィン・ヌーランド、『医学をきずいた人びと』（上・下）、曽田能宗訳、河出書房新社。
ピーター・バーク、『ヨーロッパの民衆文化』、中村・谷訳、人文書院。
ハワード・ロリン・パッチ、『異界』、黒瀬・池上・小田・迫訳、三省堂。
浜林正夫、神武庸四郎（編）、『社会的異端者の系譜』、三省堂。
モリー・ハリスン、『買い物の社会史』、工藤政司訳、法政大学出版局。
コンスタンティン・フォン・バルレーヴェン、『道化　つまずきの現象学』、片岡啓治訳、法政大学出版局。
クリストファー・ヒバート、『ロンドン』、横山徳爾訳、朝日イブニングニュース社。
ミシェル・フーコー、『狂気の歴史』、田村　俶訳、新潮社。
ミシェル・フーコー、『臨床医学の誕生』、神谷美恵子訳、みすず書房。
ロバート・C・フラー、『オルタナティブ・メディスン』、池上良正・富美子訳、新宿書房。
J＝L・フランドン、『農民の愛と性』、蔵持・野池訳、白水社。
バーン&ボニー・ブーロー、『売春の社会史』、香川・家本・岩倉訳、筑摩書房。

マルク・ブロック、『フランス農村史の基本性格』、河野・飯沼訳、創文社。
イヴ＝マリ・ベルセ、『祭りと叛乱』、井上孝治監訳、新評論。
ハイナー・ベーンケ、ロルフ・ヨハンスマイアー（編）、『放浪者の書』、永野藤夫訳、平凡社。
松井壽一、『薬の文化誌』、丸善。
ロベール・マンドルー、『民衆本の世界』、二宮・長谷川訳、人文書院。
トマス・モア、『ユートピア』、澤田昭夫訳、中公文庫。
キース・ライトソン、『イギリス社会誌１５８０―１６８０』、中野　忠訳、リブロポート。
ピーター・ラスレット、『われら失いし世界』、川北・指・山本訳、三嶺書房。
ジャック・ロシオ、『中世娼婦の社会史』、阿部・土浪訳、筑摩書房。
Ｃ・Ｇ・ユング、『パラケルスス論』、榎本真吉訳、みすず書房。

あとがき

英文学の現代詩を専門にする者が、なぜこのような社会人類学的、あるいは歴史人類学的領域に関心をもつのか、とたびたびひとに聞かれたし、また自分でも、どのへんに原点があるのだろうかとしばしば考えてきたが、はっきりしたことはわからなかった。しかし、よく考えてみると、どうやら本書の参考文献にも挙げたイーニッド・ウェルズフォードの『道化』（内藤健二訳、晶文社）に淵源がありそうである。

ともあれ、この本の対象は、quack と蔑称されていたひとびと、イギリスのいわば棄民ともいうべきひとたちである。しかし、その棄民も、ひとたび〈異人〉という概念を導入すると、まったくべつの様相が見えてくることも事実なのである。

〈異人〉は、漂泊空間と定住空間という二つの領域を考えると、そのどちらにも自由に往来できる者で、ついには漂泊空間になかへ韜晦する生活者だったのである。その点では、乞食にかぎりなく近い存在だとも言えるだろう。

そうした流氓を資（史）料のなかに探索するということは、イギリスのさまざまな文化現象

(例えば、喜劇)の起点のいくつかを探求することにもなると考えたのである。この本が十全な形でその探求を達成したとは、むろん、思っていない。しかし、近世イギリスの日常性のなかで、流氓がはたしたある文化的役割については、なにがしかの光をあてることができたと思っている。

研究はつねに端緒についたばかりである。したがって、この本にも多くの欠点があるにちがいない。大方のご叱正とご教示をいただければ幸甚である。

この本が世にでることについては、とくに明治大学人文科学研究所の所長福田榮次郎先生にひとかたならぬご努力をいただいた。ここに厚くお礼申し上げたい。また、原稿の段階で、私の研究会 History Workshop のメンバーの一人伊藤左千夫君におおいにお世話になった。ありがとう。また、いろいろとお世話になった象山社の天井茂氏にも厚くお礼を申し上げたい。

一九九五年十二月十五日

岡崎

索　引（事項ならびに人物）

69,73,76,77,85
個人　119～120
コンドーム　122
＜サ行＞
さらし台　19,23
ジェントリ　15,32,184
ジェントルマン　15,33,40,71
時間的なもの　123,136,193
四季裁判　25,38,77
識字率　35,37,72,93,159,213
司法制度　24,26
主教　20,127
自由所有権保有者　15,41
熟練職人　35
呪術　162
受胎審査陪審　25,26
巡回裁判　25,26,38,77
小治安裁判　25,38,77
女子学生　133
スリ　59～65
＜整合空間＞　13～41
性差意識　134
聖職の特典　25,26
先決問題要求の虚偽　142,143,151
占星術　104,106,168,176,183
＜タ行＞
賃金　35,36,37,75,177,206
『トーリ・タトラー』　181,187
道化　88,223
都市細民　39,40,68,76,90,93
土地の囲い込み　15,38,44,156
徒弟　20,21,37,39,40,68,208
『ドラスタスとフォーニアの物語』

事項（アイウエオ順）

＜ア行＞
『悪習の分析』　225
阿片　118
阿呆祭　225
アルセイシア　46,47
＜異空間＞　13～41
イクセタ　133
医業規制法　127
遺産目録　210,211,212,213,215
「医師ならびに外科医の任命に関する法」　107,108,109,110,164
イン　69,70
ＯＥＤ『オクスフォード英語辞典』,53,87,89,90,92,119,142,145,146,147,148,149,150,151,220
王立ロンドン医科大学　94, 96,107～117,125～134,157,164,183
＜カ行＞
カンタベリ　133
贋造通行手形　70～75
教会法　131
驚異の年　198
教区　19～23
教育革命　132
救貧法　18～23
矯正院　21,22
「黒い審判」　114
決闘　158
検尿師　96,98
乞食　18,19,28,29,30,31,37,38,

無所有　28
鞭打ち　19〜23,28
物の所有　119
＜ヤ行＞
やくざ　64
香具師　92
やぶ医者の再現図　99〜100
ユマニスム　119
妖術　108,166,168,185
ヨーマン　15,150
＜ラ行＞
離郷　17,24,28,37,41,109,156
ルネサンス　30,119,129,130,131,132,203
錬金術　106,107
『ロビンスン・クルーソウ』　197
ロンドン薬局方　115,116,133,157,183
＜ワ行＞
笑い　222,225,228
214
奴隷　19,23
＜ナ行＞
農民　33,41,93,109,156
ノリッジ　133
＜ハ行＞
売春婦　58,59,60,63,64,65,66
梅毒　121,139,140,141,146
パドヴァ　128,129,130,134
犯罪　28,38,60,77,78,79,80
半熟練職人　35,37
『パンドスト』　214
万能薬神話　161,202
ビラ　91,199,202
貧困の脱聖化　31
物価　35,36,37,75,206,209,215,216
『冬物語』　214
プロテスタンティズム　30,93,123,193
『ペスト』　197
＜マ行＞
魔術　108,162,163,168,176
麻酔　107,112,174,177
祭の君主　225,228
身分　28,33,39,228
耳の焼きおとし　20,23
「民間治療師の特許状に関する法」107,109,130,131
民生委員　20,21
民訴裁判　24
無時間的なもの　123,136,193
無宿者　21,60,69

コリット John Collet, 129
コルドゥス Valerius Cordus, 112
コリアト Thomas Coryate, 92, 146,147
コタ John Cotta, 167,168
クロウリ Robert Crowley, 74
カルペパー Nicholas Culpeper, 113,115,116,117,179,183
＜D＞
ディフォウ Daniel Defoe, 197, 198,199
デカー Thomas Dekker, 47,52
デル William Dell, 130,132
ダイクス Oswald Dykes, 151
＜E＞
エリオット Thomas Eliot, 145, 150
エラスムス Desiderius Erasmus, 129
＜F＞
フィッツハーバート Sir Anthony Fitzherbert, 29
フィッツハーバート Sir John Fitzherbert, 53
フーコー Michel Foucault, 174
フランチェスコ Francesco d' Assisi, 28,29,30,31,118
＜G＞
ゲイル Thomas Gale, 150,163, 164
ジェラード John Gerard, 146
ジェラール Agnés Gerhards, 119, 120,221

人名（アルファベット順）

＜A＞
アディスン Joseph Addison, 195
アンダスン Gilbert Anderson, 91
アンドルー Lawrence Andrew, 147,149
アーチャー John Archer, 201
オーブリ John Aubrey, 180,187
オードレイ John Awdeley, 47, 49,53,66,73
＜B＞
ベイコン Francis Bacon, 130,132
バクスター Richard Baxter, 148
バーカー Doctor Barker, 136
バンデルロ Matteo Bandello, 112
バイア L. M. Beier, 152
ビンズ Joseph Binns, 138,141（カルテ）
バード Andrew Boorde, 149,185, 186
ブルック Arthur Brooke, 112
バーク Peter Burke, 57
バートン Robert Burton, 96,115
＜C＞
カルボニエ Jeanne Carbonnier, 115
キーズ John Caius, 130,132
チャイルドリ Joshua Childrey, 148
クレッグ James Clegg, 86,87

ラム Charles Lamb, 115
ラティマ Hugh Latimer, 131
リリィ William Lilly, 184
リナカ Thomas Linacre, 128～132
ロキャ Lionel Lochyer, 85
ラフキン Thomas Luffkin, 111, 190
<M>
マップ Sally Mapp, 182
マーティン John Marten, 193
マーヴェル Andrew Marvell, 85
モンゴマリ Alexander Montgomery, 146
モンタギュ Mary Wortley Montagu, 192
モア Thomas More, 16,17,24, 38,129
マグルトン Lodowick Muggleton, 131,132,179
<N>
ナッシュ Thomas Nashe, 150
ニューレンブルグ Frederick・van Neurenburg, 195
ノストラダムス Nostradamus, 106
<P>
パレ Ambroise Pare, 115,116
パラケルスス Paracelsus, 106
ポーター Roy Porter, 98,100, 147,195,203,222,223
ピープス Samuel Pepys, 122,123
ギフォード George Gifford, 165, 166
グラント John Graunt, 121,142
グレイトレイクス Valentine Greatrakes, 84,85
グリーン Robert Greene, 47,51, 214
グルー Nehemiah Grew, 118
グレイ Edward Grey, 96
グロウシン William Grocyn, 129
<H>
ヘインズ Joseph Haines, 97,100
ハリ John Halle, 169,170
ハーマン Thomas Harman, 47, 50
ハーヴィ William Harvey, 114, 130,132
ハーヴィ Gideon Harvy, 179,180
ヒポクラテス Hippocrates, 118
ホブズ Thomas Hobbes, 30
<I>
アイリッシュ David Irish, 195
アイシャム Sir Thomas Isham, 158
<J>
ジョンスン Samuel Johnson, 89,95,115
ジョンスン Thomas Johnson, 115
<K>
キング Gregory King, 31,32,33, 34,44
<L>

174
ウルジ Thomas Wolsey, 128
<Y>
イェイツ John Yates, 119
<R>
リード Sir William Read, 85
ロウズ Hugh Rhodes, 29
リド Samuel Rid, 53
<S>
シェイクスピア William Shakespeare, 88,89,214
ジンメル Georg Simmel, 27
スピンク John Spink, 193
ストーン Lawrence Stone, 144
スタブズ Philip Stubbs, 224～228
シドナム Thomas Sydenham, 118,130,132
シムコッツ John Symcotts, 137
<T>
テイラー John Taylor, 69
トマス Keith Thomas, 143
ターナー Daniel Turner, 96,194, 221
ターナー William Turner, 149
<V>
ヴェルサリゥス Andreas Versalius, 112
<W>
ウォード Joshua Ward, 86
ウォード Ned Ward, 159,196,197
ヴェーバー Max Weber, 30,31
ウィルクス Richard Wilkes, 87
ウィリス Thomas Willis, 117
ウィルモット John Wilmot, 196
ウィラビ夫人 Lady Willoughby, 151,152
ワイズマン Ricahrd Wiseman,